

5

桜井 光

原作 TYPE-MOON

イラスト 中原

Fate Prototype

蒼銀のフラグメンツ

Fate/Prototype 蒼銀のフラグメンツ 5

文／桜井 光

イラスト／中原

原作／TYPE-MOON



角川文庫

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、配信、送信したり、ホームページ上に転載したりすることを禁止します。また、本作品の内容を無断で改変、改ざん等を行うことも禁止します。

本作品購入時にご承諾いただいた規約により、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはありません。

本作品を示すサムネイルなどのイメージ画像は、再ダウンロード時に予告なく変更される場合があります。

本作品の内容は、底本発行時の取材・執筆内容に基づきます。

本作品は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。

この物語はフィクションであり、実在の人物・団体とは関係がございません。



Fate/Prototype

蒼銀のフラグメンツ

5

桜井 光

原作 TYPE-MOON

イラスト 中原

其は、紛うことなき星の光なる。
ならば、そうか。

当世にあつては貴様たちが
余に代わつて世界を救う者か！

Rider

真名はオジマンディアス。古代エジプトのファラオ。ネフェルタリ妃の遺物を召喚の触媒にされたことで、マスターである伊勢三の一族ごと灼き尽くそうとするも、伊勢三少年に自身の最高の友であるモーセの面影を見出したことで思いとどまる。東京湾での決戦でアーチャーとセイバーによって同時展開された宝具に敗れた。その胸には敗北への屈辱ではなく、人の世を救わんとする英雄たちへの晴朗な思いがあった。

俺はここまでだ。
なあ、騎士の王。

輝きの剣を栄光のままに振るう男よ。
——お前は、聖杯に何を願う？

Archer

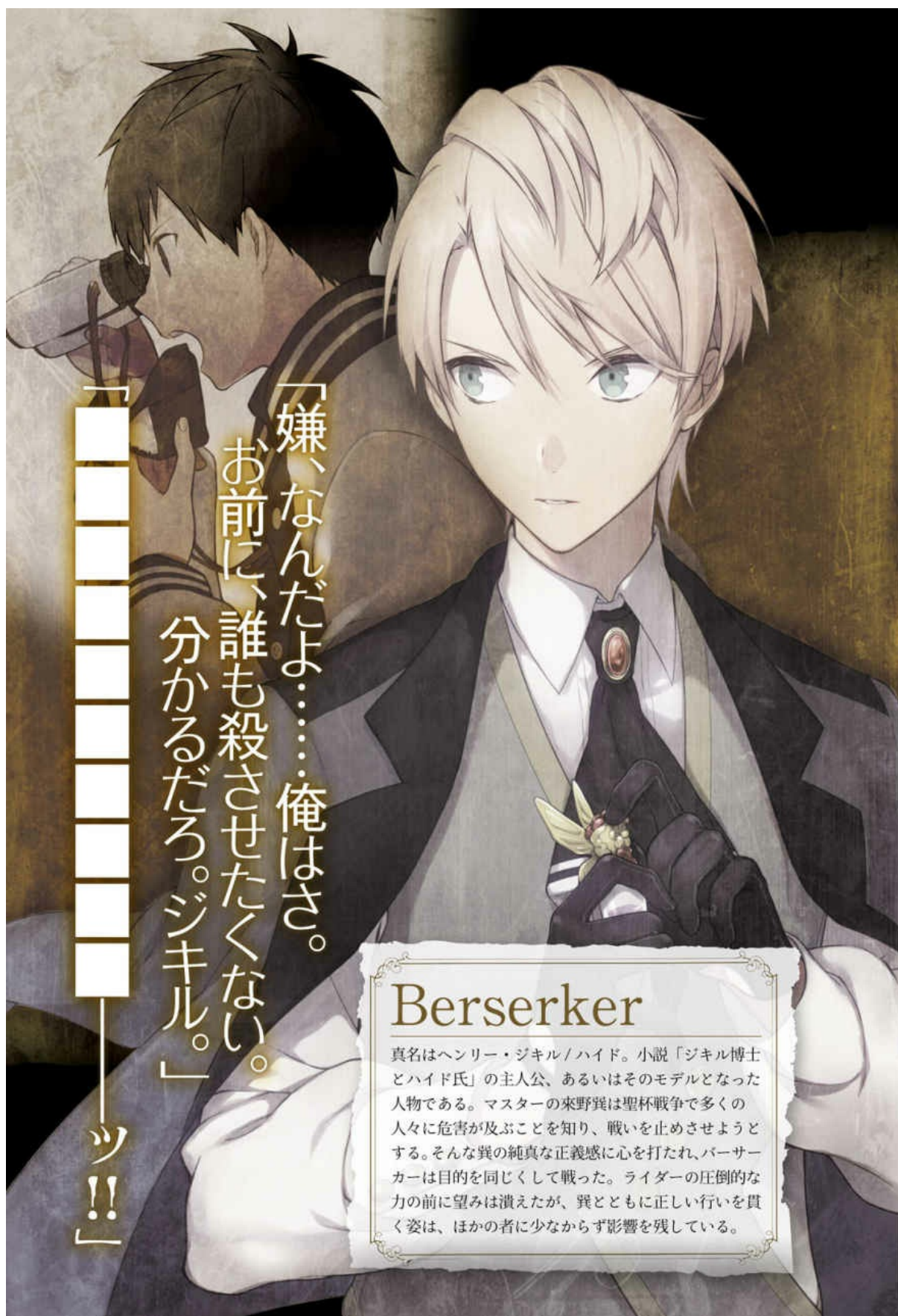
真名はアーラシュ。古代ペルシアを救った英雄。マスターであるエルザ・西条は、とある理由で子供を失っていた。また紛争国での惨劇を目の当たりにした衝撃から「すべての母と子が救われる世界」を願い、聖杯を求めた。アーチャーは忠実に従い、彼女の願いを叶えるために戦った。強大なライダーと対峙するセイバーに手を貸さずにはいられず、セイバーに「お前は、聖杯に何を願う？」という問いを残し、消滅した。

大聖杯に……潜む……もの……
あれを……生み落として、は……

いけ、ません……
世界、を……。

Lancer

真名はブリュンヒルデ。北欧神話の戦乙女。かつて彼女には愛し合う人がいた。滅びの予言に逆らって手を差し伸べた英雄シグルド。しかし策略により殺し合う結末となってしまった。その過去をもつ彼女の宝具は、愛情を破壊力に変換する。マスターのナイジェルは、霊薬を使ってセイバーへの恋心を植え付け、宝具の威力を高めさせた。シグルドの記憶と、霊薬の強制力に苦しみ狂気に陥り、セイバーに刃を向け、消滅した。




「嫌、なんだよ……俺はさ。
お前に、誰も殺させたくない。
分かるだろ。ジキル。」

「ッ!!」

Berserker

真名はヘンリー・ジキル/ハイド。小説「ジキル博士とハイド氏」の主人公、あるいはそのモデルとなった人物である。マスターの来野異は聖杯戦争で多くの人々に危害が及ぶことを知り、戦いを止めさせようとする。そんな異の純真な正義感に心を打たれ、バーサーカーは目的を同じくして戦った。ライダーの圧倒的な力の前に望みは潰えたが、異とともに正しい行いを貫く姿は、ほかの者に少なからず影響を残している。



……本当に、優しいひとなんですわね。
あなた。キタノタツミくん。
あなた、もう、死んでいるのよ。

Assassin

真名は静謐のハサン。暗殺教団の教主「山の翁」を務めたひとり。全身が毒の塊。毒の体であることを諦観しており、マスターでさえ利那的に殺してしまう。彷徨っていたところに自分に触れても死なない沙条愛歌が現れたことで希望を見出す。同じく愛歌の配下に下っていたキャスターによって、生ける屍を与えられ、屍になってなお「人間らしい優しさ」を貫こうとするその少年に触れることで、自分が求めていた愛に気づく。

——世界を救わんとする真なりし英雄、未だ。
——此処へは至らず。
——ただ、都市を喰らう獣の胎動が暗黒を揺らすばかり。

Caster

真名はヴァン・ホーエンハイム・パラケルスス。人類史に名を残す偉大な錬金術師。マスターである玲瓏館も、やはり伝統的な魔術師の家系で、ともに聖杯を手にする事で「根源への到達」を願った。しかし、愛歌と出会い、その絶対的な在り方を前にして、すべてを投げうって彼女にかしづくことを選んだ。暗闇のなか、魂が満ちていく聖杯を傍らに、どこかで愛歌の本性を疑いながら、彼は来るべき正義を信じて佇んでいた。

時には、選ぶこと自体が、答えになることもある。

Saber

真名はアーサー・ペンドラゴン。故国ブリテンの興亡を巡って、円卓の騎士たちとともに戦った騎士王。聖杯に故国の救済を願う。マスターとはいえ、幼い愛歌が前線へ出ることに心を痛めていた。しかし、聖杯戦争を順次勝ち抜いていく過程の中で、しだいに顔を覗かせる愛歌の狂気に気づきつつある。ともにライダーに立ち向かったアーチャー、最期の瞬間に何かを伝えようとしたランサーの姿が脳裏をよぎる。

Fate/Prototype 蒼銀のフラグメンツ

5

目次 CONTENTS

Knight of Fate

ACT-1	13
ACT-2	55
ACT-3	97
ACT-4	139
ACT-5	181
ACT-Final	223

Special ACT

Fate	281
後書き	318
解説	321

目次

Knight of Fate

ACT-1

ACT-2

ACT-3

ACT-4

ACT-5

ACT-Final

Special ACT

Fate

後書き

解説



Knight of Fate ACT-1

死者は蘇^{よみがえ}らない。

なくした物は戻らない。

いかな奇跡と言えど、

変革できるものは今を生きるものに限られる。

末世に今一度^{いまひとたび}の救済を。

聖都の再現。

王国の受理。

徒波^{あだなみ}の彼方^{かなた}より、七つの首、十の王冠^{あらわ}が顕れる。

罪深きもの。

汝^{なんじ}の名は敵対者。

そのあらましは強欲。

その言祝^{ことほ}ぎは冒瀆^{ぼうとく}となって吹きすさぶ。

遍^{あまね}く奇跡を礎に。

此処^{ここ}に逆説^{もつ}を以て、失われた主の愛を証明せん。



Fate/Prototype

蒼銀のフラグメンツ

『Knight of Fate』



海辺の何処か、喫茶店^{カフェ}らしき場所にて――

数年前に流行した洋楽が響いていた。

ラジオカセットレコーダーやレコードプレーヤーといった音響機器^{たぐい}の類は周囲に見当たらないから、きっと有線放送によるものだろう。

日本でも大ヒットしたアメリカ映画の主題歌だ。女性歌手による躍動感ある歌声は、少年たちが海賊の宝物をめぐって冒険を繰り広げるという映画の筋立てとも相まって、多くの聞く者の胸を躍らせる。店内で穏やかな午後は過ごす客層の中にも、表情を明るくして曲に耳を傾ける様子がちらほらと見受けられる。

けれど。窓辺のテーブルに着いた二名については反応が異なる。

「どうして、聖杯なのかしら？」

ひとりとは少女。

流れる旋律に気を向ける素振りはまるでない。

みどり
翠色のドレスに身を包んださまは優美の一語に尽きる。

ティーカップを手にした上品な仕草、穏やかな表情、いずれも俗世からは距離を置いた風ではあって、流行の映画なり洋楽なりを果たして認識しているのかどうか。大衆の集まる映画館に足を運ぶ、といった想像はし難い。強いて言えば、自分の屋敷の映写室で白黒のフィルムを映写機にかけの方がそれらしいか。

少女の名は沙条^{さ じょうまな か}愛歌。

西暦一九九一年二月某日現在、魔術協会及び聖堂教会によって確認される中では唯一残ったマスター、枢機卿^{すう き きょう}によって持ち込まれた大小の聖杯を恐らくは掌中に収めたと思しき聖杯戦争^{おぼ}の事實的勝者である。

地下大聖杯を用いた儀式を完遂すれば、少女は自らの願い^{かな}を叶えるだろう。

「――」

卓を挟んで座るもうひとは、男。青年。

金髪碧眼^{へきがん}の外見からすると、異国から訪れた人物のようではあるが。

人間。いいや、違う。

彼は間違いなく人間以上の存在であり、その身に秘められた魔力、^{りょ りょく}臂力、技能、その特性の多くは通常の生物^{はる}を遙かに超えている。言うなれば人型を保った戦闘用の兵器であり、人類史の中で洗練された^{はず}多くの現代兵器^{りょう が}をも凌駕するだろう。振るわれる剣は万物を両断し、そして、それから逃れられるものは多くない。

彼は、英霊だ。

正確にはサーヴァントと呼ばれる存在である。

絵空事に過ぎない伝説を、神話を、空想を、人々に夢想された共通の幻想を、聖杯の力によって現代に再現——現界させたもの。最強の幻想、神秘の窮極であると言う者もいるし、事実としてそう称されるだけの性質を有している。

コーヒークップを片手に少女と語らっている現時点では、身に纏^{まと}う服装の印象は黒。

だが、英霊としての真価を発揮した際の印象は、蒼^{あお}と銀。

蒼銀の騎士。



聖杯及びマスターである愛歌によって召喚された、最優のサーヴァント。

割り当てられたクラスは^{セイバー}剣士。

彼は、沈黙していた。

少女の唇が紡ぐ声を、言葉を、静かに聞き届け続けている。有線放送から奏でられる洋楽へと耳を傾けてはいないだろう。他のテーブルの客たちが懐かしさに微笑んでも、数年前には自分たちも映画の主人公のような冒険を夢見たものだと思い合っても、その楽しいな空気を感じ取ることもない。

少女と青年。二者が向かい合うテーブルは、外界の多くから遮断されている。

実際にその類の結界が施されている訳ではないまでも、まるで結界の内側のようにあつて、漂うのは絶対的なまでの安寧と穏やかさ。七人七騎によって行われてきた、極東都市・東京に於ける殺し合いの果てに^{たど}辿り着いた何かの果て——或いは、更にその向こう側にあるかもしれない終局への、^{わず}僅かな予感か。

「奇跡を起こす、願いを叶える……」

そんな素敵な魔術なら、もっと平和的な儀式でいいと思わない？」

少女が——愛歌が言った。

それこそ、流れてくる有線放送を指して告げる程度のささやかな口振りで。

「セイバー？」

彼の名を呼ぶ。

真名ではなくとも、仮初めの現界に際するクラスを示す単語に過ぎなくとも、確かにそれはサーヴァントとして在る彼を示す名ではある。だからこそ、それを口にする少女の瞳は^{ひとみ}潤み、頬には赤みが差す。

万人が気付くだろう。

ああ、この^{かれん}可憐の花が如き少女は彼に恋をしているのだろう、と。

「そうだね。聖杯は血を注ぐものじゃない」セイバーは静かに^{こた}応える。「本来は形として観測できない奇跡、人々の願いを溜めるためのものだ^たと聞いた。それが満たされた時、主の威光が^{あふ}満ち溢れるのだと」

「ふふ、それじゃまるきり反対ね。願いが溜まらないと聖杯は起動しない、なんて」

愛歌は笑う。

想い人が、思いがけない冗談を口にしたかのようにして。

けれど実際のところ、両者の会話は、ティータイムの他^{たわい}愛ないやり取りとは到底言えないものではある。東京の^{いずこ}何処かに隠された地下大聖杯、すなわち枢機卿によって秘密裏に持ち込まれた模倣聖杯の存在は^{まご}紛うことなき現実であり、聖杯戦争が今まさに終局を迎えようとするこの時、万能

の願望機は真に稼動するのか。聖堂教会が語るように、小^{シンボル}聖杯と大聖杯から成る儀式は万物の
“根源、への到達さえ可能とするのか——

それとも。或いは。

「……………」

セイバーの瞳に何かが浮かぶ。

^{あお}碧色の瞳は、決して、テーブル越しに微笑む少女を映すだけではない。

この瞬間、彼は、^{まぶた}瞼を閉じて己の記憶をこそ注視する。

東京に散っていった英雄たちの^{ざん し}残滓を、蒼銀の騎士は思い返す——



魔術儀式・聖杯戦争。

マスター サーヴァント
魔術師と英霊による七陣営、七人七騎の殺し合い。

空前絶後にして神話の再現にも等しいサーヴァントの猛威、破壊の力は凄まじく、自ずと戦闘及び影響の規模は拡大していく傾向にあると言えるだろう。

だが、決して思い違いをしてはならない。

聖杯戦争は戦闘のみを指すものではない。

聖堂教会を主とした今回の呼び掛けに魔術協会が応じた真の理由を忘れるな。

模倣聖杯●●●号。

ある意味では最高の聖遺物とも言える是こそが、儀式の中心である。

つまり、我々魔術師にとっての大願。"根源、の渦への到達。

聖堂教会――

有り体に言えば某枢機卿の言うところ、聖杯は万能の願望機であるという。

召喚される七騎の英霊、奇跡とも言ふべき有り得ざる召喚のかたちを、絶大な魔力と神秘とを湛えた彼らの魂を捧げることで聖杯は真に起動する。願望機として。

英霊たちは単なる戦闘兵器ではない。

事実、聖杯戦争に於いて彼らの戦闘性能は大いに頼るべき要素ではあるが。

あくまで、それは一要素に他ならない。

魔術儀式としての聖杯戦争に於いて、英霊とは、最終的な儀式の触媒である。

我らが願い、根源へと到達するためには七騎の魂を聖杯へくべねばならない。

是は厳然たる事実でありながら、同時に最高の機密として、聖堂教会及び魔術協会が共に語るものである。（本質的に触媒に過ぎぬ英霊に対して「お前の願いも叶える」と我らは虚偽を以て召喚している以上、やはり是は機密である）

或いは。

根源への到達を望みとするのでなければ、或いは六騎の魂で事足りようが――

この記述を読むものは大願を秘めた我が家系の者と信じ、多くは言うまい。

改めて、心せよ。

戦闘、闘争は聖杯戦争の一面にすぎず。

^{たと}例えば、七騎のうち四騎を打ち倒し、自らが召喚した一騎に加えて二騎を（説得等の何らかの方法により）仲間に引き入れる、等の事態があったとしても。

儀式としての聖杯戦争は終了していない。

七騎を、或いは六騎の魂を聖杯へくべよ。

奇跡として召喚された英霊たちを、奇跡のために^{ことごと}悉く殺せ。

それこそが、聖杯戦争の本質である。

（古びた一冊のノートより抜粋）



——光。輝^{しやく}き。灼^{ねつ}熱。

再生されるセイバーの記憶。

それは、眩^{まばゆ}き光に塵^{ちり}と消えていった狂獣^{バーサーカー}の姿。

最初に遭遇したのも、最後^{であ}に出逢ったのも、同じ場所だ。杉並区^{すぎなみ}玲瓏館邸^{れいろうかん}。恐らくはキャスターとそのマスターの拠点であると思しき玲瓏館邸に、バーサーカーは幾度となく襲撃を仕掛けていた。目的はキャスター陣営の打倒であつたのだろうが、敢^あえなく狂獣は聖杯戦争から脱落する結果となった。

セイバーが抱いた最初の印象は、やはり、荒れ狂う獣だった。

自分にとっては過去の戦いの記憶、現実で語るならばブリテン王の伝説に記される“唸^{うな}る獣”を思わせた。蛇の首と頭^{しし}、獅子の体、鹿の足を持った歪^{ゆが}みの魔獣、憎しみと悪意を凝集^ほさせて吼^{たけ}え猛る森の巨獣の在り方は、バーサーカーのそれに近しく見えたのだ。

視界に入るすべてを憎^{ねた}み、嫉^{きば}み、牙を突き立てんとする悪意の異形。

玲瓏館家の令嬢と思しき幼子を前にして、巨大な顎^{あぎと}を開き、鋭い鉤爪^{かぎづめ}を以て迫るその姿はまさしく魔のものであり、剣によって対するに相応^{ふさわ}しい相手と認識した。

だが。玲瓏館邸の黒い森にて数合切り結ぶうち、セイバーの認識は変化していった。

(……彼は、自ら意図して正気を失っている)

確信だった。

全身全霊を懸けて、魂さえ懸けて、この獣は狂獣として在ろうとしている。

聖杯戦争を勝利するためか、願いを叶えるためか、その裡に秘めた最終的な目標までは分らないが、意図的な狂気が見て取れた。サーバント階位第二位たるバーサーカーのクラスに相応しい、それは強力な指針であると同時に有用な武器でもあるのだろう。

大義のためには悪と誹^{そし}られようと構わず、と——

鋼鉄の意思を秘めた瞳には、以前にも心当たりがあった。

(アグラヴェイン。ここで卿^{けい}を思い出すのは、不思議なものだ)

かつての自らの配下にして同胞たる円卓の騎士の横顔を想いながら、セイバーは狂獣の存在を自己の中で定義した。あれは、ただの獣などではない。魔獣でも、悪意の塊でも、欲望の具現でもなく、何らかの意義のために力を携えて現界を果^{れっき}たす歴としたサーバントの一騎であるのだ、と。

無論、アグラヴェインは獣の外見を有してはいなかったし暴力的な人物でもなかった。

単に在り方の問題だ。

瞳の奥に窺^{うかが}える、意思の光が僅かに似て見えた――

たったそれだけのことであったが、確信に至った。戦場における直感には些^{いささ}か自信のある身という事実を差し引いても、この判断には自信が持てた。だからと言って相手との対話が可能となった訳ではなく、こちらも剣速を緩めはせず、停戦も手加減も叶う状況ではなかったが、それでも。

獣狩りではなく、誇りある戦いを行うに足る相手の筈だ、と信じた。

だからこそ、再戦の折には一対一での戦いを望んだのだ。

「これは私の戦いだ。叶うなら、手出しはしないで欲しい」

しかし、望みは叶わず。

事前に霊核を貫いたのはセイバーの剣撃ではあったが――

ランサーの巨槍^{きょそう}のもたらす奇襲の一撃、黒い森に姿を隠したアーチャーによる無数の遠隔攻撃、そして飛翔^{ひしょう}する“船”によって姿を見せたライダーによる死の光。空から降り注ぐ無尽蔵にも思える魔力投射によって、狂獣は崩れ、地上から消え果てたのだった。

最期、夜空に向かって伸ばされた鉤爪。

あれは何を意味していたのか。

今もセイバーには、正確なところは分らない。

真名さえ知らず、恐らくはバーサーカーであろうという予想だけを情報として得ている状態で、言葉を交わしたこともない。ただ、その在り方と姿とを記憶しているのみ。一度たりとも背を向けず、複数のサーヴァントへと同時に立ち向かわんとした蛮勇を、狂気を、ある種の純粹^{はかな}を、儂い美しさと誇り高さの結晶の如く感じながら。



——大電光。一条の流星。

再生される第二の記憶。

それは、東京湾上に於ける決戦で激突した神王と弓兵^{ライダー アーチャー}の姿。

前者、すなわちライダーについては神殿内では目撃できなかった。セイバーが彼を明確に視認したのは神殿決戦以前、一度目はバーサーカーが最期を迎えた玲瓏館邸、そして二度目は愛歌と共にランサーと遭遇した沙条邸近くの某公園にて。神獣スフィンクスを従えて夜空に君臨する神王は、こう言ったのだ。

「世界を喰らう女神^{ポトニアテローン}と、それを守らんとする騎士よ。余は、^こ今宵^{よい}、余がこの当世^なにて為すべきを今知ったぞ。お前たちを屠^{ほふ}るために、余は此处に在る」

自分をではない。

少女を、愛歌を目にしながら彼は言っていた。

オジマンディアス。己が真名をも高らかに宣言しながら、ライダーは言うのだ。

正義を為すために。極東の都もろもともすべての邪悪^やを灼こう——と。

あの言葉に心当たりはあるかと問うセイバーに、愛歌は曖昧^{あいまい}に微笑み返しながら、聖杯戦争を続ける以上は他の英霊からああして敵視されるのは当然、といった旨の言葉を告げてはいたか。

愛歌の言葉をセイバーは信じた。

否、その言葉は一面では正しいのだろうと認識し、けれども自分に告げていない何かが秘されているのだろう、とも同時に認識せざるを得なかった——

沙条愛歌。セイバーのマスターである少女。

才ある魔術師という言葉では表現しきれない程の何かを彼女は有している。

それは、アサシンに続いて、あのキャスターまでもが軍門に下っている現状を見れば明らかなだ。サーヴァントとして存在するセイバーの性能では把握しきれない、魔力だけではない何らかの魅力^{カリスマ}、或いは力を秘めていると思しい。

感知や調査に^た長けている訳ではない我が身を憂えたが——

愛歌へと意識を傾ける時間は、そう長くは保^もたなかった。

「余は決断したぞ！

星さえ喰らわんとする邪悪、余と神々の威光によってすべて焼き払ってくださいよう！」

神王は、一千万を超える市民ごと東京を焦土へ変えると宣言し、その大言壮語にも思える予告を実行するに足る存在を実体化させたのだ。つまり、東京湾上に突如として出現した巨大構造物、神秘の頂点のひとつとして魔術師たちの世界で語られる固有結界、ライダー最強の宝具と思

しき『^{ラムセウム・テンティリス}光輝の大複合神殿』である。

残された時間はあまりに少なかった。

神王の宝具は、湾上に鎮座しながら東京全域を狙っている。

故に、セイバーは単身で大神殿へと乗り込んだ。ライダーの意向がどうあれ、愛歌の在り方がどうあれ、聖杯戦争には無関係どころか無^{むこ}辜である筈の民の多くを死なせる訳にはいかない。当然の判断であり、必然の単独行動ではあった。

単身。単独。否。

予想外の援軍として、アーチャーとランサーの協力があつたのだ。

ランサーは早々に姿を隠して神殿内大回廊の何処かへと消えたが、アーチャーとは共闘の形を取ることに、神殿の有する特殊効果によって無限再生を続けながら襲い来る岩石製の神獣を破壊し続けて――

そして、目にした。

救世の一矢を。

刀身に施された十三拘束^{じゅうさん こうそく}は半分以下しか解放されず、真価を十全には発揮できない聖剣を掲げて一撃を放たんとする自分のすぐ隣で、全力、全霊、あらゆるすべてを懸けて真名解放を行ったアーチャーの姿を。

自らの固有結界にて猛威を振るうライダー・オジマンディアスを倒すには、神殿最奥から主砲として放たれる“デンドラ大電球”の電光を砕くには、完全解放できない聖剣のみでは足りないという実感はあった。だが、アーチャーの一撃。絶技とも呼ぶべき真名解放を伴う一射は聖剣の光と相まって、大電光を迎撃し、主神殿を破壊し、固有結界・複合大神殿を崩壊させるのに充分な威力を生み出してみせたのだった。

「――^{ステラ}流星一条!!」

円卓の騎士がひとりパロミデス卿よりその勇名は聞き及んでいた。

^{いわ}曰く、大地を割る一矢。

それを成し得る者は地上にただひとり、すなわち、東方の大英雄。かの^{ベルシア}パルス^{ベルシア}の地にて並ぶ者なき弓の勇士。長きに渡って続いていたパルスとトゥルク両国の戦争を無血にて終結させた男。聖なる献身を、大弓にて成し遂げたもの。

真名アーラシュ。

人は彼を^た讃えてこう呼び習わす。^{アーラシュ・カマンガー}正しきを為す弓兵、と。

その在り方、その最期に、セイバーは^{かつもく}刮目した。

救世の英雄たるアーチャーは迷う素振りひとつ見せずに宝具を解放し、自壊していったが故に。そうだ。古き伝説に記されている通り、超常の一矢を放った弓兵の五体は粉々に碎け散る。あらゆる病にも毒にも負けず、戦場で傷を負うこともなかった無敵の肉体を捧げる行為こそが、最大射程二五〇〇キロメートルを超す流星を生み出してみせる。

「後世の伝説では生還したって話もあるんだが、まあ、あれだ。そいつはそいつだ。俺は、正真正銘のアーラシュ・カマンガーだからな」

崩落する神殿の中で、アーチャーは言った。

脚を、腕を、腹を、胸を、ひび割れさせ、徐々に消滅しながら。

「いいか、セイバー」

声がぶれている。肺が、碎けたのだろう。

「お前は正しい」

首筋が、裂けているのが見える。

「東京の人々——本来なら俺たちにはまあ、関わりのない連中だけだな」

自身の言葉も、既に、アーチャーには聞こえていないだろう。

「それでも、無辜の民たちだ。

かつて俺たちが守った愛すべきあいつらと、何の違いもあるものか」

声が。崩落する神殿の轟音ごうおんに混ざっていく。

「俺はここまでだ。

なあ、騎士の王。輝きの剣を栄光のままに振るう男よ」

——お前は、聖杯に何を願う？

完全消滅と同時に告げられた言葉は、確かに、セイバーの耳に届いていた。





——^{ひ すい}翡翠の輝き。青き炎。

再生される第三の記憶。

それは、超大なまでの巨槍を振るう麗しき^{ランサー}槍兵の姿。

最初に出逢ったのは池袋、超高層ビルディングとして知られるサンシャイン60の^{ふもと}麓に於ける遭遇戦だった。盾と見紛う刀身を備えた巨槍を軽々と操る彼女の姿は、起きながらにして見る夢、或いはおとぎ話の中の幻想のようでさえあったか。

第二の遭遇、第三の遭遇でもその印象は変わらなかった。

儚き乙女、^{やり}槍の腕は見事なれども何処かに^{ためら}躊躇いを秘め続けている女。

「……困ります」

いつも、彼女は何かを憂えているようだった。

だが、最後の時、東京湾神殿決戦より三日後の夜——

JR阿佐ヶ谷駅近くの雑居ビル屋上で遭遇した彼女の様子は、これまでのものとはまるで変わってしまっていた。異質、とも呼べる^{せいぜつ}凄絶の気配は英霊に特有のそれとも幾らか異なり、過去、王と呼ばれながら戦いの日々に明け暮れるさなかに^{かい ま み}垣間見た超自然的な存在をこそセイバーに思い起こさせた。

湖の乙女。星の内海。アヴァロン。

国土と民を食い荒らす暴風の如き魔獣の神秘とは違う、尊きものの匂い。

或いは、ランサー本来の在り方はそちらに近いのか？

疑問は言葉として唇からこぼれたが、返答は、なかった。

「あははははははははははははははは！」

高らかな^{こうしょう}哄笑と共に、ランサーは巨槍を——初戦の時とは比べようもない程に膨れあがった異様なまでの剛槍を振り上げて、襲い掛かってきたのだった。空間ごと切り裂くかのような一撃、高速の連撃、そして超高熱の青い炎。炎を纏って迫り来る死の顎、それは古き神々のもたらす怒りをも思わせる。

（成る程、此処までの力か）

^{きょう がく}驚愕。同時に納得する自分もいた。

マスターである愛歌がひとり、或いはアサシンやキャスターを連れて何処かへ姿を消すことは珍しくなかったが、この夜には珍しく声なき言葉による連絡があったのだ。曰く、最後の敵陣営と言えるランサーを今夜仕留めようと考えていたのだが、と。

『マスターは何とかなったのだけど……ランサーは駄目ね。わたしでは、きっと、あのひとは殺せない

し』

これまでの日々と何ら変わらない声色。

音声に依らない言葉であっても、少女の余裕は微塵^{みじん}も揺らぐことがない。

『逆に、殺されてしまうかもしれないわ？』

冗談だろう――

セイバーはそう返さなかった。

魔術師たちに特有の秘められた世界の事情には疎く、聖杯が自動的にもたらす知識以外にはマーリンの言動あたりでしか判断が付かない身ではあるが、そうではあっても魔術師としての沙条愛歌は天才そのものであり、並のサーヴァントであれば一対一でも相手取って余りあるのだろう、とセイバーは認識していたが。しかし。

『傷が癒えたばかりのセイバーには、本当は、こんなお願いをしたくないのだけど』

愛歌は、決して嘘を言わない。

何かを隠していたとしても、言葉としての虚偽は決して口にしない。

是は強い確信だった。

他者に対しても同じかは分からないまでも、少なくとも、この自分に対しては、あの少女は嘘^{うそ}を吐かない。そう、あのアグラヴェインがそうだったように。たとえ裏で何かの謀を行っていたとしても、裏切りではなく、すべては尊きもののため。アグラヴェインであればブリテン王国のために。愛歌であれば――

何であれ、事実なのだろう。

愛歌はアサシンとキャスターを率いていただろうから、現在、ランサーを倒せるのは聖剣を携えた自分の他にはいない。三騎士の一角として称されるアーチャーも、あの強大なるライダーも、こと白兵戦闘に於いては強力であったバーサーカーも既にない。

道理は得られた。だが。

あまりに大きな違和感があった。

異質なものと変じたランサーの気配、言動、この渦巻く狂気は何故に？

「こんなにも強く、強く、愛する相手はあなた以外にはいない。いないわ。ねえ、シグルド。シグルド。シグルド。シグルド……！」

「君は錯乱している。かつて私は竜^{たお}を斃したが、その者とは違う！ 私は――」

「あははははははははは！」

まるで言葉が通じていない。

建築物の屋上を次々と飛び越えながら、数分と経たずに到達した新宿新都心、地上高二三〇メートルに及ぶ新宿住友ビルディングの屋上で両者は再度激突した。既に五〇〇〇キログラム

を超過したランサーの巨槍は、屋上の一部ごと空間まで削り取り、一振りで甚大な炎の軌跡を夜空へと刻み込む。

強い。以前に刃を交わした時とは、格が違う。

数合の打ち合いは、明らかにランサーの優勢だった。

成る程。確かに、如何に愛歌が複数系統の魔術の奥義を究めていたとしても、配下の二騎を従えていようと、ここまで白兵戦闘に特化されたサーバントが相手では分が悪い。加えて、現在のランサーは、対魔力スキルのランクを含むあらゆる性能が急激に上昇しているらしい。

（疾く、重く——強い！）

ここまでの強化。尋常ではない。

知られざる宝具の真名解放に依るものか。愛歌の言葉では「原初のルーンを常時起動させている」との情報ではあるが、既に失われたとされる神代の魔術刻印がここまでの力を持つことには驚愕を以て現実を迎える他にない。

「殺す、コロ、スゥ。コロ、ロ、ロ、コロコロコロコロコロ」

「ランサー！」

「はあい」

「ライダーの神殿で、君は、誇り在る戦いによる決着を求めると言った！」

記憶を手繰りながら叫ぶ。

力は構わない。奥の手をこうして曝け出しているのならば、応えるまで。だが。

この狂気、バーサーカーさえ超えるが如き荒ぶる魂は何だ。

何故。貴女はこうまで狂い、吼えるのか。

「金星」

返答は、夜空をも覆わんとする偉容偉大の岩塊ひとつ。青き炎を纏わせながら。

凄まじい魔力を秘めた巨大質量。金星を司る女神の名を告げるならば、よもや、岩塊は空の彼方より呼び寄せた星の欠片か、または小さき星のひとつか。東京全土とまでは至らずとも、地表に激突すれば幾万の命が奪われるのは必至だろう。

「さあ、シグルド」

「何故だ。東京の人々を殺すのか——ランサー・ブリュンヒルデ！」

「殺します。殺します。」

みんな、殺してしまいます。どうすればいいか分かるでしょう、セイバー」

言葉は届かない。

槍持つ乙女の魂は既に、狂気の炎に灼き尽くされてしまったのか。

ならば、今、為すべきはただひとつ。

風王結界を解除した聖剣を――

黄金の刀身を、我が身に残る全魔力を込めた突進を以て、彼女の胸へ。刺突。一刃。

「……お見事……」

その時、ランサーの瞳から溢れたものは何か。

「大聖杯に……潜む……もの……、

あれを……生み落として、は……いけ、ません……」

ほとばし

迸る魔力の残光か。想いの欠片か。

「世界、を……」

涙か。

または、鮮血か。



「きみの言う通りだ、愛歌」

海辺の喫茶店、その窓辺にてセイバーは瞼を開く。

瞳に映り込むのは翠色を纏う少女。

一呼吸置いてから、彼は言葉を続ける。

仮初めの肉体を得ながらも既に死した四騎を——誇りを以て光に消えた英雄を、何らかの正義を以て東京を灼かんとした英雄を、無辜の人々を守りながら崩れ去った英雄を、狂気の炎を帯びながら世界を託した英雄を、想いながら。

「聖杯は人の想念によって作られる。……だが、悲しきかな、多くの人間が望むのは善意ではなく、欲望という名の悪意だった」

セイバーが語るのは、端的な事実だった。

だからこそ聖杯戦争が成立する。

儀式の中心たる大聖杯が主の威光をもたらす聖遺物ではなく、万能の願望機として在る理由。魔術協会が全面的に協力し、独自の世界観を持ちながら生きる魔術師たちが死闘へと挑む理由。万人の欲望を溜めたが故に、聖なるものではない何かを多く溜めすぎたが故に、聖杯は、ある意味で変質したのだ。

既に聖杯は真の奇跡を成し得ない。

願望の成就。それは、いと高き場所におわす主のもたらす奇跡のそれではない。

「聖杯は、その発端からして狂っている」

たとえそうだとしても。

この身には——

——セイバーの裡には、ただひとつの願いが在る。今も。

遠く時代を隔てた二〇世紀の当世にあっても、それは、変わることのない決意だ。

叶えなくてはならない。

切なる願いを秘めて聖杯へと集った他者の血を、どれだけ流そうとも。

召喚に応じた時点、現界した時点で、それは既に覚悟していた事柄ではある。

——けれど。

世界。

そう、ランサーは言っていた。

魔力の粒子となって消え失せるのと同時に述べられた、彼女の最後の言葉。

狂気が言わせたのだとは考えない。少なくともあの瞬間、ランサー・ブリュンヒルデが発したのは真実である筈だった。理由は、バーサーカーの時と同じく——瞳だ。経験から来る直感の類であって、理屈や理論の類ではない。

あの瞳を自分は知っている。

数多く目にしてきた。

死を目前にして願いを託す、あれは、純粹のみを湛えた無垢^{むく}の瞳ではあった。

忘れる筈もない。幾度、この身が減びて、無限に等しい現界を果たそうとも、魂が在り続けるのなら忘れはしない。

故に、この身はセイバーとして聖杯戦争へと組み込まれたとも言えるか。

（私の願いは変わらない。だが……）

もしも、とセイバーは自らへ問い掛ける。

——極東へと持ち込まれた地下大聖杯なるものがこの世を蝕^{むしば}む悪であるならば？

「……………」

言葉なく、再び、蒼銀の騎士は双眸^{そうぼう}を閉ざす。

更なる記憶を視るために。



——遠き時代。同時に、すぐ傍らに在りし戦乱の日々。

再生されていく過去の記憶。

それは、在りし日のブリテンでの記憶だ。

約一五〇〇年前、五世紀当時のブリテン島は苛^か烈^{れつ}な動乱の渦中に在った。

強大な世界帝国の斜陽という時代の変動を受けて、民族の大移動という巨大な歴史的事象がブリテンへも手を伸ばしていたのだった。具体的には、サクソン人たちが海を越えて渡ってきた。生存のために。だが、ブリテンの土地には限りがある以上、帝国時代、或いはそれ以前より島に暮らしてきた人々と自ずと衝突することになる。

侵略者と、現住者。悲劇的な出逢いであつたと言えるだろう。

ブリテンの人々は、サクソンの人々と相争った。

生きるために。生き残るために。

そして、敵は、必ずしも外より来るものばかりではなかった。

現代で言うところのスコットランド地方に棲息^{せいそく}するピクト人^{きょうじん}たち。強^{たい}韌^くな体軀を有する彼らは、時に巨人とさえ呼ばれる強大な異民族であり、戦闘意欲に満ちて攻撃を繰り返す人々だった。更には、大陸に比しても神秘が色濃く残るブリテンの森林、豊かな山野には、容易に人を喰らう大型の魔獣たちが多数棲息していた。

海を超えて襲来するサクソン、島内の巨人、魔獣。ブリテン各地を支配する諸部族も一枚岩ではなかったが故に、内紛とも言うべき争いまでもが多発した。

多くの暴力^{じゅうりん}が島を蹂躪し、村は焼かれ、畑は踏み潰^{つぶ}され、多くの人々が死んだ。

故国にもはや平穏はなかった。

巨人や魔獣を斃すほどの勇猛の騎士でさえ、民族移動という事象の顕れであるサクソンの猛威に敗れて命を落とすことは珍しくなかった。一人一人は無^か力な人間であっても、群れともなれば獣に打ち克ち、大軍勢となれば英雄をも殺し得るのだ。

無論、英雄も不意を打たれるばかりではない。

強壮なる一騎当千の騎士や王たちはサクソンや巨人、魔獣^{あらが}に抗い続けた。

荒ぶる力と力はブリテンを舞台として激突し続け、戦乱は続き……最^も早^{はや}、血の流れぬ日はないかのように思えた。サクソンと通じて島の統一^{もくろ}を目論んだ卑王ヴォーティガンによって偉大なるブリテン王ウーサーが敗れた日より、ブリテンの明日は暗黒に閉ざされたのだと言う者もいた。

彼が——現在、セイバーとして西暦一九九一年の東京に在る彼が、ウーサーの次なるブリテン王として王位を得たのは、まさしくこの暗黒の時代のさなかだった。

^{カリバーン}
選定の剣を、岩から抜いたのだ。

ウーサー王の補佐として知られる魔術師マーリンが予言したままに。

理想の王となるために。

ブリテンを救うために。

多くの人々を守り——同時に、きっと多くの人々を殺すために。

「ああ、^{つら}辛い道を選んだんだね」

^{マーリン}
美しき魔術師が困ったようにそう言ったのを、今も彼は覚えている。

ずっと昔から、既に覚悟は決めていた。故に彼は迷わなかった。

困難へ立ち向かうために剣を抜くのだと、人々のためにすべてを捧げるのだと、人間であることを捨ててただひとりの“王”に成るのだと自覚していた。

そして剣を抜いて、彼は、新しきブリテン王となった。

アーサー・ペンドラゴン。

ブリテンを守護する“赤い竜”としてマーリンに予言された、人を超えた王に。

そして。

王位継承より幾らかの月日が過ぎた後のことだった。

幾度かの戦いを経て、新王としての名が島に響き渡り始めた頃か。

妖妃モルガン——父王ウーサーの実の娘であり、すなわちは姉でありながらも積極的な協力を拒み続ける、どころか幾つもの罠^{わな}さえ仕掛けてくる——彼女の策略によって、選定の剣を失い、湖の乙女より星の聖剣を授かってからすぐの出来事だ。

卑王ヴォーティガーンの配下であるサクソンの一団が北部辺境に出没しているという噂を聞きつけて、少数の騎士と共に馬を走らせた彼は、いつものように異民族の戦士たちを一蹴^{いっしゅう}してみせた。

真なる竜の心臓を秘めた肉体は、まさに神代の戦士が如く。

数十人から成る戦士の一団を、ものの数秒で斬り伏せてみせたのだった。湧き上がる歓声は味方の騎士や従者のもの、この世のものとも思えぬ絶叫と悲鳴は敵のもの。戦闘自体は一方的なものだった。

だが。彼は、敵の悲鳴の向こうに何かを聞いた。

何かの——誰かの声だった。

馬から降りた彼は、馬よりも速く駆けて声の主を探した。そして見た。森を抜けた先に存在する集落が、完膚なきまでに破壊されているさまを。牧歌的であった筈の風景は最早なく、家々は碎か

れ、火を放たれて、逃げ惑ったのだらう村人たちの血で焔は朱に染まっていた。生きて動く者はいない。家畜さえも殺されていた。

戦場の血 腥さとは異なる、それは、一方的な虐殺を示す光景だった。

サクソンの戦士たちがこれをもたらしたのか。全身が総毛立つ気配を感じながらも、彼は辛うじて踏み留まった。怒りに流されることなく、生存者を探した。

後続の騎士たちがようやく到着する頃になって、彼は、ひとりの生き残りを見つけた。

幼子だった。

家が焼き討ちにあった折、閉じ込められたまま崩落に巻き込まれたと思しい。本来なら家人を守るべき家に、傷付けられたのだ。全身を強く打っており、手足の骨は折れ、内臓にも損傷を負っているのは明らかであり、意識を未だ保っていること自体が奇跡だった。

幼子は、死に瀕していた。

彼の腕に抱きかかえられながら、幼子は言った。

その声はまさしく、彼が先刻耳にしたものだ。言葉の内容も同じく。

「王さま……ペンドラゴンの、王さま……」

うわごとのように紡がれる言葉は、自身を抱く人物がアーサー王であると知ってのものではない。死に瀕しながら、幼子は、主ではなく王に何かを言おうとしていたのだ。

「ぼくは、死んでも、いいです……」

「何を言う。そなたは死なぬ。そうだ、このアーサー王が死なせはしない」

「だから、王さま……」

言葉は既に届いていないのだ。

幼子の耳から流れ落ちていく赤色は、内耳に対する損傷を物語っている。

「……妹と、母さんと、父さんを……みんなを……」

妹も。母も。父も。

既に、炎に捲かれて命を失っている。

それを知らぬままに、幼子は、祈りの言葉を続ける。

「……まもって……」

皆を守って――

家族への親愛と安寧を願いながら死す幼子の姿に、自らの犠牲を以て家族や友の救済を願う。その最後に、彼は、アーサー・ペンドラゴンは無言を以て応えていた。

深く静かに、王として為すべきことを自覚しながら。

――ブリテンを救う。

——あらゆる^{かんなん}艱難辛苦から、人々を、守り抜く。

——無辜なる者が平穩を得られる正しき場所を、永遠の王国を私は打ち立てる。

以後の年月。

終わることなき戦いの日々にあっても彼は想い続ける。

卑王ヴォーティガン。白き竜。

斜陽の大帝国との決戦、そして、^{はんぎやく}叛逆者モードレッドとの最後の戦いにあっても。

カムランの丘——

無数の死だけが残された丘。

死の淵^{ふち}に立っても、彼は、アーサー王は求め続けた。

傷と痛みはすべて自分のものだ。たとえ主が相手であっても手放せはしない。そして何よりも、この命など尽きても構わない。要らぬ。

我が魂が欲するのはただひとつのみ。

ただ、^{ブリテン}故国の救済を。

二度と。もう二度と、幼子が自らの命を差し出すことのなき国を。地上に。

——どうか、この地上に。救いをもたらしたまえ。





Knight of Fate ACT-2

一九九一年、二月某日。深夜。

東京都^{としま}豊島区、JR池袋駅付近。

『主人を同じくする者同士、互いに力を尽くそうではありませんか』

アサシン
髑髏^{アサシン}の女は、都市の暗がりに佇^{たたず}みながら言葉^{はんすう}を反芻する。自分と同じくサーヴァントとして現界した術^くの英霊^{キャスト}の放った言葉。静かな響き。教諭すかのように告げられたそれを、正しく文脈^くを汲み取^{だき}って耳にしたならば、唾棄^{だき}すべき内容であると常人は顔^{しか}を顰^{せきがく}めるのだろう。学問に長じた碩学^くじみて余裕をもった語り口が、いっそう趣味の悪さを際立たせる。

だが、アサシンは何も感じない。

主命を受諾した。ならば、後は行動へと移すのみ。

聖杯戦争を勝ち抜いた尊^さき主人^{じょうまな}のため——沙条愛歌^かそのひとのために、まさしく、力を尽くすまで。仮初めの肉体が崩れ去ってエーテルの一片と変わる時まで、この身に残る魔力を費やし続けるだけのこと。必要とあらば、霊核^{ささ}はおろか魂^{ささ}さえ捧げても構わない。

「愛歌さま。我があるじよ」

一歩、暗がりから踏み出す。

星明かりがさほど意味を成さない東京の夜にあって、例外的に光源と成り得る月の光が顔を照らす。素顔ではない。仮面だ。かつて暗殺教団の歴代当主^{かぶ}が被^{かぶ}ったものによく似せて作った白色髑髏^{どくろ}、座に英霊として刻まれる以前、人間として生命を有していた頃から顔を覆っていたもの。

死を模した仮面。

夜によく馴染^{なじ}む黒色の衣裳と褐色の素肌である以上、まるで、都市を成す無数の建築物が投げ掛ける影の中に、ぼつんと髑髏^{どくろ}が浮かんているかのように見える。黒衣と白骨、西欧に伝えられる死神の姿によく似ているのは、順当な帰結^{ある}か、或いは大いなる皮肉か。

他の当主であればいざ知らず、強いて言えば、自分はきっと後者に違いないとアサシンは考える。現界十四日目——聖杯戦争十四日目とも言えるか——にして、深夜ラジオあたりで語られた“午後十一時の死のメアリー^{デス・メアリー}”は、とうとう現代の死神へとその姿を変えたのだから。

始めたのは一昨日^{おととい}からではあるが、もう、どれだけの数に及んでいるのか。

「幾らでも捧げます。夜の月よりも尊^あき、あなたのために」

唇からこぼれるのは祈りではない。

無限の感謝を示すだけの、ただの宣言にすぎない。

時刻は深夜二時を過ぎている。魔力の供給確保、魂喰^くいのための人間漁^{あさ}りであれば避ける時間帯だが、死神としての活動には一切の制限を掛けるまいと決めている。バスや電車といった都市

交通網が動かない、人混みは既に消えた時間帯であろうと構わない。繁華街の夜を取り仕切る住人^{ヤウザ}たちとの遭遇確率が高まろうと、そう、何も関係ない。

主命を受けた以上は、ただひたすらに役目を果たすだけだ。

たとえば、非合法手段を用いて密^{ひそ}かに武装した一団が相手でも――

「……………！」

ああ、声が聞こえた。

助けを求めて上げられる、か細い声がひとつ。言った側^{そば}からこれだ。

夜の都市、特に路地裏はどこか天然自然の森林にも似ている。不運にして愚かにも迷い込んでしまった草食の生き物が、牙^{きば}を剥いて涎^{むよだれ}を垂らす肉食獣の群れに襲われて、引き裂かれ、食い千切られ、貪^{むさぼ}られる。二〇世紀という現代も、そういった暗がりの在り方はアサシンが生きていた頃のものとは大差ない。異なるのは比率くらいなのか。

呼吸ひとつだけを場に残して、アサシンの姿^かが掻き消える。

完全透明。

光学的手段を用いた透明とは異なるし、英霊^{サーヴァント}の肉体がエーテルで構成されていることを利用して不可視の特徴を得る霊体化とも違う。

正確には、気配遮断スキル。

影^{アサシン}の英霊として現界した身に備わる超常のわざである。

こうして街路を堂々と進んでいても、窮極的にまで気配が断たれたアサシンの姿を余人は視認できない。すれ違う千鳥足の酔漢はおろか、夜目が利く猫でさえ気付かない。生前にも各種の姿隠しの技能を修得してはいたが、原理や細部は幾らか異なっている。むしろ、魔術師たちの操る魔術に近いのか。

誰にも見られず、知られず、アサシンは目的の場所^{たど}へと辿り着く。

やはり路地裏だ。薄暗い。

――いた。若い女がひとり、男が五人。

「権東^{ごんどう}の兄貴が言ってたのはこの女でいいんだよな」

「板橋女子の制服でこの時間までこのシマ歩いてるガキはソイツぐらいって話ですんで」

「オマエなんでも詳しいよなあ」

「へえー、こりゃいいや。結構イカしてんじゃねーの！ 好みだわー！」

「震えちゃってまあカワイイねえ。役得だな、役得。兄貴に渡す前に楽しめそうだ」

地面に座り込んだ女を取り囲む男たちの体格はそれなりに良い。

発言内容はヤクザに特有の言い回しを含んでいるが、服装の傾向からするとJR池袋駅周辺の街路をうろついて違法薬物や違法売春を仕切っている若者たちだろう。都市の暗がりにもそれなりのルールはあり、彼らは言わば下請け業者だ。すべてがすべてではないまでも予備軍という言い方もできる。

「……人、違います。あたし、なにも悪いことなんてしてない」

女が声を絞り出す。

唇も舌先も震えているのは、恐怖のためか。

「はいはい、みんなそう言うんだよ。シマ荒らしなんかやってませんキャータスケターってか？ さっきみたいにかいてみろ、オマワリサンが助けてくれるかもよ」

「叫ぶより前にお前がボコボコにすんだろ」

「ヒヤハハハ、正解！」

「分かるっての。お前ほんと女殴るの好きだもんなー」

あからさまなまでの男たちの意図的な威圧に、続く言葉を失った女が固唾^{かたず}を呑む。

女の年齢は十代半ばあたりだろう。身に纏^{まと}った制服も、恐らくは高等学校のもの。

俗に、女子高生と呼ばれるものだ。



新宿や上野、更にはここ池袋の繁華街なり、自身の肉体的魅力を利用して金銭を獲得するすべを持った女たちは夜の東京に少なくないが、こうも若年であるのは比較的珍しい部類に入る。時代が僅かにでも違えば、十代で街路に立つのはさして珍しくもないのだろうが、一九九一年という現代をアサシンはそう捉えている。

その手の女が組織の庇護なしに振る舞い続けられれば、どうなるか？

いつの時代でも大差はない。都市の暗がり^おに於ける商売の多くが違法組織を中心とした寡占の状況にある以上、やがて相応の報復が訪れる。

暗がり^おに僅かでも関われば、いつかは暗がりそのものに取り込まれる。

よくある事態だし、数限りなく繰り返されてきたものでもあるのだろう。

それほど注視すべき光景ではないのだが――

「横取りは、やめて貰います」

アサシンは、気配遮断を解除しながら宣言していた。

男たちの真正面に立って、まるで女を庇うかのようにして。

「……はア？」

「おい、ソイツ今どっから出てきた」「なんか目がおかしい感じなんすけど」

「おー際どいカッコしてんじゃねえの、すっげえいい体！ どこの店の外人サンだ？」

「なんだよピンじゃねえのかよオマエの商売仲間かあ、スズノちゃんよオ！」

誰もいないはずの空間に出現したという事実に対する男たちの反応は薄い。何らかの薬物を使用しているのか、酒による酩酊状態なのか、それとも筋金入りの莫迦か。或いは度胸が据わっているという見方もあるのかもしれないが、いずれもアサシンには興味の対象外であって、深く考えはしない。

注意するのは一点だけだ。

周囲の人影の有無。

大きな騒ぎになってしまうのは、なるべく避けたい。

「聞いてんのかよ、ってなんだそのお面？」

「いやアリだな。いいわ。オレはアリだわ。結構ソソる恰好してんじゃねえの！」

「んでその外人女も殴るんだろ。お前ほんと好きだよなあ」

「ハハ！ そりゃそうだろう、こいつが鑑別所行つたのその癖のせいだからな」

「な、なんかそいつすげえ変な感じするんすけど、気を付けてくださいよ――」

ひとりだけ、勘の良い男がいるらしい。

髑髏の仮面をじっと見つめながら脂汗を流して、顔色は蒼白。

他は似たり寄ったりだ。肌を露わにした半裸の女に対して目は釘付け、どう陵辱を加えようか、またはどうやって暴力を加えようかと目を輝かせている。慣れに慣れた類の視線と欲望に晒されて、アサシンは小さく息を吐く。

この十数日間にわたる魂喰いの日々で認識していたことでもあるが、本当に、過去も現在でも変わらないものだ。ヒトという生き物は。

若い女というだけでこうも油断するのだ。

確かに、この身は少女とも形容できる肉体ではあるが――

男たちが都市の夜間を駆け回る肉食の獣であるならば、この緊張感の欠片もない有り様は腹を見せて地に転がるにも等しい。愚行の極みに他ならない。

「溜息も色っぽいじゃねえの」

採るべき行動はひとつだろうに。

「そのお面取れよ」

吠え回るのならば覚悟を決めろ。

「いいって。もういい。殴ってソレ割るわ」

牙を剥くよりも前に相手を計れ。

「まあ、死にやしねえよ。シャブ漬けにして風呂とかそういういつもの流れになルエ」

まずは一人目。

最も威圧的な言動の男を殺す。――否、殺した。

男の語尾がぶれたのは、額に深々と黒色の刃が食い込んでいるからだ。アサシンが音もなく投擲した短刀は彼の頭蓋を貫いて脳を破壊している。何が起きたのか、何をされたのかさえ分からないままに、一人目の男はこの世を去った。

次に、二人目。

隣にいた男の頭に短刀が突き立ったのを目にして、咄嗟に、ジャケットの内側に隠した武器へと手を回そうとしている男。どの程度の域までかは判断が付かないが、それなりに暴力への順応ができていらしい。大したものだ、とアサシンは内心で評価する。当然、対処方法は変わらないのだが。

とん、と一歩だけ前に大きく踏み出して、距離を詰める。

「ッ……！」

二人目の男は大仰に、刃物なり携帯火器なりを抜き放つつもりだったのだろうが、叶わない。体と体が触れ合うほどの至近距離にアサシンがいるせいで、更には肘まで押さえられているせいで、腕を振り抜けない。武器が出せない。

しまった、と思った時には既に遅い。

頸部^{けいぶ}への一撃。

白色の刃を有する短刀に首を切り裂かれて、彼は死んだ。

胴から切り離された頭部が、吹き上がった赤色と共にアスファルトの街路へと落ちる。

それと同時に、三人目の男も既に絶命している——短刀によるアサシンの攻撃は一度きりでは終わらず、舞いにも似て断続的に振るわれたが故に、^{あぜん}啞然として棒立ちになっていた三人目は直撃を受けたのだった。

顔面でまともに刃を受け止めてしまった彼は、顔の上下でそれぞれ違う表情を浮かべながら命を終えた。

「……………！」

女が——女子高生が、声なき悲鳴を漏らしながら気絶する。

落ちてきた頭部のいずれかと目が合ってしまったらしい。ぐるりと白目を剥いて、彼女は力なく冷たいアスファルトへと倒れ込む。

「あ、あ、あ、ああああ……！」

悲鳴は、四人目の男のものだった。

アサシンによる短刀の舞を避けられなかったのだ。

刃が描く軌跡の上にあった彼の右手首はすっぱりと切断されている。

動脈の断面から血を吹き上げながら、彼は力なく路上にへたり込む。最初こそ叫び声を上げようとしていたものの、急激な失血によるショックのためか、やけにか細い呻き声^{うめ}へとすぐに変わる。ああ、その声色は、先刻の路地裏に響いた女の悲鳴よりも弱々しい。

助けて、とかわらうじて言葉を漏らしてはいるが、早々に彼は失血死するだろう。

五人目の男は、こうなるともはや戦意喪失の極みにあった。

無理もない。ほんの数秒で、路地裏の支配者を気取っていた仲間たちが次々と骸^{むくろ}へと変わってしまったのだから、^{けいれん}痙攣と見紛う^{みまご}ほどに激しく震えながら後ずさって建物の壁に背中をぶつけるのも至極順当な反応と言えるだろう。

「な、なんだよ……聞いてないぞ……シマ荒らしを取り締まんのは当然だろうが……わ、わざわざ、外人の殺し屋送ってくるとか……どこのバカが……」

「殺し屋か」

思わず、アサシンは口元^{くちげ}を歪めてしまう。

「ああ、そうですね。死神などではない。私は、せいぜい殺し屋がいいところ」

「え」

照れた風な——何処か恥ずかしそうな少女としての声色と、口元へ手を当てる愛嬌^{あいきょう}のある仕草を目にして、男がぽかんと口を開ける。凄絶^{せいぜつ}な殺人を目の当たりにしたことによる異常なまでの緊張

感が、弛緩^{し かん}する。

後はもう簡単だった。

足音なく静かに接近して、毒^{アサシン}の娘は、優しく彼の顔を両手で挟み込む。

「正解の褒美です」

致死の口付け。

二秒と経たず、五人目の脳機能は完全に停止した。

後には、生きているのはアサシン自身と気絶した女がひとりのみ。

「……未熟」

髑髏の仮面へ、僅かに返り血の一滴が付着していた。

主人^{もと}の許へ戻らなくてはならないというのに、これではいけない。汚れた姿などをお見せする訳には
いかないのだから、とアサシンは考える。身を清めねばならない。たとえ主人が真に天の遣いであろう
となかろうと、やはり、必要な行為^{けが}だ。至高の存在は穢れてはいけないし、穢れを近付けてもいけな
い。

『貴方^{あなた}のことなど、愛歌さまは見えていませんよ』

と——声なき声が頭蓋の内側に響いていた。

心地良い感触ではない。

キャスターによる、遠隔会話の類の魔術だ。マスターとサーバントが使用するというものによく似て
いるらしいが、正確なことをアサシンは知り得ていない。

『無論。私のこともね。あの御方の透き通る瞳^{ひとみ}が見つめるのは、過去、現在、未来に於いてもただ
のひとりに他ならない。貴方も、分かっている筈^{はず}ですが』

「……」

努めて、無言。

アサシンは一切の返答を行わない。

かの英霊はことある毎にこちらへ言葉を掛けてくるが、絶対に、反応するものか。

そんなことは、とうに理解しているからだ。

自分もキャスターもただの道具だ。聖杯へとくべられる六騎のうちの一騎でしかない。

いと高き場所におわすべき少女が求めるのは、ただひとり。

否。ただ一騎。

——もはや、私は何も望まない。

——我があるじとして、ただ、沙条愛歌がこの世に在ってくださればいい。

——そう決めた筈なのに。

——この身はなぜ、あるじとは異なる少年^{タツミ}の横顔を想うのだろう。



連続少女大量失踪^{しっそう}事件。

一昨日あたりから、そういうモノが都内で起こってるとは噂に聞いていた。新聞とかじゃ取り上げられてないけど、起こってるのは知ってた。あたしと同じコトしてる子たちの中にも、ちらほら姿を消してるのがいたしさ。

まさか、あたしも被害者になるだなんて思いもしなかったよ。

ああ、うん。そう。被害者。

こうしてファーストフードのお店でいつもみたく時間潰^{つぶ}して、あなたに話せてるのが何だか嘘みたいに見える。あなたあれでしょう、警察のヒトなんでしょう。

え、ちょっと違う？

警察だったらあたしのバイトにお目こぼしなんかしないって？

あはは。それはそうだね、うちのママにも内緒にしてくれてるみたいだし。そこはありがとう。ううん、本当に。法律すれすれってのは分かってるし、やくざに目を付けられるのも知ってるけど、できればママには心配かけたくないからさ。

……ほんと、ママの顔をまた見られて良かった。

それくらい怖い思いをしたの。

いつもと同じ夜だったんだよ、途中までは。

病院の夜勤でママは帰って来ない日だし、朝帰りでもいいかなって思いながら池袋で遊んでたら、ガラの悪い連中に絡まれて——何、バイトしてたんじゃないか、ってそれはまあ言わないでおく。ぼかす言い方ぐらいさせてよ。

ともかくね、アレは恐かった。

チンピラなんかどうだっていいの、媚^こびてればそのうちどうにかなったりするし……ならないコトがあるのは知った上で、そんな問題じゃないくらい酷^{ひど}いモノがね。

人間の頭ってさ、まっぶたつになっても表情が浮かぶだなんて知らなかった。しかも、上と下で違う顔してるの。上の顔は驚いてて、下の顔は半笑い。

言う割に平気な顔してるんですね、ってそりゃそうでしょう。

その時は、ただスプラッターなだけだったから。だけ、なんて言えるのがまずおかしいのはあたしも分かってる。でも、それより恐いのを味わっちゃったからかな、あたしの頭は多分まだ麻痺^{まひ}したままなんだと思う。

うん。あれはまだ序の口。

マシな方だった。

死神みたいな仮面をした女の子が、チンピラを皆殺しにして、あたしを助けて——

ああ、別に、助けた訳じゃなかったのかな。グロい死体が量産されてるのを見ながらあたしは気絶して、で、目が覚めて……うん、目覚めた時にはそう勘違いしたの。ああ、やり方は酷くてもあの子はあたしを助けてくれたんだな、って。

外見は覚えてる。

白い仮面。褐色っていうのかな、日に焼けてるのとは違う綺麗な肌で。

年はあたしと同じくらいだと思う。十六、七。スタイルは良かったよ。脚なんかすごくすらっとしてて、腰も細くて、綺麗だった。あたしたちのバイトじゃ目立つから、その手のお店に行って勤めればすごく稼げるんじゃないかな。

ああ、うん。話の続きね。

あたしは暗いトコで目が覚めた。

うん、真っ暗。よく覚えてないっていうか暗すぎてはっきり断言できないってのが正しいかな。それから、沢山いた。何人かな。十人以上はいたと思うし、もっとかも。ああ、もつといたんだろうな……息遣いっていうか、寝息っていうか、^{すご}凄く多く感じたから。

——たぶん、何十人か。女の子たちが眠っていたの。

恐いっていうより現実感がなかった。かな。

チンピラが肉塊になるのを見るのは真正面から気持ち悪かったけど、恐かったけど、暗い場所に女の子が数えられないくらいいるっていうのは、変な夢を見てるような感じ。本当に、夢を見てるのかと思ったくらい。

でも、寒かったから、夢じゃないってすぐ分かった。

あたし、夢の中で寒さとか暑さとか感じない方だから。

それからどうしたって？

逃げた。逃げようとしたわよ、当然。

仮面の子はもしかしたら外国のマフィアかギャングの関係の何かで、あたしはどこかに売り払われるのかも、とか思って……思ったかな、どうかな、逃げなきゃいけないって何となく思っただけかもしれない。

嫌な予感がしたの。

直感ね。陳腐な言い方でも、他に浮かばないからそう言うよ。

ああ、あたしはここにいたら絶対死んじゃう、って何となく思ったの。あ、何となくっていうのは漠然としてるって意味で、その時のあたしは必死だった。汗なんかだらだらかいて、奥歯も勝手にカチカチ鳴っちゃって。

暗いのが恐かった。

暗闇の奥に、何かがいる気がしてさ。

そしたら――

いきなり、あたしの目の前にあいつがいたの。

「わたし、愛歌っていうの」

そんな風に言いながらあいつはあたしに笑い掛けてきた。

思い出すだけでも吐きそうになる。

信じられないくらいに可愛くて、お人形みたいに綺麗で、妖精^{ようせい}みたいにきらきらしながらそいつはいたの。本当に光ってた訳じゃないにしても、きらきらしてた。分かるでしょ、こう、きらきらしてる感じ。分からない？

ああ、女だよ。女の子。

そこら中で寝てる女の子たちよりも何歳か下かな、たぶん。

明かりなんて点いてないから真っ暗だったのに、透き通った瞳をよく覚えてる。

「あなた、何かの才能があるのかしら。それとも耐性？ 希釈したアサシンの神経毒を受けても動けるだなんて」

あいつはそう言った。

ああ、記憶にある通り言ってるだけだから、意味は分からないよ。

「普通はこうなの」

って言いながら、あいつは寝てる女の子たちを指さして、

「そして、ああなるのよ」

次に、暗がりの奥の方を指さした。

暗くてよく見えないから目を凝らしてさ、それでも見えなくて、ああ、向こうは真っ暗なだけで何もないんだ、って思いかけたらやっと見えてきた。暗いのには目が慣れてきたのか、他の理由があったのかは知らない。

だんだん見えてきたんだよ。

暗がりの中にさ……。

ぼんやりした顔で、ずっとずっと先っていうか奥の奥、もっと暗い場所へ歩いていく、数え切れないくらいの女の子たち。別に手錠を掛けられてる訳でもないし、縄で縛られてる訳でもない、ゴツい見張りとかがいる訳でもないのに――うん、監視の類なんてひとりもいなかった――ただ、ぼうつとしながら歩いて行くの。

「あれはね、みんな、大事な生贄^{いけにえ}なの」

あいつは言った。

生贄。イケニエ。はっきりそう言った。

ああ、こいつは本気で言っている。あの子たちを、っていうかあたしたちを全員、悪魔だか神さまだか知らないけど殺すつもりなんだろうな——ってすぐに分かった。

誰だってあいつを見れば分かるよ。

あの顔、あの目。

ぜんぶ本気なんだってすぐに理解できる。で、恐くなる。

「あれも、あなたもそう。これからあなたたちの命はあの子の栄養になるの。喜びなさい、それはとっても素敵なことなのよ」

あいつは笑ってた。

どれだけ楽しければそんなに明るい顔になれるのか、ってくらい。

分かる？ この時、あたしがどれだけ恐かったか。

チンピラがSFXっぽくバラバラになって死んだ様子なんてどうだってよくなる。

あたしは泣いてた。

涙で顔ぐしゃぐしゃにしながら、鼻水だって出てたと思う。

どんなクスリを使ってるにせよ、これだけ大量に人間を誘拐するような奴が、ラブロマンスのヒロインみたいにきらきらした表情浮かべながら、心の底から気持ちを込めてイケニエだ栄養だ語ってるなんて、恐い、逃げたい、以外には何も浮かんで来ないよ。

え。ラブロマンスって言い方が気になる？

そう言われても——

訂正なんてしないよ。

あれは間違いなく、恋する女の顔だった。

恐かった。ほんとに。

感じてるのは寒気どころじゃなかった。氷の塊を抱き締めてるみたいな感覚。

今も、こうやって明るくてヒトが沢山いる場所じゃなかったら話すのだって無理なくらい。だって、そうでしょう。あたしはあんまりまっとうな恋愛なんて縁がないけれど、ほら恋って……。

恋とか愛とかって、もっと素敵なものじゃないの？

あたしもよくは知らないよ。

ええと、どこまで話したっけ。ああ、あいつね。あたしはあいつに言ったの。助けて欲しい、ここから逃がして、ってさ。

舌が痺^{しび}れてうまく喋^{しゃべ}れなかったけど、もう、必死にあいつに縫^{すが}ったよ。

そしたらどうしたと思う、あいつ。

笑った？

違う。あいつ、あたしを見たんだ。

虫でも見るみたいな……それも違うかな、うん、足下に転がってる小石とか、埃^{ほこり}とか、そういう、どうでもいいものを見るみたいな目でさ。ぞくりとした。寒気の塊で背中を、背骨に沿ってぐさぐさ刺されるみたいだった。

ああ、あたしはここで死ぬのね。

そう思った。

ママのことも考えられなかった。

……ちょっと待って。ごめん、やっぱり話すんじゃなかった。

駄目。怖い。やっぱり、あ、あたし、まだ怖い……ここ、本当に大丈夫だよな……？

【記録、一時中断】

【精神状態の安定措置を施した後に記録再開】

ごめんね、変な風になっちゃって。

そうだよな。大丈夫だよな。現にあたし、こうして生きてるんだし。うん。

あたしの言葉はあいつには欠片も届かなくて、あたしもあの子たちも殺されるんだって思ってたなら、そう、ひとりだけいたんだ。

助けてくれた。

それまでどこにいたのか、突然出てきた男の子がいたの。

たぶん高校生だと思う。顔はよく見えなかったかな。ほら、暗い場所だったから。

「……た、ま、き」

タマキ、かな。

誰かの名前なんだと思う。

自分の恋人とか家族とかを助けに来たのかもね。もしかしたら、あたしがその子に似てたのかもしれない。くぐもって、呻き声みたいな感じだったけど、男の子は「たまき」って何度も言いながら、あたしとあいつの間に割って入ってきてくれて。

格好良かったよ。

何だか、子供向けのテレビ番組のヒーローみたいだった。

「なあに？ アサシンがペットを連れてきたのは聞いていたけれど、ふふ、ペットのペットが牙を剥いてしまうの？」

あいつはちょっと興味を持ったみたいだった。

あたしが泣きじゃくっても無反応だったのにね。

で、あいつは男の子に何かしようとした。何かしたのかな。よく分からない。そしたら仮面の子がさ、池袋の路地裏でチンピラ連中相手にしてた時と同じ感じで、スーツと出てきかと思ったら、がばっと男の子を庇ったの。

抱き締めるみたいな感じ？

もしもナイフなり銃なりであいつが男の子を殺そうとするなら、自分の背中で受け止めて守る、とか。そういう庇い方。

その時のあたしは座り込んだ状態だったから、それを真下から見てた。

あたしを男の子が庇って、男の子を仮面の子が庇う。そういう形になってた。

「お許し、ください……我があるじ……」

仮面の子、何か言ってた。

「私、私は……」

何を……求めて、何の、ために……聖杯……に……」

独り言だったのかな。

「タツミ……！」

ああ、最後に言ったのは男の子の名前なんだろうね。

ふたりはきっと、知り合いだったのだと思う。そういう雰囲気。

だってタツミ君？ 彼を両手で抱き締めながら、仮面の子は泣いてたの。あたしが命^{いのち}乞いしながら泣くのと全然違う、あれは……。

悲しいから泣く方の涙、かな。

どうにもならなくて、自分がどうしようもなくダメな奴だって思えて流れてくる涙。

そういうのは池袋でもちらちら見るし、たまに鏡の前でも見るから、そうだと思う。

仮面の子は、後は黙ってただ泣いてた。



男の子は、もそもぞしてたけど、特に何か言ったりはしなかったね。
そうしたら、あいつはいよいよ興味深い素振りになって、仮面の子を見つめて――
「ペット思いなのね、アサシン。可愛いわ。許してあげる」
そう言って。
あたしの方へ、振り返って。
にっこり笑ったの。

「――でも、あなたは別よ」

……その笑顔があまりに綺麗で、綺麗すぎて、恐すぎて、あたしはよく分からないことを叫びながら
また気を失った。うん。気絶したんだと思う。気絶なんて、そうそう味わったことないから断言はしない
方がいいかな。

幾つか、声も聞こえてきたし。
「お待ち下さい」
って、聞き覚えのない声。
優しい感じの、大人の男の声だったと思う。
「愛歌さま。その少女は生贄には不向きであるかと」
「アサシンの次は、あなた？ 皆、よほどこの子のことが大事なようね」

「いいえ、まさか。この娘は些^{いささ}か、恐怖の感情を増大させ過ぎているものと懸念しております。こと、
大聖杯の純粋性を翳^{かげ}らせる一因とも成りかねない、かと」

「ふうん」
言葉の意味？
分かるはずないじゃない。
「ひとつ減らすなら、ひとつ増やさなきゃ。代わりは用意出来ているんでしょう？」
「御意」
それで、おしまい。
あたしが覚えているのはここまで。
次に気が付いたら池袋駅北口のほうの、えっと、商店街裏のラブホ街にいて――

（聖堂教会による記録から
女子高生・芳守鈴^{よしもり すず}の
記憶処理前の証言より抜粋）



サーヴァントの暴走、その可能性及び危険性については既に語ったが。
暴走するのは決して英霊だけではない。

時には魔術師^{マスター}が狂気に陥ることもあるだろう。
特に、召喚した英霊との接触によってマスターが暴走した場合。
実に危険な状態であると言える。

英霊はそれぞれに願いを抱く。
我ら魔術師や魔術協会、聖堂教会による裏切りの契約であるとも知らぬままに。
この状況にあって、マスターが真に英霊の側に立ってしまった場合――

願望機としての聖杯は大いに危険なものと化すだろう。
無論、英霊が秘めた願いの内容如何^{いかん}ではあるが。

（古びた一冊のノートより抜粋）



東京某所、地下大空洞。

その最奥にあたる場所には深淵^{しんえん}が大きく口を開けていた。

一切の光差さぬ場所、紛うことなき闇の園。忠実な下僕であるキャストを傍らに控えさせながら、機嫌よく微笑^{みどり}んで、翠色のドレスを纏う愛歌は暗黒^{たた}を湛えた地の底へと穏やかな視線を向けていた。とっておきの宝物を眺めるように、特に気に入った愛玩動物^{あいがんめ}を愛でるようにして、不気味に脈動し続ける、物言わぬ粘塊が如き肉塊へと。

見るがいい。

地の底^{うごめ}で蠢き続けるそれは、この世の闇を高密度に凝集させたものだ。

それは、想念。

それは、欲望。

それは、聖杯。

地下大聖杯。人の想念を、多くの魂^たを溜める大なる器。

「……偽なる聖杯」

現在に至るまでの時間で収集した情報によってキャストが確信した通り、これは聖堂教会や魔術協会が語っている奇跡の装置などではないのだ。信じ難いまでの規模の魔術的存在ではあろうが、万能の願望機であるものか。

聞けば、とある枢機卿こそがこの聖杯を持ち出したのだという。

奇蹟^{きせき}の極みたる聖遺物。救世主の血を受けたという“杯”を模して造られた模倣聖杯。

七騎すべての魂を捧げなくては本来、大聖杯は真に起動しないというが、英霊一騎に相当する量^{あまた}の数多の生贄を喰らえば、大聖杯は起動を果たす。

ただし。

起動の後に導かれるのは、別段、儀式参加者の願いではない。

そもそもからして――

この器は願望機などではないのだから。

無論、主人とてそれを理解してはいるのだろう。

「ねえ、偽物の聖杯さん。いいえ、あなたは卵。世界に生まれ出ようとしてもがく、愛らしい真っ黒な卵なのよ」

「卵ですか」

主人の言葉に沿ってキャストは呟^{つぶや}く。

彼の魔術的解析によれば、是なる暗黒は目覚めを待つ雛鳥^{ひなどり}の殻、たゆたいながら夢見る摇篮^{ようらん}と目される。七騎の英霊の魂をくべることで殻は間違いなく破れるだろう。

天上の響きを以て主人が語るままに、世界に未だ根ざしていない靈基が生まれ出る。
英靈の召喚とは訳が違う。
恐らく、聖杯から這い出たこれは正しく受肉・誕生するだろう。

——だが一体、何が生まれるというのか？

この時、キャスターは最終解答にまでは辿り着いていなかった。
であるが故に主人へ尋ねたのだ。

想い人の目的を成就せんがために貴方は何を目覚めさせるのか、と。愛歌はすぐには返答せず、
代わりにこうして深淵へと自分を連れて来たのだった。躊躇せずにキャスターは従った。いずれ自分
もアサシンも、この暗黒の底に蠢くものへの糧となるのは間違いなく、それがこの夜この時に早まるの
だとしても一向に構いはしない。

既にすべてを主人へと捧げている。

否。世界の万物は、我が主人の所有物に過ぎないのだから。

迷いも、恐怖も、涙も。

本来彼が尊いと感じるもの、庇護すべき幼子たちの可能性さえも意味を成さない。

「枢機卿はね、なんだかひどく思い違いをしているの」

「貴方ほどに世界を識る者など不在はしないでしょう、愛歌さま」

「滑稽なくらいに違うのよ？ 枢機卿ったら、聖杯が起動すれば高位の存在が召喚されるって信じ
ているのだから」

「……天使」

彼らが奉じる教えに於いては、神は唯一のものであるという。

ならば高位存在とは何を指す？

キャスターの脳裏には、数多の宗教画にて描かれる御使いの姿が浮かんでいた。

「いいえ。違うわ」

小さく首を振って、愛歌は告げる。

呼応するかのように一際激しく脈動する暗黒へと微笑みながら。

「——この子は“獣”、よ——」

その名の意味するところを彼女は語りはしない。

次に作ろうと決めた焼き菓子の名前をこっそり教える様子にも似て、愛らしくも可憐な華やかさで、ただ名称ひとつきを述べるだけ。であるのにキャストは目を見開き、東京に於ける一九九一年の現界で見せたことのない表情を浮かべていた。

汗の玉が頬に浮き上がる。

世界の所有者たる沙条愛歌に出逢った折にさえ見せなかったものだ。

それは、戦慄だ。

生前、魔術の知識を遍く世に広めんとしたがため——広範かつ普遍的な医療の発展と人々の安寧とに繋がると信じて——神秘の隠匿に著しく反したとして、時計塔から派遣された刺客たちを前にした時でさえ、人を害する魔術を極めた猛者たちに肉体と生命を粉々に打ち砕かれた時でさえ、彼は平静を保ち続けたというのに。

「今、何と……仰いましたか」

「聖杯は願望機なんかじゃないわ。でも、あの子が目覚めれば、わたしと彼はきっとブリテンを救えるの」

キャストの疑問に愛歌は答えない。

故国の救済。此処にはいないセイバーの願いをこそ想っているのだろう。

頬を赤らめ、瞳を潤ませながら——

「だからキャスト、アサシンと一緒に生贄を集めて頂戴。まだまだ足りないわ。もっともっと、そうね、数で言うなら六〇〇人くらいは最低でも欲しいかしら」

両腕を広げながら彼女がくるとステップを踏むと、ふわりとスカートが広がる。

嗚呼、華麗の華が暗黒を供として舞うか。

「本当は価値がない子たちに、価値をあげるの。彼の魂の代わりになれるのよ。それってあまりに素敵に過ぎるわ。何千、何万という無価値は、けれどここに集まることで光輝く価値を持つ」

繊細な指先が空間を指し示す。

其処には、白い服を纏った無数の少女たちの姿があった。この三日間で集めに集めた百数十名。いずれもすべて、自我を失った虚ろの表情を浮かべている。正しくは、アサシンの毒を利用してキャストが調合した特殊な薬剤によって表情と共に感情を一時的に剝離させているのだった。

不足分である七騎目の魂の代替としての、あれは生贄だ。

恐怖もなく、躊躇いもなく、自意識さえなく。

あれらは無垢の精神を強制的に維持されたまま、己が命を投げ打つのだ。

古きアステカの神殿にて髑髏の神に心臓を捧げる者たちを思わせるある種の敬虔ささえ湛えながら、少女たちは暗がりを歩み、そして。

次々と落ちていく。

餌を求めて胎動する大聖杯——暗黒の底へと目掛けて。

「喜ばない、平凡なあなたたちでも彼の役に立てるのだから」

輝く花の微笑みが在った。

そして。

『————ツ!!』

贅を貪る^{よろこ}喜びを^{あらわ}顕すようにして胎動し、ただ一声、大聖杯が咆哮^{ほうこう}する刹那^{せつな}！

大いなる戦慄と共にキャスターは真実を目にしていた。

今こそ彼は識る。聖杯という殻を纏った“卵”の中に眠るそれが、六六六の数字を背負うものが、やがて海の^{かなた}彼方より来たるものが何であるのかを。

欲望の果て。

破滅の道標。

この獣には、他の何も在りはしない！

災厄の獣と称するに^{ふさわ}相応しい、深淵から^{はる}発せられる竜種すら遙かに^{しの}凌ごうかという暗黒の魔力を前にして、キャスターは^{かつもく}刮目する。

「……そうか、獣、とは……！」

これは、人に^{あだ}仇なすものだ。

これは、人を喰らうものだ。

これは、人を滅ぼすものだ。

魔獣など目ではない、圧倒的なまでの魔力が集積されているのが見て取れる。

枢機卿よ、お前は致命的なまでに間違えたのだ。天使などであるものか、此処に眠るのは聖なるものではない、人が人であるが故に逃れられはしない性質！

時に強烈に、甘美に、人を惑わせるが如くして荒ぶらせてしまうもの。

その先に悲惨な末路が待っていると分かっているにもかかわらず止まらない、止められはしない衝動の源。人間という生物が、知恵持つ動物であるが故に切り捨てることの叶わない——

「こんなものが、我ら七騎の願いの果てか！」

「彼の願いには必要よ？」

驚きも否定も何もなく、ただあるがままに愛歌は口元を^{ほころ}綻ばせる。

「世界も、歴史も、数多の命が紡いできた何もかも——

SF映画のように言うなら、時空の連続体かしら。固定されてしまった事象を、ええ、現在に至る

までの人理定礎を粉々にしてしまわないと、彼の願いは叶わない。そのためにこそこの子が要るの」

何もかもを呑み込んだ上で笑うのか。

自分が、何を、誕生へ導こうとしているのかを真に理解した上で、それでも。

「都市を喰らうもの。^{ソドムズビースト}いいえ、都市なんかじゃ済ませてあげない、わたしの世界の^{もの}すべてを食べなさい」

くるり、くるり。

止める者のいない暗黒を背にして、沙条愛歌は舞い続ける。

「お祝いをしましょう、だって、お誕生日が近いもの！

生まれてきなさい、可愛いビースト！

この子の吠え声ひとつで皆は叫び、大地は裂けて、大河は真紅に染まるの！

人の積み重ねてきたすべてを崩し、歴史は碎けて、ブリテンは再び顕れる！」

——命も、夢も、願いも。

「そして彼は、時の果てまで王として在り続けるの」

——時間や空間さえも。

「唯一、命在ることを許されるアヴァロンならざる永遠^{ブリテン}の国で」

——あらゆるすべてを碎いて、碎いて、碎き尽くして。

栄光の王国を取り戻す。

逆を返せば、そうしなければ取り戻せない。

そう告げながら——

世界のあるじは、目覚めかけつつある暗黒に微笑み掛ける。



The background of the page is a solid black rectangle. On the left side, there are stylized, dark grey or black leaf-like patterns that appear to be part of a larger, more complex design. These patterns are layered and have a sense of depth, with some parts being more prominent than others. The overall aesthetic is dark and moody.

Knight of Fate ACT-3

一九九一年、二月某日。午後。

東京都新宿区、JR新宿駅東口付近。

新宿アルタ前という呼称を既にセイバーは知っていた。

それほど何度も目にした訳ではないまでも、動く絵画のようにして世界を切り取るが如き受像機^{テレビジョン}は沙条邸の広い居間の片隅にも在って、日々の正午あたりからリアルタイムの談話を映し出す番組があるとは認識している。多くの人で溢れる^{あふ}この場所こそが、かの番組の撮影場所付近であるということも。

数多^{あまた}の男女が行き交う中、彼は歩んでいた。

何らかの作戦指示をマスターから受けている訳ではない――

それは、現代という世界、東京という都市に現界してから初めての事態ではあった。

マスターである沙条愛歌^{さ じょう まな か}の勝利に伴って、東京全域は安全地帯へと変わっていた。敵対するサーヴァントがもはや一騎たりとも存在しないという事実がそうさせる。ほんの^{おととい}一昨日までは、聖杯戦争の戦場であったというのに。

偵察^{しやうかい}でも哨戒でもなく街を歩く。

旧き聖典に記される巨塔が如き超高層ビルディング群の谷間を縫って、キャメロットに於ける最大の市場よりもなお人通りの多い道を進み、大量の煙を排気させながら無数にすれ違う自動四輪の走行音を耳にしながら、ただひたすらに。歩き続ける。

是^{これ}は散歩のようなものか。

否。断じて、否。

人混みの流れとは逆方向に歩き続ける彼の^{まと}纏う気配は、穏やかなものではない。

金髪碧眼^{へき がん}を備えた見目良い長身の青年の姿に見取れる者は多くとも、その心身に秘めた想いに気付く者はひとりとしていない。

「……愛歌」

セイバーは^{つぶや}呟く。己を召喚した主人である^{はず}筈の少女の名を。

「大聖杯は、何処だ」

昨晚遅くの記憶を彼は思う。



沙条邸。正確に言うならば午前三時十二分頃からの記憶。

突如として愛歌は口にしたのだった。拠点を杉並から他所^{よそ}へと移す、と。

『残りの儀式はここでは難しいから、わたし、大聖杯のあるところへ拠点を移すわ。場所はまだ秘密。とっておきのパーティにしたいから、あなたが来るのは最後の最後。こういうのは、ほら、サプライズ・パーティと言うのよね？』

少女は普段通りの可憐^{かれん}さを湛^{たた}えて微笑みながら、やんわりとセイバーの同行を制したのだった。さながら幼子に言い諭すようにして、単身で森へと踏み入ってはならないと告げる農村に生きる父母のさまにも似た様子で。

一体、外で何をしているのか。

大聖杯を擁した拠点とは。

既に敵対する陣営はすべて制した。奇跡的に生き残ったマスターも完全に戦意を喪失、これ以上の儀式継続は不可能な状態にあるという。

敵対者を想定し、最後のマスターである愛歌を守護するべく行動する必要はない？

そうとも言えるのだろうが、聖堂教会は未だ儀式の終了^{いま}を告げていない。

『聖杯にちょっとした儀式を行う必要があるの。あの子たちの力も借りないと』

『ならば私も同行しよう』

『……ううん。やっぱり、あなたはまだここにいて頂戴^{ちやうだい}』

愛歌は少し迷う素振りを見せてからセイバーの申し出を断った。

『ライダーを倒せたのはあなたのお陰。あんな状態になってしまったランサーをきちんと倒しきれたのだって、そう。わたしひとりじゃ無理なもの。あのね、セイバー。あなたはもうやるべきことを終えたの。聖杯戦争は終わり。後は、魔術師の役目よ？』

『しかし』

『願い^{かな}を叶える準備を整えるまで、待っていて。すぐに終わらせるから』

まるで大がかりな料理を作っているかの如き優美の口振り。

いつもと変わらぬ姿形。

声色^{ひとみ}にも瞳にも、一切の迷いの色を少女は浮かべてはいなかった。

だが、やはり、何かが――

『いいのよ、セイバー。喜んで。』

あなたは、あなただけの願いを叶えられる。可哀想なブリテンを救っていいの。

そのための聖杯は手許^{てもと}に在って、そのためにわたしはすべてをあなたにあげる』

自然、問い掛けていた。

沙条愛歌。きみは何故そこまで言えるのか。

ほんの十数日前に出会ったばかりの過去の剣士に対して、すべてを捧^{ささ}げる、などと心底から迷いなく告げてみせるのか。上辺のみの言葉ではなく、魂にも近い場所から放たれる想いであると確信できるのは、セイバーの直感^なの為^なせるわざだった。真なる竜の心臓を有しているが故に得た多くの力のうちのひとつは、常時ではないにせよ、時にこうして音の連なりに過ぎないはずの言葉の真偽を見定める。

『だって』

少女は、頬を淡く桃色に染めて――

『あなたに、恋してしまったの。愛してしまったの。心から。……ううん、あなたが、わたしに心くれたのよ』

嘘ではない。

声。言葉。紛^{まご}うことなき想いの発露。

そう、彼女は決して嘘を口にしないのだ。

ならば、真実の言葉のみで飾りながら、佳麗の少女は果たして何を隠すのか。

「ただ待ち続けていれば願いは叶う、か」

――願った。祈った。

――そして、世界の誘いに応じたからこそ此^こ處^こに自分は立っている。

故国の救済。

数多の民を守り、ブリテンの地を保ち続けること。

卑王ヴォーティガーンを苦闘の末に打ち倒した後も勢い止まらずに押し寄せるサクソンとの戦いの中で、相次ぐ凶作や水難を経て荒廃していく国土を前にして、一時、この身は聖杯を求めた。現代では伝説として語られる、完成したばかりのキャメロット城、円卓に集った誇り高き騎士たちへと命じての聖杯探索。

主の奇跡の具現であれば、民族の移動というあまりに巨大な事象に晒^{さら}されたブリテンの地にも救いはもたらされるであろうと、願った。そうだ。縋^{すが}るほどに祈った。

サクソンを手引きしてブリテンの民を苦しめる邪悪の王であった筈のヴォーティガーン^{ある}の真意は、或いは、阻止など現実には不可能にも等しいサクソンとのある種の融和策であったのではないか――それがすべてではないにせよ、卑王にはブリテン島統一の野望の意図が確かに在ったにせよ、一面に於^おいては正しき行いではなかったのか。

苦悩の果てに、そう、自分は奇跡へ手を伸ばしたのだ。

人々の願い^たを溜め、やがて満たされた暁には満ち溢れるであろう主の威光へと。

だが、遂にこの手は聖杯を掴まなかった。

聖杯探索へと遣わした最も偉大なる騎士はかの聖杯へと辿り着いたが、救世主の如くして祝福と共に天へと至り、聖杯も同じくしてかたちを失った。尊き想いを秘めた純粹なる騎士が祝福を得たという事実には激しく心動かされ、感じ入ったが——しかし。

地上に主の救いはもたらされなかった。

ブリテンには死と苦難が溢れ続け、民は悉く疲れ果て、幼子たちは嘔び泣いた。生きる者は苦しむ者と同義となっていた。刃による死は、餓えによる死に比べれば慈悲に満ちているとまで言う者も現れて、そして、そんな言動を責めるのは容易ではあれど諭すことは困難になりつつあった。

呪いだと言う者もいた。此処こそが地獄なのだと嘆く者も。

故に。この身は、願いつける他になかった。

今も、同じだ。

血塗られた悲劇から故国を救うために、アーサー・ペンドラゴンは東京に在る。

けれど——

『かつて俺たちが守った愛すべきあいつらと、何の違いもあるものか』

刹那、アーチャーの言葉が反芻される。

刹那、玲瓏館の森にて救った艶やかな黒髪の少女を思い出す。

揺れる瞳。魔術の素養を示すものか是不確かなれど、色素の薄さを示す紅の双眸。儚くも潰えようとしている命のきらめき。救いの手を待ち侘びる者が、手を差し伸べられた際に浮かべるあの感情の色を前に、間違いなく自分は得ていたはずだ。

ひとつの確かな実感を。

アーチャー、アーラシュ・カマンガーの告げた言葉とまったく同じそれを！

「……私は」

胸の奥に生じるざわつきを抑えられない。

狂獣、弓兵、騎兵、槍兵。

瞼を閉じればすぐにでも英霊たちの最期の姿が浮かび上がる。

彼らは、皆。それぞれの願いを秘めながら。

一様にして。願いを捨てて、等しく尊きもののために死したのではないか？

断言はできない。鋭い直感もそこまでは見通せない。だが、それでも、東京の何処かに眠ると語られる地下大聖杯を、かつてのブリテンで求めた聖杯と同じように敬い、至上の聖遺物として尊ばんとする感覚は薄れている。

それどころか疑念の対象として現時点では捉えざるを得ない。

キャスターに至っては、明確に予言したのだ。東京湾上神殿決戦の翌朝。

——東京に生きる無^む辜^この命が地下大聖杯へ捧げられる、と——

故に、こうしてセイバーは探^わず。僅かなりとも魔力の痕^{こん}跡^{せき}を求めて。

マスターが秘するものを、少女が真実のみを語りながらも覆^{もの}い隠し続ける聖杯を。

そして、もしも。

大聖杯がランサーの言葉通りの存在であったならば。

「——」

新宿駅から大^{おお}久^く保^ぼへと延びる高架線路を西へぐり抜けて、セイバーは空を仰ぐ。

見渡す限りの広大な空ではない。建造されたばかりだという新宿新都庁を始めとする超高層建築によって幾らか切り取られた様子の、灰色。中天の陽を忘れ去ったが如き濁った空は、いつかの頭上に在ったものによく似ている。

セイバーは目を細めながら、想う。

灰色の空。

遠き記憶。

故国がため、勝利の栄光がために迷いなく聖剣を振るい続けた日々を。



——遙^{はる}か過去。暗雲たちこめる空の下、火花を散らす刃と刃。

スワシの谷での戦い。

伝説となった両雄の一騎打ち。

両者共に大軍団を背にした、それは壮烈を極めた死闘であった。

帝国最強と名高き将軍にして、最高統治者たる“皇帝^{シーザー}”との殺し合い。

聖剣と魔剣による運命的な激突は、人智を超えた有り様として両軍の兵の目に映ったものであったとは後より聞いた。実際のところ、自分たちが如何^いなる戦いを繰り広げているのかを把握する余裕など有りはしなかった。長きに渡る苦境^{あえ}に喘ぎ続けるブリテンの民を守るべき王として、救世を為すべき王として、父王ウーサーより定められ作り上げられた一箇の竜として、自分は侵略者たち^{ほふ}を屠るための機構で在り続けた。

殺すために来たるものを、殺し尽くす。他に道はなかった。

時にして、聖杯探索が終わりを迎えて後の出来事。

バトニクス山に於ける決戦に勝利し、苛^か烈^{れつ}をきわめたサクソンとの戦いを辛うじて平定させた頃だった。更に言うなら、永遠であろうと謳^{うた}われたブリテンの円卓に、致命的なまでの亀裂^きが入ってから後の大規模な戦いでもあった。

一縷^{いち}の希望であった聖杯の消失。

王妃ギネヴィアとランロット卿の不貞。

そして多くの円卓の騎士の死。

幾つもの不運と災いを経た上で、アーサー王としての自分は戦い続けることを選んだ。

否、やはり他に道はなかった。サクソンによる民族移動という巨大な事象を援護するという形でブリテン島への干渉を始めた大陸の帝国——紀元前より権勢を誇る偉容の大ローマ帝国は、ガリアの地から更なる魔手を伸ばそうとしていた。

最早^{もはや}、迎え撃つばかりではこの戦いは終わらない。

海を越えられてしまえばすべてが終わる。

「打って出る」

この一言に異を唱える者はいなかった。

円卓の貢献者とも言うべき偉大なるペリノア王や、狡知^{こうち}に長けたアグラヴェイン^{きやう}卿であれば王たる我が身を諫められたかもしれないが、両者は共に呪わしき運命の果てに落命^{えい}していた。叡智^{えいち}を修めた美しき魔術師マーリンはただ沈黙を保っていたが、大陸出征へと発つ船出の日、大船団を望

む波止場にて、彼女は静かにこう告げてきたのだった。

「いずれ滅びる国だ」と。

帝国を指しての言葉ではなかった。

当然、ブリテンを指しているのだろうとすぐに理解できた。

「たとえあと百年持ち堪^{こた}えたところでこの島の歴史に大きな影響はない。というか、もう滅びているの。ブリテンはここまでだ。

……なんて、ボクが言ったらキミはどうするかしら？」

人と夢魔の混血である美しき女魔術師の言葉を、一言一句、忘れはしない。

世界を見通す瞳を真っ直ぐに見据えながら、アーサーは返答した。

「いつもの悪い冗談だと怒るよ。ブリテンは滅びない」

静かに、穏やかに。

十年来の友へと語るように。

「そのために、僕は僕に出来ることをする」

自らが成すべきことは分かっている。

ゆえに、名にし負うローマ帝国が相手であろうとも怯^{ひる}みはしない。怯む筈がない。

「ならば、夢を見ることだ。キミは夢のままに勝つだろう」

「血塗られた夢は見たくないな」

聖剣を振るって数多を殺した。

聖^{せい}槍^{そう}を振るって数多を屠^{ころ}った。

ブリテン諸侯の最後の力を今こそ結集させた軍を率いて海を渡り、サクソンのみならずピクト人まで配下としたローマ帝国ガリア州総督たるフロル王をまずはパリシウスの地にて打ち倒した。フロル王は勇敢かつ屈強な偉丈夫な騎兵であり、恐るべき槍^{やり}の名手でもあったが、アーサー王の聖剣の前には敵ではなかった。ローマの威光を叫ぶ彼を、鋼鉄の兜^{かぶと}ごと、あっさりと両断してみせた。

吹き上がる鮮血を前にして何かの表情を自分は浮かべただろうか。

否だ。ただ静かに聖剣を空へと掲げた。勝利の勝ち鬨^{とき}は、ガウエイン卿によってもたらされていた。以前の一件で深く傷付きながらも、是非にと志願して出征に同行してくれた卿は、ベディヴィエール卿と並び、アーサー王の先陣に従ってくれていた。

フロル王のパリシウス要塞^{ようさい}から剣を――ガリア支配の王権を象徴するという魔剣クラレントを奪い取り、本国の首都^{キャメロット}へと送った後、アーサーは更に軍を南下させた。自軍の疲弊は色濃いが選択の余地はない。既に此方^{こちら}へと迫りつつあったローマ帝国の具現とも言うべき脅威と、今こそ決戦を果たさねばならない。

そして、ついに彼と――

スワシの溪谷地帯にて。

大陸最強と名高き男と対峙したのだった。

「全霊を込めろ。赤き竜」

素っ気ない一言と共に打ち込まれる、強烈そのものである一撃。魔剣の刃。

空間を揺らすが如き威力は、聖剣の刀身で真正面から受け止めたはずのアーサー王の体軀に衝撃を走らせて、踏み締めた大地をひび割れさせる。一瞬遅れてからの周囲へと放たれた圧力は、溪谷の壁面をも打ち砕く。二〇世紀現在で言うところの衝撃波か。

「俺にも、お前にも。是はまたとない好機だ、落胆させてくれるなよ」

彼こそ、大ローマ帝国を統べる者。

現皇帝。異名は「剣帝」。

名をルキウス・ヒペリウス。或いはルキウス・ヒベルス。

ギリシャ人の王エピストロフス、アフリカ人の王ムステンサル、ヒスパニア王アリファティマ、エジプト王パンドラス、バビロニア王ミキプサ、ビティニア王ポリテテス等をはじめとした多くの諸王や指揮官から成る大連合軍を率いる男。異形の獣に騎乗して人々を容易く屠る悪魔の名を有した金城鉄壁の巨人数十体、神代の秘儀を紐解かんとして凶悪な破壊の術を見出した魔術師の男女、異様の振る舞いで兵をねじり殺してみせる東方の呪術師や異能者、等々さまざまな超常の存在を一種の兵器として鮮やかに運用してみせる大陸最強の司令官として、彼の凄まじいまでの勇名はブリテンの地にさえ響き渡る程のものではあった。

真紅の魔剣フロレントを有した、威風堂々の風貌を湛えた大剣士。

戦略と戦術の天才にして、東方の猛者たちから羅刹と恐れられた戦士。かつて隆盛を誇ったローマ帝国の闘技場が近年に入ってにわかに衰退した原因こそ、最強者として君臨し続けた彼の存在であったとさえ言われる――

だが。それが、どうしたというのだ。

港で花の魔術師へと語った通り、何者が相手でも怯みはしなかった。

此処までの道程で、巨人を幾度殺してきただろう。

魔術、呪術、人智の及ばぬ神秘が牙剥くたびにどれだけ切り裂いてきたか。

歴史深き大帝国であろうと、立ちちはだかるならば破壊するのみ。他に進む道はない。

すべては安寧のために。

幼子が自らの命を差し出すこの地上に、救いをもたらすために――

「我が許に来い、アルトゥールス。ブリテンの赤き竜」

剛剣一合。二合。三合。

聖剣と魔剣とが鎧^{つば ぜ}迫り合う最中^{さ なか}、ルキウスはそう言った。

ベディヴィエール卿の鎧^{よろい}を砕きながら重い拳^{こぶし}を喰らわせ、中天の下に在っては無敵とも呼べる力を誇るガウェイン卿を剣閃^{けん せん}によって鮮やかに一蹴^{いっ しゅう}した上での、それは皇帝による降伏の勧告であったのか。それとも再度の宣戦の布告だったか。

大陸全土の統治を象徴する皇帝剣^{フロレント}を手に、彼は傲然^{ごう ぜん}と笑ってみせた。



「フロルの死は当然だ。お前に勝てる訳がない。コルグリヌスとバルトゥルススを殺した上に、サクソンやスコット、ピクトの連中をさんざん打ち破ってみせた聖剣使いに、たかが人間程度が勝てるものかよ」

「……ならば貴様も勝てはすまい」

言葉を吐き捨てて、距離を取る。

風に加護による即時移動は人間の反応速度を超えている。追い付けはしない。

剣帝^{りょ りょく}の膂力は確かに大したものではある。よく鍛えてある。帝国の闘士であろうと東方の不可思議なわざを操る戦士であろうと物の数ではないのだろう。だが、そう、それでも人間に過ぎない。精霊^{せいりょう}に加護さえ味方に付けるアーサー王の敵ではない。

と、僅かな油断は瞬時^{た た つぶ}に叩き潰される。

有り得ざる神速で、ルキウスの姿は眼前に迫っていた。

「お前のことは調べ尽くしたのだ、アルトゥールス。スメルセテンティスでは、コルグリヌス兄弟ごと四七〇人を一振りで殺したそうだな」

大きく振りかぶっての剣撃。重い。

聖剣で正確に受け止めるが、みしりと肩の骨格が悲鳴を上げる。

この筋力。魔獣のそれに似た性質か！

「ははッ」

鋭い犬歯が僅かに見える。

続けざまの連撃。余人には、剣帝の武器が消えたように見えただろう。

赤い軌跡だけが空中に刻まれる。ひとつ、ふたつ、一呼吸の間にそれは数え切れないまでの数に膨れあがっていく。対処しなければ、鎧ごと寸断されていただろう。

無論、聖剣によってすべての剣撃をアーサーは受け止めている。

「はは、我が巨人^{ブラキウム・エクス・ジーガス}の腕に耐えきるか！」

戦場の中心にいながら笑うのか、この男は。

何が楽しい。

命を奪い合う場に在ることが、それほどまでに愉^{たの}しいか。

「ああ、楽しいね。楽しいともさ！ 竜の心臓の持ち主、俺の一撃を四度も止めるか！」

ルキウスの蹴^けり込みが蒼銀^{そうぎん}の鎧へと吸い込まれる。

撓^{しな}る蛇が如き蹴撃は東洋の格闘術か。予想外の攻撃を真正面から喰らい、呼吸が僅かに乱れる。致命傷ではない。ならば多少の損傷に過ぎない。かつてマーリンから魔力炉と称された心臓から発生する膨大な魔力が、聖剣の特性とも相まって肉体^{けんろう}を堅牢に維持してくれる。傷は癒^いえる。残るのは痛みだけだ。

痛みは耐えられる。

有形、無形のそれらを受け続けてきたのだ。

蹴りを喰らうのとほぼ同時に、蹴り脚を叩き折るべく膝と肘を繰り出すが――

「面白い」

かわ
躲される。笑い混じりに。

闘技場を制した剣帝、対人戦闘によほど慣れているのか。

ならば、と聖剣をすらりと一振り。大気が破裂する。叩き斬るためのものではなく魔力を込めた見えざる拡散攻撃だ。必殺の威力はないが、まともに当たれば幾らかの隙も生まれよう。

自然な仕草でルキウスは大気の奔流へと一歩、踏み込む。

瞬間、風の凶刃が雲散霧消する。ただの騎士や剣士に為せる訳がない。剣帝の背後遠く、幾万と控える魔術師ないし呪術師による援護か。正体定かならぬまでも、何らかの魔力をアーサーは感じ取っていた。身に纏った甲冑に依る可能性もある。噂として伝え聞く英雄ヘクトールの武具であれば、或いは。

「ブリテンにはお前のような怪物が他にもいるのか？　ならば、是非、この俺のものにしたい。お前も、お前のブリテンも！」

「皇帝みずから進軍する理由が、それか」

「魔術師どもが五月蠅く語るのだ。ブリテンの島には、未だ神代の力が色濃く残されていると。所詮は魔獣の生き残りやピクトであろうと、半信半疑ではあったが……」

言葉と共にルキウスは更に襲い掛かってくる。

剣撃、甲冑に包まれた脚撃と拳撃、体重移動を利用した背や肩による強烈な打撃をも織り交ぜた、文字通りに全身を武器とした猛攻！

剣の一本で捌ききれものではない。同時二十連攻撃のうち二つ、拳と肩を用いた打撃がアーサーの防御をぐり抜けていた。肋骨が粉碎され、内臓が数個潰される。体勢が崩れかける。剣の構えも揺れる――

このまま畳み掛けられて絶命するのか。

いいや。

湖の乙女より授けられた聖剣の力は、こんなものではない。

「……ッ！」

鋭い呼気。斬り上げによる一閃！

体勢を崩しているが故の片手攻撃ではあるが、アーサーは反撃を放っていた。

聖剣の刃が弧を描き、僅かな黄金の煌めきが空間を縦に切り裂いていく。

追撃とばかりに魔剣を大きく振りかぶっていたルキウスが咄嗟に息を呑み、解けるように崩壊していく空間めがけて凄烈の気迫を込めて刃を斬り下ろす。煌めきの残滓と真紅の刃がぶつかり合う刹那、爆発的な衝撃が渓谷全体を覆う！

土と岩が粉々に碎けて、周囲に粉塵が立ち込める中、一騎打ちを見守る巨人の一体が興奮するように咆哮を上げ始める。

「片手でこれか！ いいぞ、やはりお前とブリテンは戴こう！」

砂煙を切り払いながら剣帝が姿を顕す。

一見すれば五体無事か。否、よく見れば左腕が灼き尽くされて黒炭を思わせる色合いに変色しているが、それもすぐに何らかの魔術的效果によって修復されていく。

「ははは、いいぞ！ これが地の利！ 谷の霊脈は既に我が手の裡にある！」

「笑うな」

距離を取ったアーサーは、静かに剣を構え直す。

「皇帝よ、我らは命のやり取りをしている」

「無論そうだろうよ！」

「自らの命ではなく、我らは数多の民の命をも背負って戦っている」 剣の切先を相手の心臓へ向けながら「愉しむな。笑うな。ルキウス、その哄笑はあまりにおぞましい」

「おぞましい、か。貴様にはそう見えるのか？」

大剣を軽々と右手で掲げ、そのまま刀身を肩に預けてルキウスは嗤う。

自由になった左手を灰色の空へと向けながら――

「大陸を支配するということは、天上におわす御方に代わり万物を統べるということに他ならない。慈しまれながら生まれる無辜の命たちも、戦場で草木の如く刈り取られる無惨の命たちも、すべて等しく。尊さも、惨さも、すべてはこの手の中にある」

左手、かたちなき光を握むが如く。

「お前とて王であるなら僅かでも感じているだろうよ。民を庇護し、国を栄えさせるが故に、我らにはすべてが与えられ、何もかもが許される。我らこそが――」

左手、尊きものを握り潰すが如く。

「地上の神だ！」

笑みを深めながら、剣帝は宣う。

魔剣の刀身が魔力を帯びて、真紅の稲光を湛えてゆく。

皇帝剣フロレント。ガリア支配を示す魔剣クラレントの兄弟剣と目される大陸全土の支配を象徴する剣であり、最優の名剣とも言われる。刀身に咲き乱れる百合の花模様は、曰く花神フローラの

加護を受けているとか。

百合とはすなわち誕生を示す花であり、剣の喩えでもある。

生命を示す剣を血の華と変えるか、剣帝ルキウス。

「神祖ロムルスは雷に消え昇天したという！

ならば、当代のローマ皇帝たる俺が雷を振るうに何の疑問が在ろう！」

「地上に在りし誰もが弱き人であり、決して神ではない」

アーサーは剣を構え、そして、両手で握った聖剣を高々と掲げる。

剣帝の言葉すべてを驕りに過ぎぬと断じるのは容易だが、事実として大陸の支配者であるこの男には何ひとつ届かないだろう。王の傲岸。王の不遜。或いは神のそれであるのかまでは判断が付かない。考えるまでもない直感が在る、確信だけが在る。

語るべき事柄があるのなら、剣で述べ、剣で叫べ。

そう、ローマ皇帝ルキウス・ヒベリウスは全身で顕している。

——ならば応えよう。

——この両手に握った、聖剣の重みを以てして！

「いいや、分かるだろう。我らは神だ。我らは永遠の存在と成るだろう」

「何——」

「貴様も俺と同じだろうが、赤き竜。知っているぞ！

嫡子の存在を認めぬのは、貴様が俺と同じ存在だからだ！ 地上を統べる力を身に備え、永遠を生きるのだと確信した者だけが到達叶う境地、それこそが！」

「黙れ」

——聖剣拘束解放——

——魔剣限定解除——

王と王、互いのすべてを懸けた正々堂々の一騎打ち。

剣と剣、聖剣と魔剣による激突。

大陸遠征へと向けてブリテンを発ったその晩、アーサーが船中にて見た夢の通り。

空を征く大熊が海岸すべてを震撼させる吠え声を上げるも、西方から飛来した竜が光を放ちながら襲い掛かり、竜は炎の息で大熊を焼き焦がし、焼け焦げたその死体を大地に投げ倒す——すなわち、大熊は皇帝。竜こそがアーサー王。

皇帝は聖剣の輝きの一端に呑み込まれ、歴史上からも姿を消した。

溪谷は地形ごと消滅へと至り、数多の凶猛の力を擁した帝国軍は瓦解^{が かい}するに至った。

約束された勝利の栄光は此処に。誉れは此処に。

サクソンの民族移動という人類史に於ける事象は未だ止められないまでも、小さな西方の島を明日にも蹂躪^{じゅうりん}せんとする大帝国の企てはとうとう潰えたのだった。

大いなる勝利と、明日へのささやかな希望。

今にして思えば是こそが。

聖剣を振るうに足る栄光に満ちた、最後の戦いであつたのかもしれない。



サーヴァントたちの現界、その在り方について。
是は大きく二種に分類される。

第一に、伝説、伝承と共に在ることで強化されている者。
歴史上の實在が記録として確認されている場合は主にこちらへ分類されるであろう。
如何に勇猛果敢で知られる将軍であろうと、生来の能力は現実の範疇^{はんちゆう}に収まる。

第二に、クラスという鑄型に当てはめられることによって力を減衰させている者。
まさしく神話、伝説、伝承の住人とも言うべき存在がこちらに分類されるであろう。
喩えば神代の大英雄であれば間違いなくこの分類である。

第一の分類であろうと、魔術なりの神秘を備えていたのであれば当然話は異なる。
いずれにせよ彼らは伝説を神秘として身に秘めた超常の存在だ。
そして同時に、人間と変わらぬ精神の持ち主でもある――

（古びた一冊のノートより抜粋）



「何故、お前がここにいる。セイバー」

深夜、沙条邸。

地下大聖杯の行方を求めて都内を彷徨^{さまよ}った果ての午前一時過ぎ。

ガーデンへと通じる渡り廊下の入口にて、セイバーは沙条^{ひろ}広樹^きに呼び止められていた。振り返るまでもなく気配は察^あしていたが、敢えて、邸内の自由な行動を許してくれた当主への礼節として彼へと向き直る。

年齢の割には深く刻まれた皺^{しわ}。沙条家現当主である広樹の表情は静かに陰しい。

「愛歌はどうした」

恐らくはそうだろうと予測を付けてはいたが、やはり。

彼もまた愛歌の行動の全貌を把握してはいないか。

「地下大聖杯の探索はどうなっている。小聖杯の入手まではキャスターより逐次報告があったが、昨晚から何の連絡もない。お前は何か聞いているか」

「いいえ」

愛歌は、大聖杯の発見を当主へ告げていないのか。

道義としては語るべきと心得ながらも、沙条家ではなくあくまで愛歌のサーヴァントとして召喚された身では此处で愛歌の行動を伝える訳にはいかない。と——考え掛けて、セイバーは僅かに表情を曇らせる。

マスター^{サーヴァント}の従僕としての行動を自分はこうも採ってしまうのか。

大聖杯を探すという、ある意味では待機命令に対する反抗とも呼べる行為に丸一日を費やしておきながら。

「そうだろうな。お前にはあれは多くを隠しているのだろう。私にもだ」

「ご当主」

「言うな。言う必要はない、セイバー。天地が逆しまになろうと、あれがよもや家族の身を案じることなどあるものか。必要がないという判断を行ったまでだろうよ」

当主の言葉はあまりに正しかった。

数秒の沈黙の後、沙条広樹はガーデンへと視線を向ける。

沙条家の人間は皆、多くの植物に満ちた緑の園を指して庭園とは呼ばない。何もかもを奔放に自分の意思で決めているが如き愛歌にしてもそうだった。庭園でも、植物園でも、魔術のための工房でもなく、あくまで彼らはガーデンと呼び習わす。

聞けば、今は亡き当主の奥方が英国出身であったが故だとか。

彼女はそれを庭園とは呼ばなかった。ただ、ガーデン、と。

「綾香^{あや か}はあそこだ。姉の姿が見えず、寂しいのだろう。声を掛けてやってくれ」

「それは——」あなたが。と言い掛けたが、当主に片手で制されてしまう。

「私はどうに魔術の師だ。父としての慈しみは、人のようにはできない」

多くの魔術師の在り方はあまりに克己的だ。沙条家についても例外ではない。

セイバーの記憶に色濃く残る魔術師と言えば花の彼女であり、禁欲や克己とはかけ離れているように思えるものの、確かに、世俗を生きる人々の在り方とはやはり異なっていたのだろう。道は違えど、いずれも超越者の在り方なのだ。

それは酷だ、とセイバーは想う。

自分の行く末を見定められる年頃の人間ならば道は好きに選べば良い。

けれど、幼子には。あまりにも。

「もしも、第二の聖杯戦争が行われたならば……誰が綾香を守るのか」

返答を求めての言葉ではなかった。それは、当主の独り言だ。

月も星も浮かばない暗い夜空の下で、請い願うようにして彼は語る。

曰く、聖杯戦争が如何に恐るべきものであるか。家系の魔術を修めた魔術師同士の闘争などとは名ばかりの凄絶の具現であることを、今回の戦いを通じて痛い程に理解した。東京湾神殿。神王。救世の一矢。半神の暴走。これほど過酷な戦いであつたとは——

「かつて渦へと至った先達がそうであつたように、根源へ到達すれば愛歌は消え去る。二度目の聖杯戦争があつたとしても、私のみでは到底力が足りまい。果たしてこの手で娘を守り切れるものか」

家系のためか。愛のためか。

どちらの意味で語っているのか、セイバーは問わなかった。

「玲瓏館^{み さ や}については……美沙夜君が生き残つたのは、およそ奇跡だ。幼子ひとり、よくぞ人智を超える猛威の中で生き延びた」

深い溜息^{ためいき}。我が身に置き換えて考えているのか。

「お前のような騎士が付いてくれたならば、多少は気も楽になるのだろうが」

苦笑交じりの冗談めいた言葉。

其処^{そこ}には、間違いなく、切なる願いと祈りが込められていた。

——父と子の絆^{きずな}。

——それは、私が、恐らく最後の最後まで持ち得なかったものだった。

遙かなる遠き時代、ブリテン^{しゅうえん}の終焉。

栄光^{あつ け}は呆気なく潰えた。

ローマ帝国への勝利の後、凱旋した我が身を待ち受けた叛逆。妖妃の子にして我が写し身でもあった忌み子、円卓の騎士モードレッドはサクソンやピクトをはじめとする反抗勢力を纏め上げて、強力な魔軍を率いて反旗を翻したのだった。

泥沼の内戦。円卓は破壊され、キャメロットは砕け、ブリテンのすべては失われた。

そして、カムランの丘にて。

「父よ。貴様の愛するすべてを俺は破壊しよう！ 何も要らぬ、何も欲さぬ、貴様が絶望に吠えるさまをこそ私が愛してやろうとも！ アーサー・ペンドラゴン！」

魔剣クラレントを手にしたモードレッドとの、最期の死闘。

父ではなく。人ではなく。

ただひとりの王として、聖槍を以て裏切りの騎士を誅戮せしめたが——
暴虐の炎によってあらゆるものが失われた。

民が死んだ。子が死んだ。

救いの日は、とうとう最期の時まで訪れることはなかった。

故に。故に。

血塗られた過去のすべてを、セイバーは否定し続ける。

「……ん」

過去の記憶から現実へと意識の焦点が戻る刹那。

気付けば、当主広樹の姿はなかった。

そして、セイバーはガーデンの内部へと足を踏み入れていた。

渡り廊下から進んで、自ら硝子戸を開けて此处へと至ったのだろうが、はっきりとした認識がない。自然と歩いていた。記憶がない訳ではないものの、明確に意識しないまま来てしまったのは確かだった。

過去を想いながら、そう、誰かの声を聞いた気がする。

当主の声。違う。

幼子の声。違う。

穏やかで優しいが、それは、いつかの日に耳にした湖の乙女の囁きにも似て。

「ヴィヴィアン？」

我知らずに名を呟いていた。すると、がさり、と傍らの緑から音がした。

幼子だ。沙条家当主の娘、愛歌の妹。気配を意識的に探らずともはっきりと分かる。

こちらの様子を窺うようにして、木陰からちらちらと顔を出している。

何と愛らしいのだろう。

小動物の仔^こを想起させるような、暖かないじらしさだった。

子供の相手をするのは得意ではないという自覚があったが、それでも、幼い頃の自分へと養父エクターがしてくれたように腰^{かが}を屈めて、視線の高さを合わせてみる。どんな表情を浮かべて、何と呼び掛けるべきだろうか。夜更け過ぎ、緑の園で出会った幼子へ、統治する王としてではなく、敵^{さつ}を殺戮^{りく}する武器としてでなく――

「はじめまして。お嬢さん」

「は、はじめ、まして」

「素敵な夜だね。それに、素敵な庭だ」

ああ。これは順当でない。

これでは宮廷で騎士が貴婦人^{レディ}に呼び掛けるようなやり方だ。

今夜は星が出ていない。素敵な夜であるものか。そして、何よりも。

「ううん、お庭じゃない。ガーデンっていうの――」

その通りだ。

此処はガーデン、彼女たちの母^{のこ}が遺したという穏やかな緑の園。

「すまない。ガーデン、そうだったね。素敵なガーデンだ」

「うん」幼子は微笑んで「えっと、お父さんのお客さん？ お姉ちゃんのお友達？」

「僕は騎士だ。もう夜も遅いからね、きみの父上に代わってきみを守ろう」

「騎士」

幼子は、驚いたような顔をしている。

些^{いさ}かおとぎ話じみた表現に過ぎただろうか。幼いとは言っても、既に読み書きが可能な年齢であつた筈だし、流石に子供だましが過ぎた。訂正するにはどうすればいいかとセイバーは考えようとするも、巧^{うま}い路線変更が思い浮かばない。

ならばこのまま押し通すしかあるまい。

「レディ。きみを寝室まで護衛しよう」

「ふふ。レディって、わたしまだ子供だよ？」

言いながら、幼子が木陰からひょこりと姿のすべてを見せてくる。

怯^{おび}えたような様子はたちまち消えていた。

楽しそうに笑っている――

まぶ
(眩しいな)

ふと、自然と目を細めてしまう。

間違いなく夜中であるのに、まるで朝焼けの輝きを見るかのような錯覚があつて。

「騎士さん、お名前は何というの？」

「僕は……」真名を隠す必要を感じなかった。告げてしまおう。告げるべきだと魂の何処かで何かが叫んでいた。「アーサーが僕の名だ。お嬢さん、きみの名を尋ねても？」

「わたし、沙条綾香」

ああ、知っている。良い名だとも思う。

名付け親の正確な意図は分からないが、恐らくは韻を愛歌に合わせたのだろう。

「それから、ここはガーデンね」

気恥ずかしそうに、綾香は緑の木々を指し示す。

まるで我がことのように言っている？

緑の園と自己を同一視しているかのような気配が、幼い言葉の端には在った。

「あのね、わたし、ガーデンって勉強をする場所だと思ってたんだけど……本当は違ったの。お父さんが教えてくれて……」

「隠された秘密があるのかい」穏やかに尋ねる。

「うん」

^{うなず}頷いたものの、そのまま綾香は^{うつむ}俯いてしまう。

辛抱強く待機する。一秒、二秒。

五秒が過ぎる頃になってようやく顔を上げて、やはり何処か照れた風に。

「ガーデンはわたしの」

何らかの理由で同一視しているのだろう。そう思いかけた、瞬間。

「——お母さんが遺してくれたものだから、どっちも同じなの——」

風が吹いていた。

硝子戸を閉めているにも^{かか}拘わらず、それは間違いなく通り抜けたのだった。

アーサー・ペンドラゴンの^{からだ}肉体と^{こころ}精神にそっと触れながら。



それは――

優しさ、尊ぶべき暖かさと、輝きに満ちた言葉だった。

子のために残された緑の園。

子のために紡がれた想い。

何年もの時を超えて現在になお残る、血脈、運命、業……いいや、いいや違う。

それを“愛”と人は呼ぶのだろう。

「過去と現在……」

私は――

僕は――

アーサー・ペンドラゴンは、ひとりで言葉を母語で呟っていた。

「……ああ、そうか。こんなにも簡単なことだったのか」

「え、えっと、なに？」

ごめんよ、綾香。突然独り言を始めてしまったものだから、驚かせてしまったね。

過去と現在は確かに繋がっていて、過去は礎となって今へと続く。

求めた場所は、此処に在る。

求めた明日は、^{きみ}綾香に違いない。

「ありがとう、レディ。きみのお陰だ。僕は、僕が^な為すべきことを^{ようや}漸く知った」

「うん？」

「すべては此処にある。きみの母上が、きみという明日を遺せたように」

きみの言葉が僕を繋いだ。

僕とブリテンのすべては、きっと、無駄ではなかった。

きみに似た明日を^{いま}遺したに違いない。

無論、世界のすべてが救われてはいないだろうけれど、^{ち なまぐさ}血腥いニュースが世界各地から届くのだ
ろうけれど、救いの国は近付いているのだと信じよう。ああ、信じるさ。

信じられるとも。

僕は、その証拠をこうして前にしている。

疑うのならば見るがいい。

――母の遺した愛に包まれながら健やかに育ちゆく、きみという^{いと}愛し子を。

救いの国は此処に。

救いの日は現在^{いま}に。

たとえ、巨大な事象の前に崩れ去ったブリテンという過去が、現代に至るまでの人類史の中で定められてしまった結果が血塗られていようとも。

「過程と結果はワンセットじゃない」

過程も結果も、成果も、それぞれが独立した人間の意思だ。

「時には、選ぶこと自体が答えとなることもある」

星なき空の下で僕は木々を見上げる。

きみの母上の選択が、間違いなく此処には在るのだ。

愛を遺す。かたちとして。

愛を示す。いのちとして。

それは、何と眩^{まばゆ}く、何と美しい答えだろうか――

「僕は、世界を守り、きみを守ろう。沙条綾香」

王ではなく。人ではなく。

誰しものが明日を遺せるための、ただひとりの英雄として。





Knight of Fate ACT-4

天の星々を地上に降ろしたかの如き、東京の夜景。

夜の無い街。人造の光によって暗がりを払う一千万都市。自らの所有物のうちのひとつとしてのそれを、感慨なげに見下ろす少女がひとり。異国の大聖堂を模して建造されたという超高層ビルディング——ふたつの屋上部によって成立する双塔のうち南側に佇んで、二騎の^{たたず}下僕^{サーヴァント}を傍に控えさせた超常の少女だった。

^さ沙条^{じょう}愛歌^{あいか}。全能として生まれ落ちた、しかし今では少女として振る舞うもの。

東京を喰らい、世界さえ噛み砕く恋心の持ち主であった。

一九九一年、二月某日。深夜。

東京都新宿区、都庁第一本庁舎屋上部。

「——ご報告いたします。愛歌さま」

地上二四〇メートルにも及ぶ高所にあつて、吹きすさぶ夜風^{さら}に晒されながら、主人たる少女へと報告を告げる長身の人物がある。キャスター・パラケルスス。わざわざこんなところまで付いて来なくても良いのよと言われたにも拘わらず^{かか}、忠実な魔術師は当然の顔で主人の近くに立っている。律儀というか、生真面目というか。元からそういう傾向はあったものの、数日前から、その堅苦しさには一層の磨きが掛かってしまった。

(無理もない)

アサシンは、内心で呟く^{つぶや}。少女の傍にそっと控えながら。

(大聖杯の真実を知ったのだろう、あなたも)

むしろ、以前と同様の言動を維持できているだけでも大したものだ。聖杯へかける願いが強ければ強いほど、かつての人生への後悔と悲嘆が深ければ深いほどに、大聖杯と相対したサーヴァントが受ける衝撃は巨大なものとなるだろう。

自分がもしも主人と出会い、触れ合っていなければ——或いは^{ある}少年^{タツミ}と出会っていなければ——きっと、簡単に壊れたのだろう。アサシンはそう考える。英雄たりえる強靱^{きょうじん}な意志も、誇り高き魂も、この身には宿らなかった。教団の武器として、兵器として在り続けただけの身は、感じることも全般が苦手に過ぎる。

けれど、キャスターは壊れていない。

穏やかな目元も、落ち着いた気配も以前のまま。忠誠に基づく行動の数々も。

涼やかな魔術師といった印象そのものには何の変化もない。

張り詰めた緊張の糸だけは隠しきれずに晒してしまっているが、特段、それを少女が指摘する素振りもない。気付いていない、という訳ではない筈^{はず}だ。主人は、東京のみならず世界を掌中にして

いるも同然なのだとキャストが言うところの少女は、およそ不可能など有り得ない存在である。

何も告げないのであれば、それが正しいのだろう。

「昨日より、セイバーは都内各地を移動し続けています。恐らくは、地下大聖杯の在処^{ありか}を探っているでしょう」

キャストの紡ぐ言葉は、強風の中でもするりと耳へ届いてくる。

風の元素魔術を利用した音声伝達^{たぐい}の類か。器用なものだ。

「ふふ、せっかちなセイバーね」

「御意」

「パーティの主賓には、ちゃんと待っていて欲しいのに」

少女は、歌うようにして声を放つ。

魔術の類など何も行使してはいないのに、不思議と声は風に遮られずに響き渡る。主人は花だ。如何なる嵐^{いか}が襲い来ようとも折れはしない、不変の花であるに違いない。刃も、呪いも、魔術も、聖杯にて眠る獣にさえも傷付けられはしないのだろう。

月光も、無数にちりばめられた地上の灯り^{あか}も、少女を祝福するだけなのだ。

きっと最後の瞬間まで。

「わたしは多くのことを成せるけれど」

主人。あるじ。

毒に触れても死ぬことのない少女。

地下の暗がりにて、反射的にタツミ^{かば}を庇ってしまった我が身を許したもうた輝き。

アサシンは絶対の忠誠を再度誓う。二度とあのような無様を行いはすまい、と。

「時の流れの中で、完全に固定されてしまった事象は……超えられない。わたしの手でブリテンが生き残る可能性を作ることはできても、事象の固定にぶつかればあっさり消えてしまう。どうあれ栄光のブリテンは滅び、サクソンの人々は新たな国を興して、やがて現代へと続く英国が生まれ出る」

「事象^{せんてい}の剪定、ですか」

「ええ。そして、世界は今へと続いてしまう」

主人の声に、物憂げな響きが混ざる。

あまりに珍しいことだった。

昼日中、太陽が突然にして消え失せるが如き異常の事態。

「なら、彼のために、わたしはすべてを止めないと。壊さないといけないわ——」

最後まで聞かずとも、アサシンには理解できる。キャストもそうだろう。

過去。歴史。人類史。この世界を形作るすべてを破壊するためにこそ、聖杯が要るのだ。

黙示^{ビースト}の獣が。

主人の力を更に高めるための増幅器^{ブースター}として。

曰^{いわ}く、主人の身に備わった魔術回路は神秘を超えた奇蹟^{き せき}をも可能とする全能^{ふさわ}に相応しく、異常とも言える超常の性能を有しているのだとか。だが悲しいかな、あまりに特異に過ぎる存在である故か、量に劣る。不可能に等しい奇跡の数々を成せはしても、規模と回数にはある程度の制限が付いて回ってしまう。

しかし。聖杯^{よう らん}を揺籃として眠る獣の魔力^{もつ}を以てすれば、この制限は解除される。

あとほんの少し。

そう、もう一歩だけ踏み出せばいい。

アサシンとキャスターがこの数日の間に都内で掻き集めた無垢^かの魂^{む く}、数多^{あまた}の少女たちの命は、今夜にはかろうじて英霊一騎の魂に相当する量へと達するだろう。更に、下僕たる自分たち二騎が命^{ささ}を捧げれば、大聖杯はいよいよ起動する。

恐らくは、今夜。

極東の都市にて世界のすべてが終わり、主人の願いが実現する。

「アサシン」

声を。掛けられていた。

物思いに耽^{ふけ}っていたせいで、反応が遅れてしまう。

半呼吸の後に顔を上げたアサシンの視界に映るのは、煌めくばかりの東京の夜景を眼下にしなから振り返る、主人の姿だった。可憐^{か れん}の花そのものである沙条愛歌が、こちらへと手を伸ばしていた。ああ、触れる。触れられてしまう。他人^{キャスター}が見ているのに。

肌に、顎^{あご}に。

死の塊である褐色の肌に、優しく、白い指先が接触していた。

壊れ物を扱うように。

儚^{はかな}い泡を突くように。

いつかの日、自分はどうしただろう。

震えた。全身を戦慄^{わなな}かせて、熱く昂^{たか}ぶり、滾^{たぎ}ってしまったのを憶えている。

(ああ、愛歌さま)

出会った日から、ずっと従ってきた。

聖杯によって再びの生を得た理由は、この少女と出会うためであったのだと信じて。

なのに――

(誰かに触れて貰^{もら}える喜び。私が、ずっと求め続けていたものを)

それは。よく似ていた。そっくり同じだと断言してしまっても構わない。

(私は、あなただけでなく、彼^{タツミ}にも感じてしまうのです)

貌^{かお}が、髑髏^{どくろ}の仮面に覆われていて良かった。

恍惚^{こうこつ}と歓喜、陶醉^{こうよう}と昂揚^{こうよう}が導く微笑み。

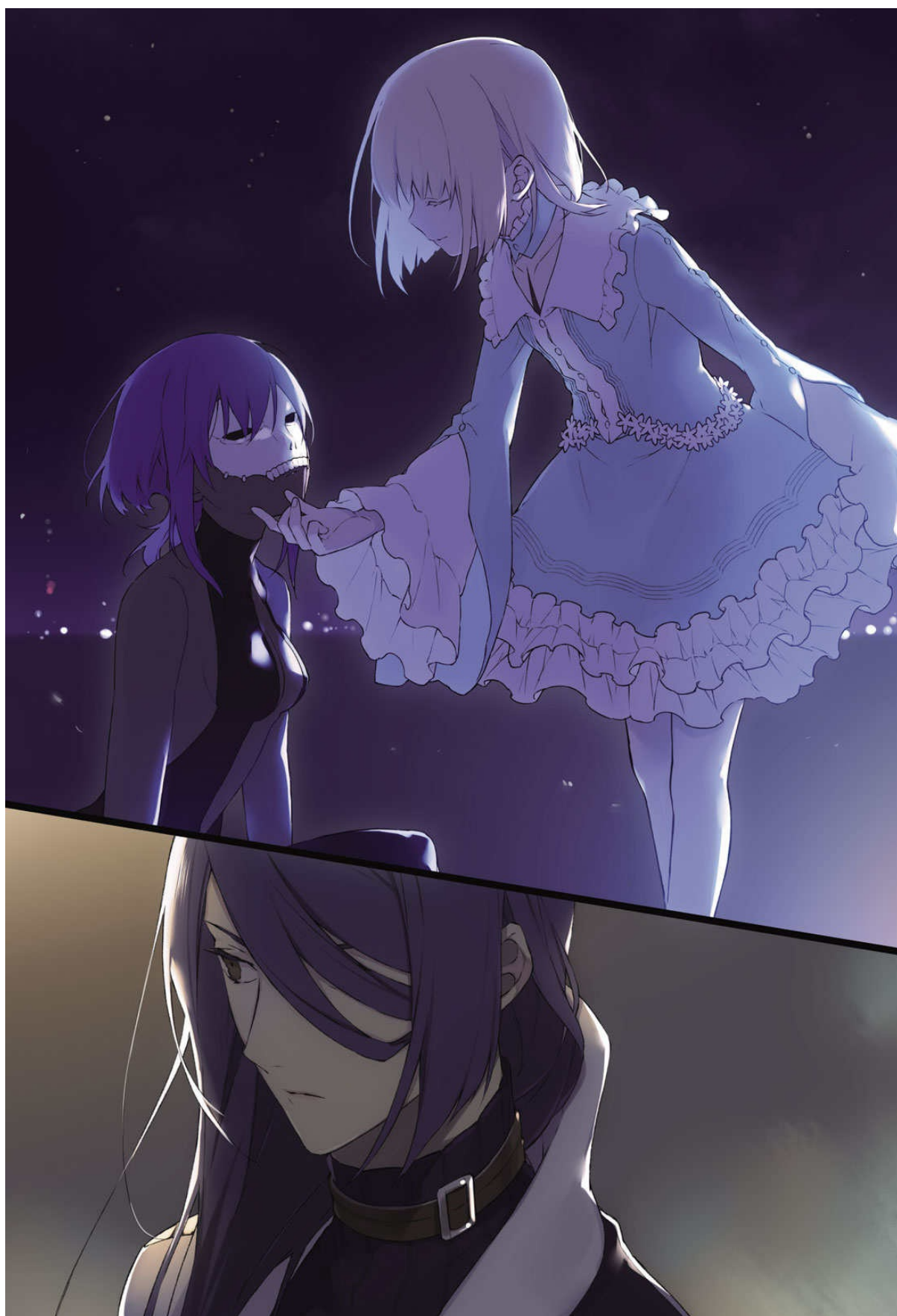
自責^{しゅうち}と羞恥、孤独と哀切が導く泣き顔。

ふたつの表情が入り交じって、きっと、ひどく醜い表情になっていただろうから。

「ハサン。ジール、だったかしらね？」

視線を上げる。

少女の顔が見えて、アサシンは俄^{にわか}に硬直する。



表情。浮かんでいる感情。今までに見た憶え^{おぼ}などまるでない、それは——
「一昨日^{おととい}のあなた、素敵だった。あの男の子が死んでいようと生きていようと、そんな関係ないわ。
あんな風に必死になるくらいなもの」
昼の光を思わせる、朗らかな口元だった。
「あなたにも、きっと、この気持ちが分かると思うの。……誰かを好きになって、恋して、夢中になって
しまうのはね、世界にあまねくものの中で、いちばん」
夜の陰を思わせる、切なげな目元でもあった。

「素敵なものよね」

何も、言えなかった。
少女が視線と共に言葉をくれたというのに、何ひとつ。返せない。
ただ、呆然^{ぼうぜん}としていた。
震えたまま、急速に冷めていく体の熱を寂しく感じながら。
「ふたりともお疲れさま。生贄^{いけにえ}集めはもういいわ。わたしがひとり、拾ってくるから」
供はいらない。
そう言って闇に消える少女の背中を、ただ見つめることしかできなかった。

——この夜、この瞬間が。

——二度目の生^おに於ける、最後の別れになるとも知らないままに。



マスターの暴走について。

聖杯戦争に参加する魔術師、すなわち英霊^{サーヴァント}を用いた壮絶の殺し合いに挑むマスターは多くの場合、心よりの願いを有している。

生命の危険が在るにも拘わらず儀式へと参加するに足る、それは彼ないし彼女にとっての人生の目標でもあろう。

魔術師の大願は根源への到達である筈だが、例外もある。

注視すべきはこの例外だ。

大願抱く者であれば、魔術師としての自己を失う可能性は低いと考えられる故に。

聖杯戦争は稀有^{けう}なる儀式魔術であるが、根源へのただひとつの道ではない。

むしろ幾世代にも渡って研鑽^{けんさん}された家系の研究こそが、本来的な道とも言える。

故にこそ、大願を失わぬ参加者は、戦局で冷静な視点を保つことも容易^{たやす}いだろう。

聖杯^{あきら}を諦めるという道も、選択肢として最後まで有しているからだ。

だが、個人的な願いを有する者は……

時に容易く暴走するだろう。

(古びた一冊のノートより抜粋)



そして、少女は東京の夜空を舞う。

超高層ビル群が林立する西新宿の街並みへと降り立ち、深夜へと至って無人となった道路を軽やかに横切って、森にも似た中央公園を通り過ぎて。走る車輦^{しゃりょう}も僅かになった広い広い線路を、とん、とん、と跳ねていく。

たとえば絵本の中で、妖精^{ようせい}が湖を走る姿にどこか似ている。

微笑みを浮かべながら、同時に、切なげに瞳^{ひとみ}を潤ませもしながら——
東京都杉並区。

長く暮らしてはきたものの、住み慣れたとは言い難い閑静な住宅街へと辿り着く。

この時刻ならまず間違いなくあれは眠っているだろう。

すやすや、穏やかに。何も知らず、何も分からないままに。

——きちんと起きてくれるといいのだけど。

玄関にも、廊下にも、階段にも、寝室の扉にも魔術による結界が掛かっていた。

父の施したものだ。

か弱い娘を思う親の想いか。聖杯戦争はとうに終わったに等しいというのに、用心深いものだ。実際のところ、それが杞憂^{きゆう}などではないにせよ。

なるほど、父の行為は尊いものではあるのだろう。

けれど、それはあまりにささやかに過ぎて、少女にとっては何の意味も成さない。

ただ、歩くだけで結界は解けていく。

ただ、呟^{ささや}くだけで魔術は効力を失う。

——どんな顔をするかしら、あの子。

既にもう、別れは済ませた相手だった。

一昨日の朝。忘れてはいない。

『懐いてくれるのは嬉しいわ』

『あなたにもわかる日が来るのかしら』

『ううん。会わないほうが、あなたのためだと思うのだけど』

嘘ではない。すべて、心からの言葉ではあった筈だ。少女に心があるのなら。

—わたし、気が向いてしまった。でもね。そうさせたのは、あなたなのよ？

二度と、我が家へは戻らないと予測していた。

二度と、顔を見る機会はないと予測していた。

自分自身の関わる未来だけは目にしないというルールに従って生きるからこそ、こうして予測が裏切られることもある。少し、少女は驚いていたのかもしれない。

こんなにも小さな命が。

^{あわ}憐れで、^{もろ}儚くて、脆すぎるただの凡人が、自分をこうして行動させる^{など}等とは。

寝室。枕元に立って、少女は妹の寝顔を見下ろす。

妹。ただの人間に過ぎないそれが、想像した通りの姿で眠っている。

すやすや、穏やかに。何も知らず、何をしたのかも分からずに。

—こんな寝顔をしていたのね。初めて見たわ。

「お姉ちゃん……？」

頬へ息を吹きかけると、やっと妹は目を覚ました。

寝^{まなこ}ぼけ眼を擦りながら、ぼうっとした視線を向けてくる。

「ごめんなさいね。夜遅くに」

少女は、優しく……

否、初めて生じた僅かな感情を自覚しないままに手を伸ばす。

それは、何だ。

純白の精神に、点よりも小さく、少しだけ、ぽつんと落ちてきた黒色のものは。

理解できない。少女は、あまりに全能であったから。

把握できない。少女は、あまりに人間から遠いところに立っていたから。

たとえば人に“嫉妬^{しつと}”と呼ばれるものだったのかどうか、さえ。

「ねえ、綾香^{あや か}」

—あなた、ゆうべ、誰かと会っていたでしょう？



「私からの贈り物、随分と気に入って戴^{いただ}けたようですね」

不意に声を掛けられた。

主人である少女を見送った直後のこと。

新たな本拠として定められた広大な儀式の場、大聖杯を中心とした立体魔法陣を擁する東京某所の地下空間にて、個室として割り当てられた一角へと赴こうとしていた矢先、アサシンの耳へと言葉が届いていた。魔術による伝達ではなく、直接の音声として。

今夜は珍しいことばかりが起きる。

先日の、まさしく贈り物の一件以降、こうしてふたりきりで声を聞くのは久しぶりのことではあった。直接尋ねた訳でもない以上は確信とまでは言えないにせよ、この魔術師は自分との直接の会話を避けているものとばかり。

気まぐれか。

いいや、キャスターは自分のような浅慮^{せんりょ}の者ではないだろう。

何らかの意図を以て話し掛けてきたに違いない。

「キャスター。私は、その質問に対して返答を持たない」

「そうですか」

そのまま背を向けると思ったが。

錬金術の大家として名高き男は、その場を動こうとしない。

暗がりの中で佇んでいる。よく似合っている。彼には日陰や闇が似合うのだ。暗がりの中で活動し、忍び寄り、殺すことをだけ定められた我が身と同じように。非業の最期を遂げたとはいえ、一時は広く知れ渡った医術の徒であつたろうに。慕う者も多く在った、英霊の座に刻まれるに相応しい生涯を送った人物であろうに。

何とも皮肉なものだ。

反英雄と呼ばれる悪なる自分と、本質的に異なる正しき英霊が、同じ主人を戴いて。

同じ目的のために、特にここ数日は同じことを繰り返してきた。

何も知らない、神秘にも聖杯にも関わりのない、無辜^{むこ}の娘たちを数多捕らえて――

「すみません。幾度も同じ言葉を重ねるのは無粋だと、分かってはいるのですが」

「謝るくらいなら、言うな」

「いいえ。この機会を逃す訳にはいきませんよ、毒の娘」

顔を、近付けてくる。

唇と唇が触れ合ってしまいそうになるくらい。

「彼女は、我らを統べる方は、決して貴方^{あなた}への興味などお持ちではありません。私がこう言っている

意味は、もう分かりますね？」

「……ええ」

「貴方は気付いた筈です。貴方が彼女へ抱いていた感情は、生前の貴方が焦がれたであろう尊い想いとは異なるものです。愛ではない。想いでもない。願いではあるかもしれないが、似て非なるものと言われれば否定はできないでしょう。それを——」

「承知している」

静かに、魔術師の声を遮る。

これ以上言葉を重ねる必要はない。

あの日、あの夜、歩く死体を指して贈り物と言った彼の真意なら、既によく分かっているからだ。^{いわ}曰く、自らの愛が真に何たるかを知るべき。あの時には何を言われているのかまったく思い至らなかったが、今は把握できている。理解もした。

あの夜の続きを幾度も、幾度も、繰り返して。

我が身を案じてくれる少年の言葉を、否、少年であった死体が再生する言葉を、聞いて。

短刀で何度も胸を^{えぐ}抉られるようだった。

言葉が何度も己へ届くたびに。

だから、もういい。

おぞましいものである筈のキャストの行為を、今は、もう自分は呪っていない。

「ならば、アサシン。貴方はまだ選ぶことができる」

「何を……」

「^{ここ}此処は既に暗黒の底だ。悪しき獣の揺籃だ。しかし、貴方の魂は、この無慈悲と残虐の極みの中であって輝きを失ってはいない。あの夜、少年の死体を守らんとした貴方は、英雄としての自己を取り戻すこともできるでしょう」

このまま進むのか。

このまま死ぬのか。

暗がりに^す棲まい、暗黒の徒として。輝かしいものすべての敵として。

世界を喰らう獣の介添人のひとりとして在ることを、良しとするのか——

そう、魔術師は問うているのだ。

何処までも^お堕ちてゆくのか、と。

まるで、いつか出会った古代^{アーチャー}ペルシャの弓兵と同じようにして。

「ありがとう、魔術師殿」

ああ。何と回りくどいお節介を焼くのだろうか、キャスト・パラケルスス。

変化の能力がもう少し上質なものであれば、たちまち鏡となって言葉を^{はじ}弾き返してみせたいとさえ

思う。代わりに、ゆっくりと^{うなず}頷く。迷いはない。きっと先刻、主人に触れられた瞬間に、或いは先日の夜、咄^{とつ}嗟^さに少年の死体へと覆^{かぶ}い被^{かぶ}さった瞬間に、自分は行く末のすべてを決めていたのだ。

「私は、既にこの身のほどを知った。真の充足を……きっと、私は得ることができた」

だから、そんな顔をしないで欲しい。

悪として在りながら、善が成されることを望み続ける愚かな魔術師よ。

「けれど、それさえも。

沙条愛歌なくしては知り得ないことではあったのです」



私の思考は正常だった。

私の感覚は平静だった。

何もかもをあるがままに受け止めて、こころは、静寂の水面の如く透き通っている。

一分の揺らぎも在りはしない。

何ら、迷いなど有りはしない。

……いいや。違うか。

我が心は、異常だった。平静などではなかったのだ。揺らぎ、迷い続けていた。

もう、狂っているのだろうか。

私は静謐のハサン。

ハサン・サッバーハ、影の英霊として当世に現界を果たした、愚か者だ。

東京の夜を彷徨って、私を拾い上げてくださった唯一の少女、私に触れても死ぬことのないあのひとを主人として忠誠を捧げた筈であったのに、毎夜、タツミを抱き締めては滾り、昂ぶる肉体をおぞましく感じながらも涙する浅ましい女だ。

あるじを得たのに。

溢れるほどに満ち足りたと思ったのに。

あのひとのために死ぬると信じたのに。

私は、こんなにも求めてしまう。

昨日も、一昨日も。地下にて割り当てられた片隅、キャストが作り上げた石の牢獄のような外観の一室にて、この東京で確かに生きていた少年だったものを、願いと想いを有していただろう尊きものの残骸を、かき抱くのだ。

ほら、見て。

今だって彼は私を待っている。

わざと足音を立てながら姿を見せた私へと手を伸ばそうとする、死んだ肉の塊。

タツミ。いいえ、タツミであったもの。

「あ、あ……き、み……は……」

彼の時間は止まっている。

私の唇で脳髓を融かされて死した刹那までに記録された情報のままに。

「にげ、口……」

私を逃がそうとする。

聖杯戦争に巻き込まれてしまったと思しき可哀想な少女を。

魔術、聖杯、神秘。常ならざる危うきものから遠ざけるべき、守るべきものを。

あなたはあんなにも弱く、あんなにも無力であったのに。あの時も、今も、私の身を案じる言葉を放つのだ。まるで、お伽^{とき}噺^{ばなし}のお姫さまを前にした騎士のように。尊きもののすべてを守る、正義の味方のようにして。

「タツミ」

私は、白色の髑^は髒^はを貌から剥がす。

素顔。暗殺手段の性質上、私には貌がある。

暗殺教団の長^{おさ}たる歴代のハサン・サッバーハの中には、過去の自分を切り捨てるべく貌さえ捨て去った人物も在るというが、私は到底、そこまでの傑士ではなかった。結局のところ私は女として生まれ、女として機能し、女として死んだに過ぎない。自己を捨て去れるだけの強さを有していたなら、私の在り方も変わっていただろうか。

毒の娘。毒の華。

「ただいま」

「にゲ、ろ……キミ、は……生き、口……」

「ありがとう。まだ、私は生きていますよ、タツミくん」

囁^{ささや}きながら、抱き締める。これまでと同じように。

冷たいあなた。キタノタツミ。

もう、生きていた頃のあなたの温^{ぬく}もりを憶^{おぼ}えていない。

命を奪った瞬間の甘い感触、唇の柔らかさははっきりと思い出せるというのに。

「タツミ」

本当は、こうして触れるだけで私の肉体は誰かを殺してしまう。

肉体を構成するすべてが命を奪うものとして製造され、規定され、運用された人のかたちをした毒の塊。それこそが私。死して座に刻まれる以前であれば、教理に仇^{あだ}なすすべてを屠^{ほふ}るために活動したものだ。

「私、人殺しなんです。憶えていますか」

ああ、とても多くを殺してきた。

殺した。

殺した。

英雄^{たた}と讃えられていた勇猛の將軍も。騎士も。あなたのような少年さえも。

「数え切れないくらい、多くのひとを殺しました」

深夜のラジオ放送で“死神”のようにして語られるのは、だからとても相応しい。

髑髏の仮面を被った暗殺者。

暗殺教団の教主を務めた歴代のハサン・サッバーハのひとりにして、静謐の異名を有した毒殺の達人。紀元前のインドをはじめ、世界各地の各時代で語られた伝説の“毒の娘”を、暗殺教団は現実^にに於ける暗殺の道具、兵器として作り上げていたのだ。

私は効率的に目標を殺し続けた。

枕元で。裏路地で。物陰で。特殊な薬物を服用、体内の毒を調整した上で風向きさえ合ったなら一軍を屠ることもあったが、多くの場合は一対一。密かに、秘めやかに相手に接触して命を奪う。

「あなたに、そうしたように」

庇護欲^{ひご}をそそる娘の外見は、あくまで仮初め。

この肉体はありとあらゆる毒に耐え、同時に毒の塊でもある。自らの爪はおろか肌や体液さえをも猛毒として、王や貴族、将軍の命^{ねや}を闇で音もなく奪い去る――

恋人や、婚約者。

殺害までの過程で、そんな関係を暗殺相手と築くことも多かった。

「……殺すべき敵なのだと、言われてはいたけれど。それでも。この手で、この体で、唇で殺してきたひとたちは、皆、確かに生きていました」

親があった。友があった。

人間だった。

相手の油断を誘うために親密になれば、自ずとそれを知る^{おの}ことになった。

好ましく感じるような気性の者も、数少ないながらも存在した。万が一の奇跡でも起こって結ばれることがあったなら、私は幸せになれるだろうか――とさえ思わせる者も、完全な皆無ではなかった。

つまるところ、私は。

成就する筈のない擬似的な幸せを自らの手で構築し、自らの手で奪う、という行為を延々と繰り返し続けたのだった。

「悪いひともいた。良いひとだと、感じられる者もいた」

そのいずれも殺した。使命のままに。教団の長として。

徐々に、私の精神は軋^{きし}んでいった。

迷い、揺らぎ、平静を失い、やがて正常な思考を失ったのだった。

「私はおかしくなりました。これ以上は殺せないと、狂乱して。……ああ、それとも、もしかしたらまともになってしまったのかもしれない」

私は、瞼^{まぶた}を閉じて思い返す。

タツミ。あなたを手^にに掛けた時のようにはっきりと憶えている。

静謐のハサンとして生きた女の最期。教団の記録によれば、手さえ触らせない女の振るまいを怪しんだ某軍の将軍に首を刎^はねられたとも、暗殺者という正体を自ら明かして「殺してください」と将軍にせがんだとも――

実際のところは、簡単だ。

心を許してしまった相手である将軍に真実を告げようとした私は、教団の刺客であると述べようとした私は、彼が目を離した隙に、首を刎ねられていたのだ。大いなる御方、恐怖を統べる存在とも言うべき御方の手によって。

「私は、あの御方に肅正されました。私がハサン・サッバーハであると胸を張って言えるのは、その最期だけでしょう」

「……………」

タツミ。私が何を語ろうと、あなたの反応は大して変わらない。

やはり壊れた機械のよう。

きっと今夜も言うのだろう。殺したくない。来るな、逃げろ、と。

分かっている。

あなたはもうとくに壊れているし、壊したのはこの私。

何度稼動させようと、別の言葉を話してくれることはない。

たとえ最期の瞬間であろうとも。

「ハ、サ、ン」

声が。石牢に反響していた。

咄嗟に反応できなかった。

たっぷり一呼吸の後に顔を上げた私の視界に映るのは、あなたの姿。新たな情報を得ることなどない筈のあなたが、こちらへと手を伸ばしていた。

ああ、触れる。触れられてしまう。

肌に、頬に。

あなたを殺した褐色の肌に、冷たい指先が接触していた。

子が母を求めるように。

親が子を慰めるように。

私の体が、大きく震えてしまう。背筋に走る感覚は衝撃とさえ呼べるもので、私は思わず息を漏らしていた。分からない。エーテルで構成された仮初めの肉体を駆け巡るこれは、驚愕^{きょうがく}なのか、昂揚なのか、情欲なのか、それとも、もっと別の――

「名前……………」

貌が、髑髏の仮面に覆われていないから。

感情を覆い隠せない。

在るがままの心を映して、私の顔はどんな風になっているのだろう。

「私の真名……あなた、どうして……」

「行く、な」

ああ。タツミ。

あなた、もしかして分かっているの？

「死ぬ、な」

ああ。やっぱり。

あなた、私が何をしようとしているのか、とうに分かって、それで。

キャスターが精製した「賢者の石」が導いた偶然なのか、大脳の保存状態が予想よりも良好であったが故の必然なのか、私には断定できない。いずれにせよ奇跡は起きて、タツミは私の名を呼んだ。真名を。

こんな姿になってまで、あなたは自分以外の他者を案じてしまうのね。

キタノタツミ。

あのひととは異なる輝きよ。

本当は、私などではなく、もっと別の――

あなたと寄り添い生きて、あなたと明日を生きる筈だった誰かであれば良かったのに。

「ありがとう。そんな風に言ってくれたの、あなたが初めてです」

ごめんなさい。

今、此処にいるのが私で、ごめんね。

「……タツミ。殺した瞬間から、あなたのことが好きだった」

愛の言葉を紡ぎながら。

私は、穏やかに微笑んで。

私は、悲しげに涙ぐんで。

あなたの手を握って――

魔力によって形成された一振りの短刀を、そっと、振り上げる。



死ぬな

殺すな

逃げろ

生きろ

(石牢に刻まれた文字列より抜粋)





そして――

私はひとり、広大な地下空間への通路にて待ち侘^わびる。

地上から延びた道はひとつきり。

東京の奥底にて眠る大聖杯へと辿り着くには、此処を通る他にない。

予感が在った。

確信が在った。

彼は来てしまう。

万難を排し、あらゆる障害を乗り越えて、きっと世界を脅かす獣の揺籃を見つけ出す。

アサシンとして現界した私に、未来を予測する類のスキルはないけれど。

それでも、自分の最期くらいは察するものだ。二度目ともなれば。

「アサシンか」

ほら。来た。

光源がない筈の地下通路であるのに、輝きを纏^{まと}うかのような騎士だった。

蒼銀^{そうぎん}の騎士。私は一瞬、竦^{すく}みかけてしまう。

それほどまでに彼の視線は力強く、強靱な意志と決意に満ちたものだった。

ああ、あれは……。

正しき英雄の瞳の在り方であるのだろう。

反英雄とは訳が違う。正真正銘の、長く長く人の間で語り継がれるような救世の勇士。

きっと、あなたとなら話が合ったでしょうね。タツミ。

「セイバー、最優のサーヴァント。……正直なところ、都市に於ける調査・探索に長けた英霊であるという認識はなかったが」

「私だけでは探り出せなかったさ」

成る程。沙条家当主の協力を仰いだか。

「現在は大聖杯を用いた儀式の最中。貴方であろうと通ることは許されない」

「退^といてくれ」

「いいえ」

「二度は言わない」言葉は、刃の如き鋭さを伴って。

彼は、止めるつもりなのだ。

最後の儀式を。大聖杯の起動のため、あるじが全霊を捧げているというのに――

「何故だ」私は言葉を吐き捨てる。

憤りではなく、主人と仰いだ人物へと捧げる最後の忠誠の発露として。

「あるじの行いはおよそ凶行ではあるだろう。しかし、すべてはあなたの願いがため！」

「願いは明日に託すものであり、人々に託すものである」

そんなにも堂々と。

貴様は断じてしまうのか、セイバー。

悪しきものに^{すが}縋る気はないと、あるじの行為すべては誤っていると。

「……そして、そう教えてくれたあの子を、私は、守ると誓った」

誰だ。あの子とは？

一瞬、主人の妹君の姿を思い浮かべてしまったが――

まさか。結び付けるにはあまりに材料が足りないし、考えるための時間もない。

「何故だ。何故、その、高潔にして^{まばゆ}眩く輝く優しさを」

短刀を低く構える。既に、血は^{ぬぐ}拭ってある。

思考は終わりだ。

「貴方は、我があるじへと向けないのだ」

殺し合おう。貴様が進むと言うならば、私は、こうするより他にない！

加速。紫電。

交差。切断。

^{セイバー}騎士と^{アサシン}暗殺者が刃を交わす、瞬間、^{ほとばし}暗がりに光が迸る。

「……………！」

ああ、こうも差が在るのだな。

重装備の騎士を相手取った戦闘には幾らかの心得があると思っていたが、ただの^{おご}驕りにすぎない。強固な^{よろい}鎧の隙間を縫って刃を滑り込ませる等、できる訳もなく。

二合までは受け止めたものの、強烈な一撃が私の体を襲っていた。

^{さば}体捌きで即死は免れたが、霊核を^{すさ}ごっそり持って行かれてしまった。

凄まじい威力を秘めた、黄金の剣。あれが、風の結界を解除した聖剣の姿なのか。

^{かな}敵わない。

私が、生きて彼に勝つことはできまい。

「お見事」

仮面も割れた。

^{おび}
怯えた女の顔を晒すという不名誉を、今更気になどすまい。

さあ、どう戦う。どう殺す。

この血肉のすべてを毒の華と変える我が絶技、貴様の命に届かずとも喰らい付く！

そう、覚悟を決めたのに。

ひとりでに――



「計画の成否に拘わらず……

大聖杯が起動すれば都内一千万の人々が消え失せる」

私の^{のど}喉が声を紡いでいた。

言葉にするつもりなどなかったのに。

残った魔力はほんの僅かに過ぎない。故にこそ、攻撃へと転じるべきなのに。

「私は、何をも思わない。たとえ空が割れ、地が裂けて、この世界が終わろうとも、我が心に在るあ
るじへの忠誠は……不変にして絶対だ」

唇が、舌が、動いてしまう。

「なのに……」

私の意思とは裏腹に。

いいや、もしくは、私の意思の通りに。

「今、東京にはタツミの妹がいる。

死なせたくはない。そうも……思う……」

ここから。

魂の底から。

私は、そう願っている。想っているのだ。

思考を正常に、感覚を平静に保とうと努めながらも、口にしてしまう。

己に迷い、愛に惑い、死に恐れ、震えながら。

私は――

「私は……狂っているのだろうか……」



影の英霊として定められ現界するサーヴァント。
アサシンの運用について。

火力の観点から言えば、このクラスで召喚される英霊には一抹の不安が残るだろう。
直接的な戦闘力に長けた三騎士や狂の英霊バーサーカーと相対したならば、特にそれは顕著なものとなる。
力比べは避けるべきだ。

気配遮断スキルの能力を有するアサシンは、やはり、暗殺にこそ運用すべきか。
魔力のみならず、サーヴァントに固有の気配を英霊たちは感じ取る。
この感知能力からアサシンは逃れることが可能となるのだ。

完全な隠形おんぎょうを保ったアサシンは、こと不意打ちに於いて最強の優位性を発揮する。
ただし――

サーヴァント同士の戦闘ではなく。
マスターを狙った暗殺こそ、最大の効果を発揮すると知れ。

状況次第では三騎士の一角を屠ることも可能ではあるだろう、が。
それでも、気配遮断を維持していない状態での戦闘ならば、まず勝ち目は薄い。

（古びた一冊のノートより抜粋）



返答は聞けなかった。

セイバーが何を言ったのか、私は耳にすることが叶^{かな}わなかった。

だから、寄り道は終わりだ。

私が、この場で為^なすべきことを完遂しよう。

ハサン・サッバーハの真名を有するアサシンとして、相応しい最期を迎えるのだ。

毒の華となって私は終わろう。

二度目の生を閉じるとしよう。

この命失おうとも、天然自然一切の理^{ことわり}に反そうとも、幾億万の魔神^{シャイターン}が阻もうとも、死の門を必ずやぐぐり抜け、きっと、あなたの願いを叶えよう。

そうだ。あなたのために。

愛しい我があるじ。

誰よりもまばゆい、あなた。

誰よりも恐ろしい、あなた。

私が、愛するひとを抱き締めるきっかけをくれた——

私と同じく、誰かを愛するあなた。

沙条愛歌——



Knight of Fate ACT-5

「……貴方^{あなた}は選択したのですね。儚^{はかな}き魂、ハサン・サッバーハ」

暗黒のただ中にて。

魔力で構成された白色の長衣^{ローブ}を纏^{まと}う者は、そう、瞼^{まぶた}を閉じて述べた。

声として発せられた言葉ではあれども、暗がりに満ちた静寂をほんの少したりとも揺るがせない、不可思議な韻、天然自然の木々の葉からこぼれ落ちる朝露が如き、涼やかな穏やかさに満ちたものだった。

余人が耳にすれば、優しげな声色であると評するのだろう。

「きっと、貴方は尊きものを得られたのだと信じます」

再びの言葉。形のよい唇^{かす}が微かに動く。

美しい人物だった。

地下大聖杯へと通じる通路^{たたず}に佇む細身の長身――

艶やかな黒髪^{つや}は長く、細やかに編み上げられた最上の織物を思わせる。女と見紛^{みまご}う者もいるだろうが、男だ。生物学的な分類には大した意味を持たない存在、エーテルによって構成された仮初の肉体を有するサーヴァントであり、同時に、性差について大きな意味を見出さない精神を有する人物でもあった。

術^{キャスター}の英霊。

真名を、ヴァン・ホーエンハイム・パラケルスス。

かつて在った真なる世界、神代に在ったであろう星の光を追い求めた魔術師にして高名な錬金術師^{あらわ}である男。聖杯がもたらす大魔術儀式、聖杯戦争のために西暦一九九一年の東京へと顕れ、一時は万物万象を成す“根源の渦、を懸けた戦いへと身を投じるも、自らを召喚した当世の魔術師を裏切った男。

数百年前の生前には、多くの子が慈しまれる明日を夢見た筈^{はず}の男、医療^{もつ}の発展を以て、人類へと貢献を果たした英霊として座に刻まれた男ではあった。

暗がりと静寂の中、彼は誰かを待っている。

準備は万端に整えられていた。

防御のために張り巡らされた多重結界は、直接の破壊力^たに長けた三騎士の白兵攻撃にも充分に耐える性能を有しているし、あり得ないことではあるが戦車等の現代兵器が持ち込まれたとしても、特に堅牢^{けんろう}な土のエレメンタル、金剛石^{ダイヤモンド}の盾を結界と併用すれば傷ひとつ受けはしないだろう。

守りは確かなものだ。

攻めについても、とっておきの切り札が残されている。

キャスターが手にする片手剣が力を発揮した時、どのような神話、伝説、伝承も、魔力を帯びて現界するあらゆるものは、たちまち穢^{けが}されてしまうのだから。

地下大聖杯を目指して地下空間を歩み続ける侵入者が、たとえば無傷のままアサシン^{しりぞ}を退けたのだとしても、状況はキャスターに有利。平均的な能力の英霊であれば数秒と経ずに撃退、霊核を破壊して返り討ちにするのも容易^{たやす}い。

けれど。

今、此^{ここ}処^{ここ}に至らんとする者は違う。

聖剣を有する騎士だ。

悪逆を滅ぼす勇士だ。

正義を秘めて、遂^{つい}に、己^なが為すべきことを取り戻した本物の英雄だ。

「女たちよ。願い、求めた者たちよ。貴方たちの無念はいつか晴らされるべきだが、世界とは、時に邪悪によって覆い尽くされるものです。願いは届かず、幸福は砕かれ、想いは踏みにじられる。無^む辜^このものたちに愛は届かない」

瞼を開いて、キャスター・パラケルススは宣言する。

こうして立つ場所、悪^{うごめ}の蠢く暗黒こそ自らに相応^{ふさわ}しき住^{すみ}処^かであると認識しながら。

「そして今は、この私こそが正義の道^{じゅうりん}を蹂躪^しし、邪悪の種^まを播く者であるのです」

まさしく邪悪。大逆。外道。

聖杯戦争へと挑むマスターとして自分を召喚した玲瓏館^{れいろうかん}の家系、その信頼に背を向けた瞬間から、この身はあらゆる人道から外れた魔^{たぐい}の類と化した。大願がために生きるが故に人倫から逸脱する多くの魔術師の生態を誹^{そし}りはせずとも認めず、人を救い、子を慈しみ、医療と社会を進歩させるべきであるとの信念を持って歩み続けた人生とはあまりに裏腹に、無惨と無常を以て君臨する世界^{こうべ}へと頭を垂れた。

あきら
諦めたのだ。

あらが
抗う、という選択肢さえ持てなかったのは、なまじ多くを識^しる魔術師としての頭脳を有していたからか。有り得る話ではあるが、到底、それだけではない。玲瓏館邸の前庭にて真の主人と初めて出会った折、この身の裡^{うち}にあった脆弱^{ぜいじゃく}な魂^{ねじ}は捻^ひれ、挽き潰^{つぶ}されて、かたちを変えた。魂^いが萎縮^{しゆく}した。あふ
溢れてゆく無念と後悔の果てに、残されたのは、美しくも恐ろしき世界のあるじへの畏敬のみ。

既に、この身は英雄とは呼べまい。

ならば、この先に待つものは、決して誇りある戦いなどではない。

「……童話であれば。騎士を阻む悪い魔法使い、といったところか」

もはや
最早、定められた役割を果たすのみ。

とは言え、未だ騎士は至らず。地下の奥深くへと続く道はいかにも長く、こうして独り言を繰り返す時間さえ残っている。

さあ、何をすべきか。

再び瞼を閉ざしたキャスターの脳裏に浮かぶのは――
ふたりの少女だった。

――世界そのものにさえ等しい、万物を生む根源がかたちを成した少女。沙条愛歌。

――この手に掛けたにも等しい、人々を統べる王気に溢れた気高き少女。玲瓏館美沙夜。

「愛歌さま」

前者のために自分は命を捧げるのだろう。影の英霊がそうしたように。

無論、とうに覚悟は終えている。

後悔はない――と言えば、虚偽を述べることになる。

キャスターは短く息を吐きながら、過去を想う。

「美沙夜」

それは、かつての生前のものではない。

ほんの二週間前の出来事。

誰しにも慈しまれるべき存在として生まれ落ちた愛し子、いつか王者となるだろう才気に溢れた幼子と語り合った、ささやかなひととき。

暖かさで幸福に包まれていた、特別な時間。



「宝具……」

「はい。ノウブル・ファンタズム。我らサーヴァントの切り札と言えるものです。既にご存知ですね、美沙夜？ 真名の解放によって力を発揮するのが常ですが、常時発動型の性能を得ている宝具であればその限りではない」

「さまざまな種別、さまざまな能力が秘められているのだと聞きました」

「正解です。英霊が有する伝説そのもの、象徴とも言えます。ならば英霊たちの生きざまが千差万別であったように、その力が多様性に溢れるのもやはり必然」

未だ裏切りの悪逆を成す前の記憶。

玲瓏館当主の友として、契約を結んだサーヴァントとして活動していた頃のこと。

時にして、キャスター召喚の翌日。数時間後にライダーが来訪することになる玲瓏館邸の居間に、早朝の会話を終えたばかりのキャスター・パラケルスと幼き美沙夜は、再びの対話を行っていたのだった。

師として弟子へと知識や技術を教示するためのものではない。

それについては先刻に美沙夜からの丁重な断りを受けていたから、先達として年若き魔術師へと教え諭すのではなく、あくまで、友人として。同じく魔術を志すものとして、神秘に寄り添いながら大願を目指すものとしての、言うなれば世間話か。

そう、他愛ない言葉の応酬だ。

この程度の情報は、既に、彼女も玲瓏館当主から得た後なのだから。

「魔術師の行使する神秘よりも、強力、なのですね」

「はい。個体によっては、文字通りに神代の力さえ振るう者もいるでしょう。その場合、サーヴァントとして召喚されるに伴って力を制限されるでしょうが……逆のパターンも、またあり得るものです」

「力を増幅される事例、ですね」

「ええ」

うなず
頷きながら、ティーカップを傾ける。

自らの血肉を分け与えて製造したばかりの女性型ホムンクルスたち——外観を女性に寄せただけで、生物としての雌性を十全に備えている訳ではないが——に淹れさせた、輸入物の紅茶である。悪くない。同じように彼女らに作らせた焼き菓子の類を添えて。幼子はやはり甘味が好きであろうから、という気遣いでありつつも、パラケルスス本人も焼き菓子は比較的好むものではあった。

さくり、と優しく軽やかな食感を与えてくれるフランスの焼き菓子。

名はゴーフルと言っただろうか。

「もしかして……」

見れば、美沙夜が何かを言いたげにしている。微笑んで促してみると、聡い少女はぱっと表情を明るくさせながら、

「甘いもの、お好きなのですか。キャストター」

「ええ。遠い日の記憶ではありますが、幼い頃より私は甘味を好んで食していたようではあります。贅沢な子だったのでしょう。それに、悪賢い子でもあった。十歳になってすぐに、私は実験と称して、市井に出回っているものよりも高純度の砂糖を精製しては、こっそり舐めて味わっていたのです」

「こっそりと、舐めて？」驚いた顔をしている。失望させてしまったろうか。

「ええ。こっそり」

「……驚きました。キャストター。それではまるで、悪戯をする子供のようにです」

そう言って、美沙夜は破顔してくれた。

母君の教育を思わせる品のある笑みであり、幼さの残った無垢の笑みでもあった。



許されるものなら今すぐに抱き締めてしまいたい程の感激があったが、パラケルススは何とか踏み
留まる。如何に彼女を愛おしく感じようとも、自分にとっては数多の弟子たちの裔、孫や曾孫のよう
なものであったとしても、この時代に生きる人々とサーヴァントが深く交流する訳にはいかない。

エーテルの血肉を与えられて現界していても、あくまで、英霊は現実ならざるもの。

過去から現代へと投げ掛けられた影に過ぎない。

だから、ただ、感じるだけでいよう。

温かなものを。眩いものを。

彼らが大願へと歩むのを助けるためだけに、自分は、召喚されたのだから——

「私は、悪戯が好きだったのかもしれませんが。甘いもの以上に。年経た後にもあれこれとやらかしたも
のです。時計塔にも、アトラス院にも、幾度となく叱られたものです。異端児と呼ぶ者もいましたが、
結局のところ、私は悪戯の気分が抜けていなかったのやも」

「でも、そんな風には見えません」

「どうでしょうね」

「いいえ。貴方は、医療の発展のために身命を捧げた。それは確かな事実です。でなければ、貴方
の存在が英霊の座に刻まれることはなかった」

「買い被り過ぎですよ。ですが、ありがとう。美沙夜」

最も新しい友人と言葉を交わす。

ゆっくりと、穏やかに。慈しみを込めながら。

「聡明な子。愛らしい子。そして何よりも、貴方は優しい子であるようだ」

「そんなことは……」

「いいえ。私は、確信を以てこう言うのです」

暖かな時間。

幸せな時間。

嘘偽りなく、心より、一九九一年の当世に現界した中で最も尊い十数分だった。

眩いきらめきを、玲瓏館美沙夜を、パラケルススは愛おしさを込めて見つめていた。

地に満ちるすべての愛し子は、尊い星の輝きに等しい。

大気には真なるエーテルの絶大なる魔力が満ちて、超常たる神々が叡智を携えて地上を支配
していた時代は、遠き過去として失われたのだろうが——少なくとも、新たに生まれ落ちてくる子供た
ちに秘められた無限の可能性は、それらに劣りはすまい。

故に、キャスター・パラケルススは慈しむ。愛して止まない。

魔術師は時に人道を外れた超越者であると語られるが、それは一面からの真実ではあっても絶
対のものではない、と彼は考える。大願を込めながら練り上げられ続ける知識と技術の研鑽、魔

術刻印の継承、その世代的継続の維持こそが魔術師たちの自然な生態であるのなら、こうも言えはすまいか、と。

すなわち。

^{われわれ}魔術師は、希望と願いを次代に託しながら生きるのだ。

^{そこ} ^{ひと}其処に、人間と何の違いがあらう？

「美沙夜。その優しさに、私はきっと報いてみせましょう」

二度とあり得ないだろう時間。

悪逆へと落ちる前の彼が味わうことのできた奇跡。

長く続くことはなかった、けれど、胸の裡^{うち}に在り続ける光景。黄金に輝ける記憶。

後に、美沙夜の頭脳からは綺麗^{きれい}に拭い去^{ぬぐ}っておいた——ほんの些細^{ささい}な数十分——



「キャスター。貴方に、お見せしたいものがあります」

言葉で説明するよりも、見て貰^{もら}ったほうが早い、と――
お茶の時間の後。

美沙夜の案内により、パラケルススは、裏庭近くの物置小屋へと移動していた。

裏庭、と一言で述べても、実際にはひとつの“森”と呼べる程度の広さと深い緑を有した場所であるから、物置小屋もそれなりの大きさの山荘^{コテージ}じみたものではあって、普段は専用の管理人を雇って維持しているものだった。

鍵^{かぎ}を使って扉を開けると、埃^{ほこり}っぽさが充満していて、美沙夜が少し噓^むせる。

ああ。これは宜^{よろ}しくない。

「大丈夫ですか、美沙夜」

「ええ。ありがとう、問題ありません」

ハンカチで口元を覆いながら、美沙夜が中を案内する。

どうやら、大きな布が掛けられた一角が目当てのものであるらしい。どうやってこれを剥^はがしたものか、力任せに引っ張っては埃が室内に充満してしまう、といった顔で迷っている彼女の横で、パラケルススは小さく^{つぶや}呟く。

「風よ」

布がふわりと浮き上がり、ひとりでに折り畳まれて床の上へ。

シングルアクション

一工程での魔術行使。空気を操作した上で念動を加える魔術。

大したものではないのだけれど、美沙夜は随分と驚いた顔であったため、

「ただの手品です」

と言い添えておく。

彼女は何かを言いたげであったものの、つい、阻んでしまった。

驚くべきものを目にしたからだ。

「あ あ
嗚呼……。これは、何ということでしょう……」

おおげさ
大袈裟なほどに、声が響いてしまう。

布の下から顔を覗^{のぞ}かせた幾つもの物品。キャスターを驚かせ、目を輝かせたもの。それは、表の顔としては“町の名士”である玲瓏館当主との繋^{つな}がり^{など}を欲した利害関係者たちから届けられた贈り物の数々であるという。開けていないものも多い。

人形やぬいぐるみ、といった女子の喜びそうなものから、電子ゲームやロボットの玩具^{おもちゃ}のような男子向けのものまで。何を贈れば喜ぶのか等^{など}は考えず、目に付いたものから贈ってきたのだろう。

兎も角。キャスターには馴染みの薄いものばかりではあった。

「おお。これは、数秘術のゴーレムを……？」

「いいえ、違います」

美沙夜が硬い表情で首を横に振る。

恐らく、湧き出そうになる笑みを堪えているのだろう。無理をせずに微笑んでくれても良いのに、この幼き王者は品位を保とうとしているのだ。

「電子の仕組みで動くロボットの玩具です。玩具のボールを投げるだけの機能しか、持っていないはず……数秘術は、関係ありません」

「そうですか？」

幾つかの品を、美沙夜は説明してくれた。

早朝に行われた対話とは逆に。それは、球技を擬似的に盤上で再現させたもの。それは、カセットを換えることで別の遊戯を行うことが出来る電子の機械。それは、車や飛行機から人型機械へと変形する玩具。それは、擬人化した動物たちと彼らの暮らす家の模型。それは、着せ替えをして遊ぶお人形——

「ああ、何と……。何ということでしょう。子供たちの玩具が、これほどまでに豊かで、技術を凝らしたものであるとは。大いに驚きました」

「……私も、驚きました」

笑みが顔に出ないよう努めながら、美沙夜が口を開く。

背の高いパラケルススを見上げて。

「サーヴァントというものは、聖杯から当代についての知識を得るのだとお父さまから聞きました。でしたら、こういったものもご存知なのかとばかり」

「形のみです。聖杯がもたらす知識は、実感が伴うものではありません。たとえばこれが書物による知識であれば、著述した人物の感慨を受け取ることもあるのでしょうか」

「本の与える知識に劣る、とおっしゃいますか？」

「いいえ。聖杯のそれは実に中立で、正確です。優劣の問題ではないのでしょうかね」

言いながら、人型から自動車へと玩具を変形させて、頷いてみせる。

美沙夜へと向き直った時には、また、微笑んで——

「ありがとう。どうやら、豊かな時代に私は現界したらしい。実に良い宝物を見ました」

「喜んでいただければ、幸いです」



宝具と、その使用について。

神話・伝説・伝承に語られた超常の神秘、現実を破壊せしめる武具や技術が明確な存在として顕現するものが宝具であり、英霊の奥の手として定義して構うまい。

直接的な破壊力を備えておらずとも、それは戦闘の趨勢^{すう せい}を決するだろう。

対人宝具、対軍宝具、対城宝具。

基本的には破壊規模に応じた分類が宝具には適用される。

対人規模、対集団規模、そして対拠点規模といった分類であるが、必ずしもすべての宝具が当てはまる訳ではない。秘められた魔力を直接的な破壊力として行使しない宝具であれば、まったく別の分類が割り当てられるに違いない。

また、破壊規模の上回る宝具が必ずしも“強い、訳ではない。

聖杯戦争^{かなめ}の要は英霊と魔術師^{マスター}である。

最少の魔力消費で速やかに敵対者を屠^{ほふ}る精密さを有する対人宝具が、大規模な破壊力があるけど連射性能に劣る対軍宝具を操る英霊を瞬時に屠る、といった例も充分あり得る。

心せよ。

威力の多寡は確かに重要だが、最重要ではない。

宝具の効果は絶大であり、使用には慎重さと大胆さが共に必要となる。

全英霊が宝具を最低ひとつは有している以上、使用の機会^{わず}を僅かでも誤れば、一方的な敗北を喫しても不思議ではない。

必殺の機を逃すな。

状況を的確に判断する、戦術的思考と戦略的思考を併せ持て。

ただし。例外は無論存在する。

最強の宝具。

最強の神秘。

如何なる戦術や戦略をも灰燼^{かい じん}へと変える、恐るべき宝具も、世界には存在する――

(古びた一冊のノートより抜粋)



聖剣^{きら}が煌めいていた。

絶望の果て——大聖杯へと続く長い長い暗黒の道程^おに於ける、唯一の光源として。

常人の視覚であれば、闇夜に浮かぶ星の光を連想したかもしれない。魔力を伴った魔術を秘めた視覚を有している者には、正確に、蒼銀^{そうぎん}の鎧^{よろい}を纏った騎士の姿が見える。揺るぎない決意を視線に宿した騎士が、片手に、剣を携えている様子も。

剣^{セイバー}の英霊。

キャスターの視界の中央に漸く顕れた、運命^{ようや}の者。

「待っていましたよ」

既に、黄金の刀身を覆う風の鞘^{さや}は何処かへ消え失せていた。

アサシンとの戦闘の折にでも解除したのか、それとも、敵対者から宝具を隠すという戦略がために纏っていた風の鞘など不要と判断したか。宝具^{いんべい}の隠蔽は、英霊本体の真名の隠蔽へと繋がり、またその逆も然り。伝説に記されるものと同様の宝具を有していた場合、晒せば、当然ながら対策を施される可能性がある故に。

けれど、今は互いに真名を知っている。

聖剣を携えた騎士王、真名アーサー・ペンドラゴン。

五大を統べる魔術師、真名ヴァン・ホーエンハイム・パラケルスス。

「ようこそ、絶望と恐怖の入口へ。やっと騎士殿は此処^{ここ}まで辿^{たど}り着いて下さった」

「道を空けろ」

「ええ。その前に、幾つか尋ねます。

貴方は今も、亡国の救済を願う騎士王であらせられますか？」

「^{ノー}違う」

「過去に縋^{すが}り、聖杯に縛られ踊る道化師であらせられますか？」

「^{ノー}違う」

騎士の返答、いずれも短く。鋭く。

迷う素振りもなく、凄烈^{せいれつ}の気配を伴った刃^{やいば}の如く。

「成る程」

ゆっくりとキャスターは頷く。

最高の生徒から最高の解答を得た教師のように、静かな誇らしさを込めながら。

待ち侘^わびたのだ、この瞬間を。

極東の言葉で言えばまさしく一日千秋か。

実時間にすればほんの数日間、大した期間でもあるまいに、まるで幾百年も過ごしていたような錯覚が在った。あらゆる正道から逸れて叛逆^{そはんぎやく}し、悪逆に身を落として人を害し、世界に従う日々は、異様なまでに緩慢とした流れの中であって、一分一秒を過ごすごとに濃密な実感が全身^{さいな}を苛むのだ。熱された泥炭の中をゆるゆると泳ぎながら、大きく口を開けて汚濁を飲み下し続けるさまにも似た——悪として生きていく実感。

屈辱の日々であり、本意ではなかった、等と口で言うのは簡単だ。

けれどキャスターは口にしない。

何故ならば、自らよりも強大なる絶対者に従い、生きるのは——

あまりに甘美、安楽だった。

個としての自我と誇りを捨て去って、巨^{おお}いなる力の奔流に身を任せる。

其処には、あらゆる不安も労苦もなく、ただただ安寧と快樂だけが在った。

「……聖杯戦争。貴方が自己の命題と向かい合う日々は、私には、大いなる墮落の法悦を味わい続ける日々だった。大聖杯の中へ落とされ、喰われようと、恐らく我が魂はさしたる変質もしないでしょう。既に、黒く染まってしまいましたから」

微笑みながら、左手で宝具をすらりと抜く。

五大元素を自在に統べた錬金術師、その伝説をかたちとした魔剣。

アゾット剣として広く魔術世界へと伝わった、魔術強化及び魔力増幅の礼装。

抜剣からの構えは、剣技に長けた者が見れば失笑するだろう不慣れな仕草だった。

だが、言いようのない不気味な剣呑^{けん のん}さが在る。死の気配。相対する者を屠るだけの自信、実力を備えているのだという確信から来る、肉食獣^{どう もう}の獐猛さ。戦うための武技を修めてはおらずとも、殺すための牙^{きば}と爪を有しているのだという説得力の類。

「ですが、私は此度^{こたび}の来訪^{うれ}を嬉しく思う。貴方は、私を殺して下さるのでしょうか？」

「殺して欲しいか、魔術師」

「いいえ。いいえ。ふふ、そんな風に間違えて貰っては困りますよセイバー。私は既に大逆者であり、悪を自覚する者であり、およそ尊きものを食い荒らす魔に他ならない。切り落としてくれと首を差し出す？ まさか。私はただ、純粹な疑問を抱くに過ぎない。当代の聖剣使いである筈の貴方が、何故、私の首を切り落とさずにいたのか——」

魔剣が淡い光を放ち始める。

準備動作。真名解放のための手順^{プロセス}のひとつが終了する。

「私です。私こそ英雄の敵なのです。

友と認めた当代の魔術師を、この手に掛けたに等しく。

友の最愛たる幼き娘さえも、この手で呪ったに等しく。

いつか宣言した通りに、極東に生きる数多の人々の命を大聖杯へと捧げ続けた！」
準備動作。体内に備わった魔術回路と魔術刻印が同時励起し、宝具と連結する。
肌に光の紋様が走っていく。

過剰活動に伴う激痛が全身を軋ませはするが、どうということはない。

「今も。今も、今も……！」

この道の最果てに在るものを貴方は見るだろう！ 意思を奪われ、知性を縛られ、魂を捧げるための自動自殺機械となった少女たちを！ 慈しみ、自らの命に代えても愛すると決めた人々を、私は！ ははは、効率的に殺し続けるのです！」

準備動作。通路全体に仕掛けた魔法陣が起動し、宝具の効果を強化させる。

そして、流れ落ちるものがある。

宝具とは無関係に――

つつ、と頬を伝って流れ落ちて行く^{あかいろ}赫色。

「……何故、涙する。キャスター」

「否。これが涙であるものか。人の尊厳を喰らう悪鬼は、涙など流さない」

言葉とは裏腹に。

赫色の涙、止めどなく。

「今この時、私は！ ^{ポトニアテローン}世界の王女に付き従う一体の悪鬼である！」

く
奇しくもそれは、六日前、玲瓏館当主が死を遂げる際に見せた血涙のさまによく似ていたが、キャスターが気付くことはない。セイバーも同じく。ただ、自らの悪行を高らかに告げながら赫色を撒き散らす、反英雄じみて荒ぶる英霊が暗がりに佇むばかり。

狂乱の言動にも見えるが――

否。行動は極めて精確無比か。既に宝具は、必勝の状態で解放が^{かな}叶う。

しかし、それはセイバーにしても同様であるだろう。風の鞘を既に取り払い、黄金の刀身を晒した聖剣は、ただの横薙ぎであろうと、実に通常の数十倍の威力を以て^{ざんげき}斬撃を放つと目される。更に真名解放が伴えば、東京湾上神殿決戦で見せた偉業、星の光による万象の破壊が成し遂げられるに違いない。

「キャスター」

^{ひとみ}騎士の瞳が、^{アベレージ・ワン}五大の支配者を見据える。

「悪を名乗る錬金術師。最後に問う。何故、お前は聖杯を求めた」

「愚問！ 私は根源へと達し、この世の真理を得て、^{あまね}遍くすべての人々を……！」

――慈しむべき愛し子らを、救うために――

息を呑む^の気配があった。

忘我に近い衝撃を受けながら自らの行いを振り返る、キャストの息遣い。

次いで、静かな納得の言葉があった。そうか、と。

「……そうか、私は……」

魔剣が持ち上げられる。

地、水、火、風。四種の^{エレメンタル}元素結晶が空中に舞い上がる。

「根源と……聖杯の輝きに、この目を、とうに奪われていたというのか……？」

正義による断罪を待って、愛を、口にしながら、私は……このパラケルススは……」

魔力集束。集束。集束。

「こうも醜く！ 見誤った……！」

絶叫しながらの真名解放。

——^{ソード・オブ・パラケルス}元素使いの魔剣。

魔力放射。暗闇を貫いて疾走するエーテル光が、地下通路を埋め尽くす。

キャストの宝具たる^{オリジナル}原型アゾット剣、超々高密度の魔力結晶として振るわれる刀身の “
^{エリクシール}賢者の石” は、四種のエレメンタルと完全同期を行うことで対城宝具にも比肩する一時的威力を生み出す。光の形態へと変換された魔力は、理論上、三騎士級のサーヴァントであろうと確実に崩壊へと導くだろう。

当然、直撃であったならばの話だ。

此処では違う。聖剣は、魔剣発動による魔力放射を盾のようにして防ぎ切る！

「防御能力！ だが、聖剣の真の力などではないでしょう！」

「どうかな」

一秒、二秒。魔剣の発動は止まらない。

聖剣は確かに強固な盾として機能しているが、強力な魔力光の圧力によって動作を固定されている、とも言えるか。ならばと速やかに騎士へと空中移動する、追撃の大型エレメンタル四種。如何にサーヴァント階位第一位、最高の対魔力スキルを有するセイバーであっても、純粋魔力から元素変換された超々高熱火炎、大真空、金剛石塊、高圧水塊、等々の神秘を備えた物理の打撃に耐えられるか否か。

仮初めの肉体。現界した英霊。

現代兵器や物理法則の多くを^{りょう が}凌駕するものではあれど、^{しよ せん}所詮、絶対の存在ではない。

かたちが在る以上、破壊は、叶う。

彼を守る聖剣さえ乗り越えて、一撃を、加えれば——

「貴公の悪は、同じく英霊として顕現した我が悪にも等しく。罪も同じく」
言葉と共に。

聖剣。^{いっ せん}一閃。

星光。一閃。

「故に、これは私闘に他ならない」

光が――

光を、引き裂く。

聖剣によって描かれた輝きの弧が、魔剣からの光を鮮やかに両断していた。

圧倒的なまでの魔力。

非常識なまでの威力。

今なお真名解放は成されていないというのに、ただの一振りで、魔剣の真名解放によって放たれる魔力放出を完全に無効化したのだ。それどころか、狙い澄ませた反撃^{カウンター}としての性質をも併せ持ち、魔剣行使によって完全な無防備状態となったキャスターの霊核へと一撃を加える！

真名解放ならず、常態による攻撃。それでいて、こうも必殺の威力とは。

「……これが、星の光か」

歓喜^{うめ}の呻き。キャスターの表情が、歪^{ゆが}む。

これを待っていたのだ。



ヴァン・ホーエンハイム・パラケルススの宝具、元素使いの魔剣——この刀身を構成する結晶体
“賢者の石”にとって、魔力の高密度蓄積などは副次的効果に過ぎない。地上には存在し得
ないとさえ伝えられるフォトリック結晶、^{りょうし}霊子演算器としての能力こそが、魔剣の真なる力。

すなわち、超々規模の多量並列演算能力！

大規模儀式魔術レベルの神秘の即時行使！

ライダーの複合神殿体を覆う神域の呪詛^{じゅそ}を短時間無力化させた欠片と、原理は概ね同様であ
る。敵対者の放つ魔力の性質を解析・対応し、^{これ}是をただちに侵食して我が物とする、対策不可能
の力の強奪！

「セイバー。貴方の光、貰い受ける」

星の聖剣から放たれる神威の斬撃であろうと、取り込み、^く喰らう！

過去に『万能の人』の尊称を以て呼び習わされた科学者にして魔術師、偉大なる^{せき がく}碩学が行使
したとされる超抜のわざを模倣せしめる術式の強制実行。番狂わせの^{ジャイアントキリング}大物喰いを可能とする、まさ
しく、奥の手の切り札であった。

たとえ霊核を砕かれようと、此処で、セイバーを殺す。

それが、キャスターにとっての最期^{もくろみ}の目論見。完遂まであと二秒もない。

「私すら滅ぼせぬ者に！ 大聖杯の悪を両断することは叶わない！」

「いいや、終わりだ」

短い言葉。

せめてもの慈悲の顕れか——

^{ある}或いは、悪の追随者への堂々たる処断の宣告か。

聖剣。再閃。

僅かに、聖剣が輝きを増す。

瞬間、大型エレメンタル四種が粉々に砕け散っていた。

ほぼ同時に、キャスターの右腕が、宝具の魔剣ごと音もなく消し飛ぶ。

「……………!!」

霊子演算器が挙動を誤ったか。

術式に何らかの不備が在ったか。

否、発動を果たした魔術解析の大魔術は健在であり、魔力の捕食行為は継続して行われている。単に、食い切れていないのだ。甚大、膨大、あまりに多量に過ぎる。通路に刻まれた魔法陣が
過剰魔力によって暴走し、崩壊していく。聖剣による斬撃は、とめどなく溢れて押し寄せる光の怒^ど

濤^{とう}となってパラケルススの防御結界を容易く切り裂き、押し開き、呑み込んでいく。

光。光。光。

眩きもの、其^{それ}は星よりこぼれた一滴の希望。

何と麗しく、目映い^{まばゆ}。まるで、尊さがかたちとなったかのような。

「——ああ。美しい——」

圧倒的な熱量を感じる暇も、なかった。

神代に瞬いた星^{またた}もかくやの輝きを、双眸^{そうぼう}で、見つめるうちに——

「美沙夜、これが、星の」

閃光が満ちてゆく。

開いたままの唇から漏れる声も、途中で掻き消^かえる。

全結界が引き剥がされた直後、衣服と共にキャスターの肌と髪は焼け焦げ、魔力の籠^こもった眼球は沸騰し、筋繊維と内臓は瞬間的に弾け飛んでいた。最後には、強化された筈の全骨格が炭化して崩壊する。コンマ一秒にも満たない、刹那^{せつな}の出来事ではあった。

此処に、術の英霊はあえなく地上から消滅する。

粒子の一片さえ残さず、完膚なきまでに。

「許せ。聖剣の真なる輝き、貴公に見せることは叶わない」

返答はない。

地下大聖杯へと通じる道には、再び、暗がり^{くらがり}と静寂が戻っていた。



随分と奇妙な人物だった。

是が、今回の処理行動にまつわる我々の所感である。

名門中の名門とは呼べないまでも確かな血脈を有した家系に生まれ、特に錬金術に於ける功績の目覚ましい人物であり、自らの研究に対して真摯^{しんし}に向かい続け、教育者としても一流と呼べるだけの実績を時計塔にて残した者であったが、再三に渡る忠告^{かか}にも拘わらずアルキドクセンをはじめとする学術書の出版を断行してみせた。

遍く人々のため、人類社会のためと称して――

医療の発展を名目に、隠匿すべき神秘の数々を著書に混ぜ込んで漏洩^{ろうえい}を成した者。

人類史に恐らくは名を残すであろう偉人、魔術の世界にあっても錬金術の魔術基盤確立について大きな功績を残した偉人、同時に、裏切りの大逆を成した“愚かの人”。

ヴァン・ホーエンハイム・パラケルスス。

家系の魔術を極めるだけでは飽き足らず、多様な魔術の修得を試みる魔術師は、こと時計塔を見れば一般的とは言えないまでも完全な異端という訳でもない。であるのに彼は、それだけでは充足しなかったと予想される。

彼の意図を完全に解明することはできない。

工房の徹底調査で得られた資料はいずれも彼の魔術的研究にまつわるもの、つまりは大量の実験記録と錬金術を主体とした触媒の山、出版物のために用意された原稿、草稿、等に限られる。魔術協会ならざる神秘に関連した結社の影もなく、権力者との癒着を示す証拠も挙がっていない。

また、処理直後、降霊による尋問^{ことごと}についても悉く失敗している。

亡霊として召喚されるパラケルスス氏は、一貫して沈黙を守り続けている。我々の処理、襲撃を予期して、死後の降霊に関する何らかの対抗策を施していたとも予想される。

「待っていましたよ」

処理当日、彼の発した第一声はこういったものだった。

対魔術師の戦闘を前提とした装束に身を包んだ我々を前に、錯乱する素振りもなく、焦燥の表情もなく、恐怖の色もなく彼は応対したのである。あまつさえ、深夜に訪れた我々を気遣う類の言動さえ寄越してみせた。

処理任務に就いて日の浅い者が、対話による相互理解の可能性を口にしてしまったのも、無理からぬことだと言えるだろう。私にしても、処理対象となった魔術師が平静を装って不意打ちを狙う事態を目にした経験はそれなりに在るが、真に平然を保ったまま言葉を連ねる者と相対したのは初めての経験であった。

「私は決して争わない。ここで私が抗えば、貴方たちに害が及ぶ。そしてそれは、私の本意ではないのです」

我々の行動内容は既に決定している。

ならば、貴君はその首を差し出すと言うのか。

そう尋ねる私に、彼はこう返答した。

「はい。そうですね」

何故だ。

死を選んでも、貴方には何の利得もないだろうに。

「貴方たちもまた、私にとっては愛し子のひとり。傷付けることはできない」

やはり奇人であったのだろう。

理想を口にする夢想家と思えば、未だ道半ばであり何ひとつ成し遂げられてはいない、との自虐的な言動を繰り返す求道者。我々は彼と五分二〇秒に及ぶ対話を行ったが、最終的には、予定通りの処理によって任務を遂行した。

彼の最期の言葉は、

「貴方たちが、貴方たちのそれぞれの家に戻った折には。

どうか子を慈しんで下さい。隣家の子でもいい。そこに、私の求めた光が在る」

というものであった。

(一五四一年九月某日、時計塔の記録より抜粋)



ひとつめ。

玲瓏館のお屋敷を何度も何度も襲っていた、バーサーカー。

ライダーの空飛ぶお船からの光を浴びて、溶けて、消えてなくなった一騎。

マスターの男の子も、殆ど^{ほとん}一緒に死んだのよね？

ふたつめ。

優しい優しい大英雄。とびきりの両眼を持った、アーチャー。

エルザの言うがままに宝具を使ってくれて、自分から、死んでくれた一騎。

エルザ、そろそろ泣き止めば良いのに。

みつめ。

とっても強くてとっても怖い、砂漠のファラオ。ライダー。

彼の振るう聖剣とアーチャーの弓矢に^{うが}穿たれて、やっと死んでくれた一騎。

伊勢三^{い せ み}のひとたちには死んで貰ったけど、一人だけ残したっけ。

よっつめ。

お薬を飲み過ぎて少しおかしくなってしまった、ランサー。

魂が壊れてしまいそうだったけれど、ちゃんと、彼に殺されてくれた一騎。

二騎ぶんの魂が一騎ぶんしか残っていなかったのは、残念ね。

ミスター・ナイジェルも、最後はちょっと変だったかしら。

いつつめ。

普段からわたしによく懷いてくれた、愛らしい、アサシン。

さっきは、少しだけ我が儘^まを言った？ でも、首を彼に捧げてくれた一騎。

むっつめ。

最後までわたしの命令に従って、働いてくれた、キャスター。

女の子^{こまかいもの}たちをたくさん集めてから、最後は、彼の光に消されてくれた一騎。

本当にご苦労さま。

聖杯戦争のために一九九一年に集まった、六騎の英霊の魂。

人格を得て現界するなんて滅多にないことなのに、皆等しく、わたしの手の上で踊ってくれてありがとう。演目はこれで終わり。思ったよりは手間がかかってしまったけど、命を散らしてくれてありがとう。

魂、聖杯へくべてくれてありがとう。

お陰で六騎ぶん、予定通りに魔力が溜^たまったわ。

もうすぐ叶うの。

セイバーを捧げてしまったら本末転倒だから、そのぶんの、代わりの魂も大丈夫。キャスターとアサシンが集めてくれた細かいものを、ざらざらと、たくさん大聖杯のお口へ注いでいる最中だから――

ほら、見て。

ひとり。真っ暗なあの子の口へと、女の子が落ちてゆく。

また、ひとり。また。また。また。集めた生贄^{いけにえ}はまだまだ残っているの。

この世の混沌^{こんとん}でできたスープの中へ落ちて、溶けて、なくなって。六騎の魂のような御馳走^{ごちそう}に比べたらちっぽけなものでしょうけど、あの子の栄養になるの。

たっぷり食べなさい？

好き嫌いは、だめよ？

ほら。またひとつ、小さい魂を持ってきてあげたから。

「どうしようもない凡人だけど、あなたにあげるわ」

よく眠っているでしょう？

名前があるのよ。

沙条綾香^{あや か}。ええ、そう。わたしとよく似た名前よね。名前はね。

この子、わたしの、たったひとりの妹なの。

生まれた時のことも、よく知ってる。

どんな風に笑うのか。

どんな風に泣くのか。

何が好きで、何が嫌いか、全部、知ってるわ。

ゆうべ誰と会っていたのかも。

――ええ、ええ。もちろん。あなたにあげる最後の栄養よ？





Knight of Fate ACT-Final

あるところに――

ひとりの女の子がいました。

真理と化した女の子であり、すべてを成せる女の子でした。

命を、と望めば命を発生させられる。

死を、と囁^{ささや}けば死を蔓延^{まんえん}させられる。

世界は彼女と繋^{つな}がっていて、彼女は世界と繋がっていたのかもしれません。

彼女はおよそ全能でした。

不可能などひとつもない。すべてを操って、成し遂げ、崩し去ることができる。そんな機能をもってしまった故^{ゆえ}に何事にも楽しみがなくなってしまった彼女は、自分の全能にひとつだけルールを作りました。

それは「自分の未来は見ないようにする」というものです。

世界そのものにも等しい彼女は、自分自身に制限を掛けたのです。

ルール。制限。枷^{かせ}。だって、それぐらいいないと全能はとても退屈で。ヒトのままでいる意味がまるでなくなって、生命活動なんて続けていられない。きっと死んでしまう。

結果的に、彼女の行動は正解だったのでしょう。

少なくとも彼女は毎朝眠りから目覚めて、瞼^{まぶた}を開けて、呼吸をして、窓越しに空を見上げたり、小鳥^{さえず}の囀りへ耳を傾けたり、父へ透き通った視線を向けたりできました。父の言うがままに魔術を操るあれこれもやってのけました。生まれただけの妹に対しては、父や母のように涙を流したりはしないまでも、他の人間たちがするように、小さな妹の頬を指でつついて、その柔らかさを確かめたりできました。

何も、何も――感じてなどいなかったけれど。

かろうじて生きてはいました。

でも、それだけ。

ちくたく。ちくたく。時計の秒針が進むたびに。

ちくたく。ちくたく。今日が明日となるたびに。

彼女の精神^{こころ}は停滞してゆきました。

すべてを見通し、すべてを有し、すべてを理解してしまう先に待つのは、世界と自分が溶け合ってしまうような在り方です。無我の最果て、純白^{れん ごく}の煉獄を目の当たりにしながら玉座に君臨するよう

なものであって、そう、一種の女神の性質にも等しいのでしょう。ヒトがヒトとして在り続けるには難しすぎる状態です。

彼女は、生きた亡霊のように過ごすしかありません。

「でも、いいの。これでいいのよ」

彼女は構いませんでした。

生きながら死んでいるようなものであっても。

死にながら生きているようなものであっても。

痛みも、苦しみも、悲しみも——これっぽっちも感じずに、日々を暮らしてゆけました。

楽しみがひとつだけあったからです。

それは、自分自身に枷を掛ける直前の彼女が知った “未来、”。

それは、世界が世界である限り、いずれ必ず訪れる “結果、”。

——聖杯戦争に参加して、マスターになった時、わたしは恋に落ちる——

ええ。そうです、その通り。

つまるところ彼女は、自分がやがて「恋に落ちる」と知った瞬間、自分の未来を^み視ることをやめたのです。運命を知り、明日を^{ひら}拓き、世界と時間の糸であやとりをするようにして事象を^{へんさん}編纂し、未来を選択しながら、可能性の^{ことごと}悉くを好き放題に決定しながら生きる日々を選ぶことさえ、できた筈^{はず}なのに。

彼女はそうしなかった。

迷う素振りなど一切なく、微笑みを浮かべて、未来を^{ひとみ}視る瞳の瞼を閉じました。

——なぜって？

だって、恋にドキドキしたいから——

そうして迎えた運命の日。

枷を掛けてから数年後。西暦にして一九九一年、二月某日の出来事です。

とうとう彼女が迎えてしまった、運命の相手と初めて出会う日。

「でも、本当にドキドキできるのかしら」

待ち続けた日ではあるものの。

彼女は、実のところ、大きな期待を抱けてはいませんでした。

「恋に落ちると分かっているのだから、やっぱり、わたしが理想とする、わたしが知っている、わたしの

^{きもち}
未来を裏切れない人が来るだけよね」

英霊召喚の儀式を始める前から、むしろ、彼女はすっかり憔悴^{しょうすい}していました。
だって、世界は相変わらず彼女の所有物。

先を目にする能力に制限を掛けた状態であっても、所詮^{しょせん}、周囲のすべては彼女にとっては何もかもを知り尽くした退屈の山。驚きも、喜びも、ときめきもなく。待ちに待った日であるというのに、楽しみな気持ちを抱けずにいたのです。

世界は、どこまで行っても見慣れた箱庭。

彼女がその気になれば隅々まで手の届いてしまう、あまりに小さな場所。

恋に落ちるとは言うけれど、それも……これまでとそっくり同じように、他のヒトたちがするような共感などまるでない、温度のない現実が訪れるだけに違いはない。

彼女はそう思っていました。

確信にも近い、諦め^{あきら}でした。

ですが。

「問おう」

時を隔てて現れた英霊は。

^{あなた}
「貴女が、私のマスターか」

圧倒的なまでに、彼女のそれとは違っていたのです。

予想と違う。竜や熊にたとえられる英霊なのだから、もっと体格が良いとばかり。

理想と違う。どちらかという、もっと鋭い表情を浮かべる男性が良かったのに。

違う。違う。違う！

^{あふ}
溢れ出る魔力の性質ひとつとってさえ、彼女の思ったものと違いました。

あまりに違うことばかりで、間違いなく彼女は驚いて。喜んで。ときめいて。

そして、本当に——一目で恋に落ちたのでした。

誠実で、誇り高くて。優しくて。

その笑顔は、まるで、朝の陽差しみたいに柔らかく煌^{きら}めいて。

善を愛し、正義を信じる、優しいひと。

争いを嫌っているのに、ひとたび剣を取れば誰より強い。

輝く剣は、世界のあらゆる邪^{よこしま}なものを、悪^のなるものを、はね除ける。

おとぎ話の王子さま？

いいえ。彼は王。彼こそは、その生きざまが伝説として遍^{あまね}く語り継がれてきた古きブリテンの王。正しく座に刻まれた英霊として在らざるも、聖杯戦争へ挑む魔術師に従うサーヴァントとして召喚された英雄。最強にして最優の——星の聖剣使い。東京へと持ち込まれた聖杯の威、英霊召喚の大魔術を経て現界を果たした、蒼銀^{そうぎん}を身に纏^{まと}う騎士王。

サーヴァント階位第一位、剣の英霊^{セイバー}。

真名アーサー・ペンドラゴン。

彼こそ、過去現在未来、世界においてただひとりの運命のヒトだったのです。

彼女はここで初めて、自分自身というものを知りました。

亡霊のように生きながらぼんやりと抱いてきた精神^{うつつ}、虚ろな好き嫌いの感情もどきは消え去って、ずっと隠されてきた本当の自分、本当の嗜好^{しこう}を得たのです。

世界に在って精一杯に命を燃やすヒトとして。

初恋の炎を知った、正真正銘の女の子として。

——彼のことが好き。

——彼がすべて。他にはなにもいらない。

——彼がいるからこそ、わたし、こうして永遠の恋に落ちてゆくのね。

彼女は、彼に出会うまでは「女の子の機能をもって生まれた神」にすぎなかった。

けれど、恋を知ったことで「女の子になってしまった神の機能」になったのです。

神の零落と呼ぶ者もいるでしょう。

神の降臨^{とら}と捉えることも可能かもしれません。

どちらなのかを断言できるようなヒトは、きっと、この世界にはいないでしょう。

「はじめまして、セイバー」

いずれにせよ、こうして。

「きっと、あなたの願い^{かな}を叶えてあげる」

さ^さじょうまな^なか
沙条愛歌はやっと世界に生まれ落ちたのでした。





あれが生まれた時のことは、よく憶^{おぼ}えている。

何せ初めての子だ。私にとっても、妻にとっても。

積み重ねられてゆく家系を真に重んじる魔術師であれば、まずは我が子の魔術回路の有無と性質について意識を傾けるべきであったのだろうが、その点、私は失格であったと言わざるを得まい。私も妻も、第一に、あれの健康状態をこそ確かめたのだから。

命はあるか。

小さな心臓は動いているか。肺は。脈拍、血流、神経の働きは正常か。

無事に、生まれ出てくれたのかどうか。

産声と呼ぶにはあまりにささやかな呼吸があれの唇から漏れるのを耳にした時には、情けなくも私は涙を流していた。妻もそうだ。万人に知られざる神秘を修め、万物に於^おける窮極、大願たる根源を求める探求者である筈の私は、その時、ごく平凡な父親——新たな家族の誕生に感情を揺れ動かす程度の人間に成り果てていた。

思えばそれは、妻の影響が私に色濃^{あらわ}く顕れていた時期であった故なのだろう。

異国の魔術師として古い血脈を有する家系の出でありながら、真理への到達についてそれほど
の執着を見せなかった妻は、家系の魔術である旧^{ふる}い黒魔術^{ウィッチクラフト}よりも家事をこそ得意とする、まさに家庭的な女性だった。特に料理についてはこだわりを有して、片面^{サニーサイドアップ}の目玉焼きと
両面^{ターンオーバー}の目玉焼きの違いについて語るだけで、午後のティータイムの時間を占有できる程度には。

あの頃の私は、魔術師としては欠けていた。

代わりに何を得ていたのかは……ここでは語るまい。時間も惜しい。

と^と角^{かく}も、私は第一子を得た。長女である。

愛歌。我が娘。

たとえ表情少なく、感情^{ほとん}を殆ど浮かべることのない人形が如き娘であっても、私と妻は愛歌を慈しんだ。幾度となく言葉を掛け、頬に触れて、指に触れて、考え得る限りの想いをかたちとして傾け続けた。死にながら生きているような娘だと他の魔術師たちに言われようと、微塵^{みじん}も気に掛けることはなかった。

何もかもを見通すかのような瞳を有し、魔術にかけて天賦の才を発揮しても。

愛を奏でる歌そのものであるかのような、麗しき我が娘。私と妻にとって、愛歌は庇護^{ひご}すべき娘以外の何者でもなかった。

やがて妻は次女^{はら}を孕んだ。

生来、体の強い方ではなかった妻には多大な負担であった筈だ。或^{ある}いは、とある呪術医^{じゅじゅつ い}が私に告げたように、長女が生まれ落ちる際に妻を守る加護^{たぐい}の類^うが消え失せてしまっていたのか。己^{おの}が肉

体に不安を抱えながらも、それでも彼女は産むと言った。どうすべきであったのか、私は現在でも断言できずにいる。私の反対を押し切って妻は次女を出産し、そして見るからに衰弱していった。ただひとつの理由ではないにせよ、出産は、やはり妻が夭折した要因のひとつではあるのだろう。

次女についても、無論、私は愛歌と変わらず大切に扱った。

妻もそうだ。残り僅かな時間の殆どを費やして、妻は次女を慈しんだ。魔術師としての才で言えば長女には遙かに及ぶべくもない次女のために、その命を振り絞って、我が家にささやかな庭を――彼女が言うところの魔女のガーデンを遺した。

朗らかさを湛えて優しく微笑むさまが、よく妻に似ている次女。

無垢な視線は世界に美しい綾を織り成して、抱き上げればほのかに妻のそれを思わせる香の如き匂いが鼻をくすぐる。我が第二の娘。綾香。

長女も次女も、いずれも私と妻が想いを重ね、寄り添った証である。

どちらかを選べと言われても、選べる訳があるものか。

……等と、綺麗事を、今更書き連ねても意味はない。妻の死後、私は魔術師としての自己を俄に取り戻し、魔術の研究と実践に勤しむ日々を送り、つまりは父親としての機能を最低限程度にしか果たさなくなった。漸く正気に返ったのかと告げてきた親類もいたが、成る程、ある意味で、私は妻との情に狂っていたとも言えるか。

とは言え、綾香には寂しい想いをさせてしまった。

愛歌には、そう認識するだけの感受性があるかどうか不明ではあったが――

そう。愛歌だ。

本題に入ろう。

愛歌は、此処、東京で執り行われる聖杯戦争にマスターとして参加するにあたり、セイバー召喚を境として明確に変質した。人形ではなく、あの年頃のままだに、少女のようにして振る舞い始めたのである。この十数日の間、私もよく知る類の表情をあれは見せた。

妻もああいう風に頬を染めていた。

あれは、そう、恋する女の顔ではあるのだろう。

セイバーには礼を言うべきなのだろうか。彼こそが、愛歌の人間的成長を導いてくれたのだから。聖杯戦争なかりせば、セイバーの現界なかりせば、あれに笑顔を浮かべさせる機会など、ついで私には与えられなかっただろう。たとえそれが、どのような恐るべき存在の誕生と同義であろうとも。

ああ。皮肉は此処までにしよう。

彼は先日、綾香の将来を案じる私のために聖遺物を与えてくれた上に、現在も、この私に力を貸してくれている。聖杯戦争にあって、味方と呼べるのは家系を同じくする者同士であると信じていたが、土壇場でサーヴァントに頼ることになろうとは。

地下大聖杯の場所は既に突き止めた。儀式の遂行のために予想される魔力規模、容量を考えれば、それほど困難な作業ではなかった。愛歌とアサシンが伊勢^{いせみ}三家から奪取してきた都心地下についての調査資料も大いに役に立った。

私は行かねばならない。

私は、愛歌が——娘が何を成そうとしているのか確かめねばならない。

私は、綾香を——娘を救わねばならない。

魔術師として。

妻に娘二人を託された夫として。

そして、父として。

（古びた一冊のノートより抜粋）



暗黒が在った。

実体と非実体の狭間^{はざま}をたゆたいながら脈動を続け、顎^{あご}を大きく開けた暴食の巨塊。

東京地下大聖杯を外殻として。

膨大極まる魔力^{うち}を裡に秘めて。

光届かぬ地底の立体魔法陣にて、絶望を友として蠢^{うごめ}く泥の如き肉だった。

それには、未だ^{いま}、頭部がひとつもない。第四までの鉢はとうに得ていて、残り三つのうちふたつの鉢もつい先ほど取り込んだばかり。第七の鉢を持つ第七の御使い、英霊七騎目の魂さえあれば頭など幾らでも生えようが、今は我慢するしかない。七騎目の代わりとして寄越される無数の生贄^{いけにえ}たちをもう少しだけ喰らい、噛み砕いて、呑み下せば、十の大角を有した七つの頭が形成されるのだろう。

故に、今は。眼球も頭もないままに、無貌^{むぼう}の肉海として見上げる他にない。

優しき母の帰還を。

そう、そうだ。母だ。母であるのだ。

地下にて蠢くそれは自らの創造主を全能の父であるとは認識しなかった。いつものままに微笑んで、優しげな視線を向けてくれるのは誰だろう、母だった。外観は年若い少女のようでもある。地下へ戻って来る時にはいつも、新たな生贄^{けんらん}を携えてくれる、絢爛にして佳麗なる全能の少女こそ、母なのだ。

蠢く暗黒の肉海、肉塊には脳もなく、思考^{つかさど}を司る代替の器官も有しておらず、有り得よう筈もないにも拘わらず、それは歓喜に震えてしまう。言語として置き換えるのは不可能ではあるのだが、強いて表現すればこのようになるか。——おかえりなさい、ママ。いい子にしていたよ。あなたがいない時にも多くの生贄を引き裂いて、魂を食べたよ。たくさん、たくさん、たくさん食べたよ。だから褒めて、ママ——

「いい子ね」

絶望の断崖^{だんがい}に姿を見せながら、母たる少女が言った。

遙か上方。地底深くに蠢く肉からすれば相当の距離があったが、しかし、囁くような少女の声はきちんと届いてくれる。間違いなく。妖精^{ようせい}の歌よりも繊細な響きは聴覚なき無貌へと届き、可憐^{かれん}と儚^{はかな}さの具現であるような姿は視覚なき無貌へと届く。

少女は、別の誰かと一緒にいるようだった。

ひどく小さなものだ。

断崖から自動的に地底へ身を投げてくる生贄たちの体格よりも、かなり小柄。外観からすれば人間ではあるのだろうから、ああ、連れられているのは幼子なのだ。幼子を食べた経験はなかったの

で、黒色の肉海の体表がそっと期待に揺れてしまう。生物のような味覚を有してはいないまでも、かたちなき魂が分解され、自分の構成要素として置換される際の独特の感触を、それは比較的
好む傾向にあった。

無垢の魂を備えた幼子。摂食・吸収のし甲斐^{が い}があるか。

けれど、意識を失ってしまっているのはあまり喜ばしくない――

「お姉ちゃん……？」

声。丁度、幼子が目を覚ましたか。

不都合はない。恐怖の感情を増大させすぎた魂は相応^{ふさわ}しくない云々と言う者が少し前までいたが、あれは欺瞞^{ぎ まん}と自己満足に過ぎず、実際のところ恐怖は、たゆたい脈動する肉塊の完成には大きなプラスの影響を与えるのだから。

「……な、に……？　ここ、どこ……なの……」

幼子には、状況が読み取れない。

何故、憧れの姉^{あこが}が服の襟^{つか}を掴んで自分を引き摺^ずっているのか。

見覚えのない広大な空間は何処か。強大な魔力を放つ、濁りきった黒色の闇は何か。

そして、断崖^{ふち}の淵に並んでいる女性たちは？　ここ数日の噂^{にざ}として都市を賑わせている大量失踪^{しっ そう}事件の被害者であり、都内各所で拉致^{ら ち}された生贄である等と知る筈もない。意識はあれども指の一本も動かせず、虚ろな瞳から涙を零^{こぼ}し続けている彼女たちの様子は、悪夢の如くして幼子には映るのだろう。

「ひ、い」

脳髄を埋め尽くす混乱は幼子の全身を駆け巡り、恐怖となって意識を侵していく。背筋が揺れるように震え始めて、かちかちと不規則に歯の根が鳴る。瞬きの回数がぐんと一時的に増えるも、やがて目を見開いて、透き通る瞳で生贄たちを見つめて涙を溜める。

「やだ、やだ、なに……こわいよ、お姉ちゃん……！」

妹の――

幼子の声に、地の底で肉海が大きく跳ねる。

か弱いヒトが恐れ、戸惑い、震えるさまを好む性質を有する故か、それとも。

「我が儘^{まま}を言わないの。綾香」

微笑みを浮かべたまま、少女がぴたりと立ち止まっていた。

幼子の服から手を離したかと思うと、すらり、と真っ白な指先を前方へと伸ばす。

言外に、生贄たちへ指示を送っているのだ。進みなさい、と。

生贄たちは歩き始める。

断崖を、前へ前へ前へ。

当然。先頭を行っていた者から、落ちてゆく。

「……！」

ひとり、ふたり。三、四、五、六――

死の行進が再開されていた。

止めどなく次々と。十代半ばから後半あたりの年頃であろう娘たちが、絶望と諦念^{ていねん}の涙を溢れさせながら、たすけてと叫ぶことも許されないままに暗黒へと身を投げる。これこそは自動自殺機械。術の英霊^{キャスト}が血涙を以て叫んだ、大悪のかたち。地底の暗黒として蠢く肉海にとっては、効率的極まりない構成材料の供給行程^{プロセス}。

この場の誰も彼もに区別はない。例外は、許されない。

地上に誕生し、成長し、柔らかな肢体を有するに至ったヒトの娘たち。

いずれ等しく噛み砕かれるのだ。不定形の肉の塊、黒色をしながら混沌^{こんとん}とした顎の中へと落ちた後には、肉体のみならず魂までもゆっくりと咀嚼^{そしゃく}されて。

「みんな仲良く順番待ちをしているけれど、綾香は特別」

幼子の耳元で。

いつの間にか屈^{かが}んでいた少女が、囁いていた。

父に内緒でお菓子を食べてしまいませんか、と悪戯^{いたずら}っぽく提案するかのように。

「いまずぐ落ちて材料になりなさい。だって、あなた――特別ではないでしょう？ だったら落ちるしかないの。凡人には、それぐらいしか利用価値がないのだから」

明るい声色だった。

幼子は思い出してしまうのだろう。二週間以上前の記憶を。

いつかの朝、窓越しに陽の光を浴びながら大量の英国料理を作って、くるくると踊るようにしながら、楽しげに恋を語っていた姉の姿と言葉を。理解したいと願っても、叶いはすまい。どうして姉が、見知らぬ大量の娘たちを殺しているのか。どうして、自分に、落ちろ等と告げるのか。

どうして。どうして。どうして。どうして？

幼子の思考は歪み^{ゆが}、捻^{ねじ}れて、軋^{きし}む。

発狂する精神に特有の脆^{もろ}い感触を察して、今まさに生贄^{むさぼ}を貪りながら肉海が蠢く。

「いや……」

流れてゆく、涙。

幼子の口が大きく大きく広げられて。

「いやあああああああああ……！」

悲鳴。絶叫。

けれど一向に構わずに、少女は幼子の髪を無造作に掴むと――

「我が儘ね。我が儘な子。どうしようもなく平凡なくせに、何なのかしら」

断崖の端へと再び引き摺っていく。

無慈悲に。感情など、唇の端にさえ微塵も浮かべることなく。

——偉大なるものよ。御身は、やはり我が母^{あなた}なのだ——

地下空間すべてが歓喜に似たもので埋め尽くされるのを、誰が感じ取ったろう。

目もなく、耳もなく、鼻も舌もなく、五体はおろか意識の源たる頭脳の類さえ有していない肉海は、しかし限りなく知的生物の思考に近いかたちで想いを抱いた。細胞のひとつひとつが躍動して歓喜した。感極まったのだ。聖杯という殻を割って自分を誕生させようとする少女の在り方に対して、全能を有しようとする所詮はヒトの亜種に過ぎないのではないかという浅はかな疑問は今こそ消え去っていた。

すなわち、この少女は、肉親に対して一切の感情を抱いていない。

何もない。本当に。

たとえばこの幼子、妹への反応。

肉親ゆえの愛^{いと}しさなど微塵も見当たらない。嘲^{あざけ}りもなければ、悪意だって在りはしない。森羅万象の一切を目にする時と何ら変わることがない。

空も、大地も。草木も、花も。動物も、虫も。ヒトも。家族も。

皆、等しく、無力で儚^{もの}い存在たち。

皆、等しく、いじましい存在たち。

皆、等しく、無価値がかたちとなっただけ。

皆、等しく、どうでもいい。

この世界で価値があるものは、少女にとって、ただひとつしかないのだ。

たとえば世界が無色であるとしたら、蒼色と白銀を纏^{あおいろ}う、たったひとりの騎士だけが色を有して、唯一の価値を持つ。他はすべて無色であって、透明なまでに薄っぺらくて、どこにでも在るくせに質量を持たず、無に等しい。

聖杯も。奇跡も。

それらの彼方^{かなた}の徒波^{あだなみ}より生まれようとする、この暗黒さえも！

——偉大なるバビロン——

——御身こそ、虚飾と退廃の再来、あらゆる妖婦^{ようふ}と地の憎むべきものの母——

「何をしている、愛歌……！」

男の声が響く。

偶然ではなく必然なのだろう。

制止の言葉を以て少女を止めようと試みるのが、魔術協会でも聖堂教会でもなく、他の誰でもなく、少女の父たる沙条^{ひろ き}広樹であるというのは。現在進行形で繰り上げられる娘の凶行を前にして、忘我せず、圧倒されず、堂々と述べてみせたのは相当の胆力であると言わざるを得まい。

魔術師であるからこそその精神性、ではあるまい。

これが。父の力か。

「何って、これが聖杯の本当の使い方よ、お父さん」

少女は泣きじゃくる妹から手を離しつつ、姿を見せた父へと悠然と振り返る。

まさしく、親の言いつけを破りながらも理路整然と反抗する娘であるかのように。

「あれ？ 願いを叶えとか、そんなふわふわした話を本気で信じていたの？」

「信じているのではない、事実なのだ」父は拳^{こぶし}を握り締めながら、「聖杯は根源に繋がるための架け橋だ。我らにとって千年の悲願であり、後の千年に続く希望だ！ それを、こんな——お前の欲望のためだけに使うなぞ！」

^{さく れつ}
炸裂音。

命が碎ける音がした。

地底にてたゆたいながら父娘^{おや こ}の対決を見守る肉海は、断崖の上で瞬間的に^{ほとばし}進む魔力を察知していた。黒魔術による呪殺、詠唱すら必要としない^{シングルアクション}一工程での魔術行使。事前の魔術儀式か、或いは礼装や魔術刻印に^よ依るものなのだろう。対象の内臓を裡から破裂させる力が、確かに、少女へと忍び込んでいた。

ならば少女は死んだのか？

いいや、当然、呪いの魔力など完全に防ぎ切っている。

心臓を中心として複数の臓器が爆発する形で命を失ったのは、涙を流しながら断崖を歩いている生贄^{はじ}のうちのひとりだ。弾かれた魔力に当てられたのだろう。運悪く、流れ弾にあたってしまったようなものと考えて構うまい。

対抗する魔術を行使する素振りさえ見せず、少女は、ただ^{たたず}佇むばかり。

その圧倒的な力は、誘導^{ミサイル}弾の直撃を受けて平然としているさまにも近い。

「……^{ば か}莫迦な」

「根源への架け橋だなんて、そっちこそつまらないわ、お父さん。だって——」

その時、少女の瞳を父は見ただろう。

妻に似た空色のそれである筈^{そこ}の其処にあるのが、何かを。

宇宙の深淵^{しん えん}を。

無限の暗黒と星々の煌めきを。

是^{これ}なるは偉大なる母、怪物の王女、根源の姫！

「そんなところ、わたし、生まれた時から繋がっているもの」

少女の宣告を契機として。

瞬間。地底から伸ばされた黒色の“手”は、高密度の肉塊による奔流となって断崖の一部ごと沙条広樹^{お かつぶ}を押し潰していた。生贄たちも何人か巻き込んでしまったが、遅かれ早かれ摂食する対象なのだから構いはしない。複数人の肉が一斉に裂けて、潰れて。骨が砕けて、粉々になる。生々しい感触が地底へと伝わってくる。

感慨など有りはしない。

先刻のような稀有^{け う}な例外を除けば、未だ、大聖杯を殻として地底にたゆたう暗黒は、意識を持たない。人語にて表現できるような思考を行わない。

ただ、喰らい続けて。

ただ、母たる少女の言うがままに、世界へと顕^いれ出ずる瞬間を待つばかり。



「……お父……さん……？」

綾香がぼかんと口を開けてる。

ふふ。そういう風にしていると、小さな動物のようで可愛いわ。

——もう少し眺めていたいと思ってしまいそう。でも、駄目。

——もうこれでおしまい。

「お姉ちゃん、どうして」

^{のど}喉から、絞り出すようにして綾香が言葉を掛けてくる。

^{けなげ}健気なのね。お父さんが死んだから、あなたはそうするの？

それとも。わたしが相手だから、かしら。

「綾香。材料になるぐらいしか、あなたには価値がないんだもの」

さようなら。

^{わたし}沙条愛歌の妹であったヒト。

沙条愛歌と同じ色の瞳をして、わたしによく懐いてくれた、小さな小さな綾香。

言ったでしょう？

もう会わないほうが、あなたのためだって。

……駄目。もう遅い。

あなた、わたしの運命の相手に近付いてしまったんだもの。

あまつさえ言葉だって交わしてしまって。

不思議だけれど——どうしても、見逃せるわけがないと思うのよ。

無価値なあなたに、価値を与えてあげる。

^{うれ}嬉しいわよね。綾香。

彼のために命を費やせるだなんて、感謝して欲しいくらい——

「じゃあね、綾香」

そうして、わたしは別れを告げて。

お父さんを碎いたばかりのあの子の触腕をもう一度持ち上げて、今度は綾香へ。

すぐに終わるわ。

痛くしたら、ごめんなさいね。

——そして。

——^{あかいろ}赫色が、びしゃりと迸るの。

彼の気配と一緒に。

愛しい愛しい、聖剣の騎士王の息遣い。鼓動。緊張。決意。覚悟を秘めて。

くぐもった音。

肉体を穿^{うが}つ音。

心臓を貫く音。

——まっすぐに。わたしの胸、黒い羽模様の令呪から突き出した、黄金の刃——

「あれ？」

それは、大好きなあのひとが、一番初めにわたしへくれた贈り物。

夢にも思わなかった。

どうしようもない痛みと。

どうしようもない苦しみ。

あなたが、背後からわたしを串刺^{くしざ}しにしてしまう、なんて。

「セイバー、なんでわたしを、刺しているの？」

意地悪なひとね。アーサー。どうして、何も言わずにわたしを刺してしまうの。

ううん、違うわ。アーサー。あなたは、何か言っている。でも聞こえない。

空気の振動が分かる。

なのに、彼の声、わたしの耳へは届いてくれない。

「……いた。痛い。痛いわ、セイバー。すごく、痛い。

ごめんなさい。痛くて、あなたが何を言っているのか、分からない、の」

哀しいわ。哀しいわ。

痛くて、ほら、目が見えなくて、もう痛くて、ああ——

「わたし、死ぬのね」

哀しいわ。哀しいわ。

もう、あなたの顔が、見られなく、なるなんて。

過去、現在、未来。

あらゆる世界の中でわたしが想いを捧^{ささ}げる相手、ただひとりのあなた。
わたしを、まるでヒトの女の子みたいに形作ってくれた、わたしのすべて。
恋しくて、愛しいあなた。

こんな風に、突然に、終わってしまうだなんて思わなかった。
結末なんて訪れないのだとばかり。
でも、せめて。
ええ、せめて。

最後に、あなたへ見せる顔は……

笑顔に……
しなくちゃ……





『——好きよ。セイバー』



暗転する視界。

拡散する意識。

当然だ。マスターを背後から穿つことで、魔力供給の手段を自ら断ったのだ。

彼は――

セイバーは、このまま雲散霧消するより他にない。たとえ自分自身の肉体に^{せいぜつ}凄絶の魔力を保有していようとも、時に炉心とも称される竜の心臓を秘めていようとも、現世に^{かなめいし}顕現するための要石として機能する^{マスター}愛歌を失った以上は、西暦一九九一年の東京に^{とど}留まり続けることはおよそ不可能に等しい。

まだ、^な為すべきことが残っているのだとしても。

^{むこ}無辜の人々を救う者が正しき英雄として在ろうと願っても、叶わない。

先に沙条愛歌を討ち果たしたのは、苦渋の決断ではあったのだろう。効率のみを優先して考えるのであれば、黄金の聖剣を振るって、愛歌と共に、地下大聖杯の内側にて眠るものを^{せんめつ}殲滅すべきであったのだから。けれど彼はそうしなかった。断崖から次々と飛び降りる自動自殺機械と化した生贄の少女たちを救い、今まさに地の底へと落とされようとしていた沙条綾香を救うことを選択したのだった。

そして、愛歌は死した。

^{みどり}翠色のドレスを着た少女は、妹の代わりに暗黒の底へと呑み込まれて。

けれど。其処から先をセイバーは感知できない。

生贄たちは救われただろうか。奪われた意思と知性を取り戻し、これ以上ひとりも欠けることなく、迷わず地上へと逃げ延びられただろうか。

守るべき幼子――

聖剣の担い手としての自分に救いをもたらした、沙条綾香も。

意識を失ってしまったようではあるものの、無事に、目を覚ませたのだろうか。

駄目だ。愛歌を手に掛けた瞬間から先の情報だけは、どうやっても得られない。

彼の肉体そのものは現世に残されて段階的な消滅を開始したようだから、僅かなりとも稼動できる可能性は存在するが、何より、^{まどろ}瞼が開かない。意識があちらの側で目覚める気配は微塵もなかった。眠りとも夢とも異なる微睡みに似たうねりの中で、世界の示すままに次の場所へ赴く他にない。

明確な意識さえ保てない時空間の狭間にて、セイバーはただ請い願う。

どうか。西暦一九九一年の東京が救われて、あの幼子が守られるように、と。

何に願う。暗黒を湛える聖杯か。主の威光を湛える聖杯か。

(……待て)

救いの国は此処に。

救いの日は現在^{いま}に。

そう受け止めて、新たに誓ったのがお前ではないのか。アーサー・ペンドラゴン。

(僕は、きみを守ると誓った。沙条綾香)

「それなら、ここで終わってしまう道理はないね」

第一の声。聞き覚えのない男性のものだった。

既に人格としての統一性を失いつつある意識を向けると、何故か、視覚映像としての姿がセイバーの脳裏に浮かび上がる。眼鏡を手にした金髪の男性がいた。服装からすると二〇世紀現在、ないし十九世紀あたりの人物か――

「現在のきみは落下しているんだ。肉体がね。きみはきみのマスターを地の底へと放り投げたけれど、きみ自身もそのまま落ちたという訳だ。そして、その落ちてゆく先は、僕らの魂^{こゝろ}が融け合っている場所に他ならない」

「へえ。こういう風にお前には見えてんのか」

間違える訳もない。

第二の声を放ちながら其処に顕れたのは、誰あろう、弓^{アーチャー}の英霊に違いない。

東京湾上神殿決戦にて命を散らした男。流星一条にて神王を貫き、セイバーと共に東京に生きる人々を救ってみせた東方の大英雄。伝説、伝承にて語られるがままの在り方を見せながら死んでいった、そう、既にサーヴァントとしての仮初めの命を失った英霊。

(ならば、これは幻覚か?)

「ああ。幻か、夢なんだろうさ」

「待つて欲しい、アーチャー。僕はその解釈には異を唱えたい。この稀有なる心理的現象は、たとえば集合的無意識の発露であるとは考えられまいか。証拠は僕だ。彼が出会ったことのない形態の僕が、こうして顕れている。ただの夢とは断定しきれない」

「理屈っぽいバーサーカーつてのも、なあ」

弓兵が肩^{すく}を竦めている。

そうしてから、真っ直ぐに視線を向けてくる。

「それはそうとな。セイバー。お前さん、まさか、ここで諦める訳じゃあるまい？」

明確なまでの呼び掛けだった。

最期の瞬間まで戦い、抗え、とペルシャの弓兵は鼓舞している。

だが。返答できない。

拡散してゆく意識の残滓にすぎないセイバーには、彼らへと告げる唇も舌もない。

「世界を救え」

第三の声は、太陽の灼熱を伴って響き渡っていた。

周囲の空間が映像として構成されてゆく。黒い大釜のようでありながら懐かしき円卓のようでもある物体の向こうに、彼がいた。燃え盛る炎の如き瞳を見間違える筈もなく、セイバーは息を呑み、我知らず目を見張ってしまう。

騎の英霊。アーチャーと共に斃した相手、強大なる神王そのひと。

「認めよう。余は神君であるが暴君の顔も持ち合わせるが故に、こうも醜く歪み果てた世界なぞはどうにも救いきれぬ。特に、是なる当世、繁栄と消費をあまりに貪り過ぎている。我が豪腕を思うさま振るうには、あまりに頼りなからうさ」

物体の端の上で不機嫌そうに腕を組んで、彼は言った。

「……故に。此处では貴様が救え、勇者よ」

呼び掛けではない。命令だ。

だが。首肯できない。

意識と肉体が現世で正しく結び付かない現状では、頷くにしても首がない。

「シグルド。いいえ、聖剣を担うセイバー。すべてをあなたに託します」

第四の声。紫水晶の煌めきを忘れられる訳がない。

以前目にした時よりも幾分小振りなサイズに縮んだ武装を携えた槍の英霊は、それ以上の言葉を紡ごうとはしない。黒色の物体からやや離れた場所から、じっと視線を注いでくる。百の言葉を連ねられるよりも、余程、彼女の視線は物を言う。想いを蒼き炎とする女神は、そう、既に彼女自身の死の瞬間に想いを告げている。

大聖杯に潜むもの。

あれを、生み落としてはいけない。

世界を――

(憶えている。この魂に、きみの声はきっと正しく焼き付いている)

意識の破片を掻き集めながらセイバーは思考する。

応じるようにしてランサーは瞳に寂しさの色を混ぜてくるけれど、言葉として伝えようにも彼には喉がない。舌がない。肺も形成されてはいないから、息さえ吐き出せず、ただただ無念を漠然と抱くばかり。

「——」

「——」

気付けば、ランサーの隣には新たな人影がふたつ顯れていた。

穏やかな気配を湛えた長身の人影と、遠慮がちに隠れようとする小柄な人影。

それが術の英霊キャスターと影の英霊アサシンであって、二人が、音もなく静かに、たった一度だけ顔いてみせるのを捉えた瞬間——セイバーは自分自身についての定義を新たにしていた。輪郭。形態。外装。エーテルとして仮初めに構成される、サーヴァントとしての英霊に備わった四肢の感覚が、ほんの僅かに浮き上がって。

死した英霊が集う此処の、ほんの少しだけ向こう。

地下大聖杯が蠢く其処に、未だ、セイバーの肉体は存在していて。

その左腕が何かを抱いていた。

それは、幼子だ。瞼を閉じて失神したままの、羽毛のように軽い沙条綾香。

「それに、あれだ。

騎士ってのは、貴婦人レディを守るものなんだろう？」

再びのアーチャーの言葉が届く。

セイバーは顔いていた。

首なき首で顔いて、唇なき唇から口早に返答を漏らす。

そうだな、と。

有り難う、と。

そして。



そして、咆哮する暗黒が世界へ牙を剥く。

沸騰する肉海。

発狂する食欲。

増殖する混沌。

絶望の断崖から数百メートル下方に位置する地底にて、大聖杯を殻として、人類に対する異常なまでの欲望を伴って今まさに誕生せんとする巨軀であった。母と定めた少女を失った瞬間から発生した数百の“唇、からもたらされる異形の絶叫は、空間を蝕む魔力の波となって大聖杯をひび割れさせてゆく。眠るのも、たゆたうのも、待ち続けるのも此処で終わりだと言わんばかりの、擻猛な行動だった。

生まれたい、と言っている。

捕食。捕食。誕生。進化。進化。捕食。進化。進化。捕食捕食捕食捕食！

大欲と暴食の具現、汝の名は獣。

刮目せよ、大いなる竜から玉座と権威を与えられるべき獣の偉容を知るがいい。

昔には在って今には在らざるもの、しかし、やがて底知れぬ場所から這い上がって来たるもの。徒波の彼方より都市へと迫り、あらゆるものを冒瀆する権利を与えられた世界の王として生まれ落ちて、虚飾と退廃を司る現象。悪の源たる女を背に寄せながら、自分たちを非難し、貶めて、侮辱し続ける世界中の怒れる数多の人々を招き、黄金の渦のただ中にて抱き融かしながら貪り喰らう、人を殺す権能として定められた第六の獣。

数え切れない程に増える“唇、のうち、七つが拡大し、牙持つ“顎、へと変容する。

未だ頭部が形成されてはいないが、遠からず、これらの“顎、が“頭、となるのだ。

その時こそ、『十の支配の冠』が地上に顕現する。

母なるバビロンが存命であれば、更に、聖杯ならざる黄金の杯も同時に顕れていただろうが、既に、聖剣に貫かれた沙条愛歌の肉体は獣の素体たる暗黒の肉海へと落ちた。如何に全能として生まれた少女とはいえ、魂ごと霊子分解されたに違いあるまい。

破滅が胎動する。

絶叫を続けながら、地上への侵攻を開始せんとして蠢く。

半径数百メートル規模の広大さを有する地下空間が狭く感じられるほどの圧迫感が、地底から断崖付近へと押し寄せていく。生贄の少女たちを時に殺し、時に半ばまで生かしながら、魂の慟哭と絶望を囁き続ける邪悪は、災厄の獣は征くだろう。定められた道筋とは些か異なっていようと、極東の都市へと躍り出て、東京都一千万の市民を鏖殺する。

全能を以て事象を操る少女亡き今、古きブリテンの救済は有り得ず、人理定礎が破壊される

可能性はごく低いだろうが――

是を、どう捉えるべきか。

世界は救われたのだと喜ぶべきだろうか。

東京は救われぬのだと嘆くべきだろうか。

^{わら}嗤え、嗤え、愚かなりし枢機卿。

^{あなた}貴方が望んだ高位のものは極東都市への降臨なぞ果たさない！

見るがいい。地の奥深くで目覚めるのは恐るべき黙示録の獣、大聖杯を取り込みながら実体化しつつあるのは大いなる恐怖、もたらされるのは救済ではなく、しかし予言の成就ではあるだろう。聖典に記された^{ひいろ}緋色の獣の降臨。聖堂教会の人間たちがそれを知る頃には、もう、東京は影も形もなくなっているに違いない。

けれど。獣がそれを成し遂げるには、まず、完全な体軀を形成しなくては。

まずは頭部。目。口。舌。胸部。四肢。尾。

地上に君臨すべき一箇の命として再構成される必要があるのだ。

心臓は動いているか。肺は。脈拍、血流、魔術回路に等しい神経の働きは正常か。

殻を割り、生まれ出なくてはならない。

『生まれたい』『生まれたい』『生まれたい』『生まれたい』『生まれたい』

『おいしいもの、たくさん』

『食ベたい』『もっと、もっと、もっと、食ベたい』

『生まレたい』

『生まレたい』

七つの“顎”と化した“唇”がとうとう人語を発してしまう。

忌まわしき七つの脳髓が、着実に、霊核を基礎として編み上げられてゆくのか。

「……駄目だ」

暗黒の底に。

誰かがいる。

暗がりの奥底、偶然にも肉海が存在していない地点に佇む、それは騎士だった。

「お前だけは、この世に生まれてはいけない」

輝きを放つ騎士だ。

運命を担う剣士だ。

世界を蝕む黒を引き裂くために、最期の力を振り絞って立つ男である。

セイバーという名で呼ぶべきかどうか。既に、最後のマスターはいないのだから。

『おいシそう』『おいシそう』『おいシそう』『おいシそう』『おいシそう』

『おいしい』『おいしい』『おいしい』『おいしい』『おいしい』『おいしい』

『食ベたい』

『邪魔をすルな』

『ソレ、左手に持ってるソレ、おいしソう』

反射的に獣は触腕を繰り出していた。

直系十メートルにも及ぶ野太い肉の腕は、英霊たちのように言うならば対軍宝具の一撃にも等しい魔力を有して、凶悪な質量と速度を伴ってセイバーを砕こうとするが——否、届きはしない。彼が剣を薙ぎ払うだけで、破裂音と共に触腕は崩壊する。続けざまに第二撃、第三、第四、第五から第二十三撃までが発射されても、概ね同じ動作で迎撃。後半の十二撃ぶんに至っては、ただの一閃で吹き飛ばされてしまう。

「いいや。駄目だ」

右手には、聖剣を構えて。

左腕には、気を失った綾香を抱えて。

セイバーは微塵も揺るがず立ち続けている。

肉体を苛む問題は克服しているのか。まさか。自分のマスターを手に掛けた代償は必ず支払わねばならない。単独行動スキルの恩恵なしに、現界は維持されない。彼の肉体は霊核ごと徐々に光の粒子と化している。もう、数十秒も保たないだろう。本来なら両腕で構えた上で放たれる聖剣も、消えかけた右腕のみでは何処まで力を発揮できるものか。

それでも。

完全に消えてしまうよりも前に。

彼は、己が成すべきことを成す。

この東京を——この左腕の中に在る幼子と共に、今、救ってみせるのだ。

「^{シール・サーティーン}十三拘束解放！

^{デジジョン・スタート}円卓議決開始！」

^{いわ}曰く、星の聖剣はただひとりの英雄のみが使用を決めるに^{あら}非ず。

星の外敵を両断せしめる剣。世界を救うために振るわれるべき最強の剣は、個人が手にする武装としてはあまりに強力に過ぎるが故に、かの古き国の騎士王とその配下たる十二の騎士たちは厳格な法を聖剣そのものに定め、施したという。

それこそ、聖剣の真なる刀身を覆い隠す第二の^{さや}鞘。十三拘束。

複数の誇りと使命を成し遂げられるであろう事態でのみ、聖剣は解放される。

完全解放のために必要な議決数は七つ。

騎士王と十二の騎士たちが地上より消え去っても、この拘束は永遠に働く。

当代の聖剣使いがその解放を望めば、自動的に、円卓議決が開始されるのである。

「是は、己よりも強大な者との戦いである」 ——承認、ベディヴィエール。

「是は、一対一の戦いである」 ——承認、パロミデス。

「是は、精霊との戦いではない」 ——承認、ランスロット。

「是は、邪悪との戦いである」 ——承認、モードレッド。

「是は、私欲なき戦いである」 ——承認、ギャラハッド。

「そして、是は、世界を救う戦いである」 ——承認、アーサー。

決して、剣を手にした所有者ではなく。

聖剣に込められた英雄たちの魂の欠片^{かけら}がすべてを裁定する。

其^{それ}が、星の聖剣、世界を救う神造兵装を振るう戦いか否か。

聖剣の重みを、右腕に。

幼子の重みを、左腕に。

どちらも等しく尊いものであると、刹那^{せつな}、セイバーは信じながら剣を振りかぶる。

対応するようにして肉海から繰り出される無数の触腕。だが。遅い。

「約束された——^{エクス}——^{カリバー}勝利の剣！」



聖剣六拘束解放！

惜しくも、半数を超す議決ではない。

完全なる真名解放にまでは至らない。

それでも光は放たれる。絶大な威力を秘めた対城宝具、黄金の斬撃^{ざんげき}として。

不完全解放状態であっても、聖剣は、驚異の力を有して大敵を穿つ。

触腕の群れが蒸発する。暗黒の肉海^{おび}が怯え、震え、悲鳴を上げながら踊り狂う！

東京湾上神殿での決戦を一度目として、この不完全なる解放は二度目となる。一度目は五体満足な状態であったが、この状況ではどうなるか。強靱な英霊^{きやうじん}の肉体を以てしても、両腕で剣を構え、両脚で大地を踏み締めずに扱うのは困難だろう。

解放の反動に耐えきれなければ、斬撃を放つよりも前にセイバーは砕け散る。

ああ、見ろ。蒼と白銀の鎧^{よろい}に亀裂が入る。霊核の割れる音がする。

「……！」

ならば、此処までか。

運命の騎士は暗黒の獣を斃せず、屈して、聖剣の威に殺されて終わるのか。

違う。そうではない。そんな幕引きであるものか！

「消えろ、おぞましき獣！

お前が生まれる場所はきっと此処ではなく、現在^{いま}でもないだろう！」

右手で充分だ。

七騎もいれば。

誰も見ることはないが、奇跡は成った。

七色の光。七騎の英雄たちの右手が、ただひとつの聖剣の柄^{つか}を確かに支えていた。

落とした硝子玉^{ガラス}にも似て縦に割れたセイバーの右眼球が、視界に幻覚を刻んだに過ぎないのだとしても、それでも、少なくとも彼の肉体は聖剣を真一文字に振り抜いた。

宝具、疑似解放及び発動の成功を確認。

左腕に抱いた幼子にも、悪しき影響は一切観測できない。

——世界は救われる。

——左腕を幼子のために塞^{ふさ}ごうとも、運命の騎士は誓いを果たし、聖剣を振るう。

この世すべての悪を斃し、

この世すべての欲に抗い、

この世すべての明日を拓くために。

——黄金の刀身から。

——^{まばゆ}眩き星の光が、今こそ放たれて、地下空間のすべてを埋め尽くしてゆく。

数秒の後。

獣が、細く細く鳴いた。

それは、母を求める赤子の泣き声のようにも聞こえたが——



哀れにも、大天使ならざる獣は空に慟哭した。とか。

暗がりの天井に覆われて見える筈のない夜空の星々へと、天の父へと、何かを訴え掛けるようにそうしたのだと語ることもできましょうが、止めておきましょう。ああして顕現を果たした以上、逆説的ではあっても我々は主の威光を確かめられたとも考えるべきではありませんまいか。いいえ。是は観測結果ではなく、枢機卿閣下のご判断を狭めるためのものではありません。あくまで私の個人的感想です。

ただ、大層^{ロマンチック}情緒的ではありませんかね？

人殺しの英雄どものなれの果てを喰らった獣が、救いを求めるように。母を求むる。

聖女などとは程遠い大妖婦を母と呼ぶとは、是を^{ろまん}浪漫と呼ばずして如何^{いか}しょうか。

ああ。すみません。冗談ですとも。

厄災の獣は完全な顕現には至りませんでした。

東京聖都化の兆候なども確認はできず。

魔術儀式・聖杯戦争は失敗したと言わざるを得ないでしょう。後に残されたのは、数々の事態^{いん}隠蔽^{べい}のために費やされる莫大^{ばくだい}な手間と予算ばかり。特に、米海軍所属の艦船数隻が消失してしまったのはどうにもなりません。時計塔が全力を以て対処して下さったようですが、あの腐れ^{のうみそ}脳味噌連中に借りを作るといっても気に入りませんな。いや、失敬。時計塔法政科の皆さんにはせいぜい尽力して頂きましょう。お手並み拝見。

さて。第一の聖杯戦争はこうして幕を閉じました。

どうにも上手^{うま}く運ばないものです。

第二次聖杯戦争を開始する暁には、もっと直接的なコントロールが必要でしょう。

以上、監督役としての所感を報告申し上げる。

追記：

最後の一騎として大聖杯に立ったセイバーは、厄災の降臨を真に阻んだのか否か？

願いの彼方より顕れた聖剣の英雄は、果たして、幼き沙条綾香嬢を救い、この醜さの最たる極東都市と世界とを救いたもうたのか。

それは、まあ、ええ。

少なくとも。

一九九一年の時点で世界が^{しゅうえん}終焉を迎えることはなかった——とだけ。

(テンブル騎士団の記録より抜粋)



遙かなる過去。

遠い日の記憶。

そして、つい先ほどまで目にしていた筈の青空の下。

血に染まった戦場を駆け抜けて、数え切れない骸^{むくろ}を積み上げた後のことだった。

斜陽の大帝国との戦いの後、故国ブリテンへと戻った彼を待ち受けていたのは叛逆^{はんぎやく}の騎士にして
僭主^{せんしゅ}モードレッドの裏切りであり、地獄が如き内戦の再来だった。以前のそれよりも酷い^{ひど}と言えるか
もしれない。栄光の円卓は影も形もなく、精強にして一騎当千の騎士たちは次々と姿を消してい
た。命を失って。もしくは、訣別^{けつべつ}の言葉を残して。

辿^{たど}り着いた先の森にて、大樹に身を預けながら彼は瞼を開ける。

セイバーは――

否。アーサー・ペンドラゴンは、過去に生きるひとりの人間として目覚めていた。

苦痛と熱が酷い。叛逆者との決戦で受けた一撃は致命傷であつたと思しい。ばらばらになりそう
な意識を引き留めながら、言葉を告げる。つい先刻にも似たようなことをした記憶がある。不思議
なものだ。

「ベディヴィエール」

夢を見ていた。

そう、王たるアーサーは続ける。

遠い目をしながら語る王の言葉を、騎士は静かに控えて聞き届ける。

「夢の中でも、私は戦っていたよ。お前たちのいない遠い国の見知らぬ街で、私は愚かしくも迷いな
がら、やはりこの聖剣を振るっていた」

「愚かなどと王^{そし}を誹る者はおりません」

「ありがとう、ベディヴィエール。我が騎士」

ゆっくりと言ってから、大きく息を吸う。

血の味のする空気だった。

「では、騎士よ。お前に命ずる。この森を抜け、血塗られた丘を越えて湖へと赴け。其処へ我が名
剣を投げ入れるのだ」

「王、それは――」

名剣。湖の貴婦人よりもたらされた星の剣。

王権を示す最高の名剣であり、何者であっても打ち倒す最強の聖剣。

それを捨てよ、と王は言っているのだ。

それは、王としてのアーサーの終わりを意味するのではないか。

何故、と戸惑う騎士へ王は更に言葉が続ける。

「私は最早^{もはや}、王ではない。故国を救うことは遂^{つい}に叶わなかった私だが……今ひとたび、私は騎士として在ろうと思うのだ。ベディヴィエール」

「理由を……お尋ねしても宜^{よろ}しいですか、我が王」

「無論だ」

瞼を閉じて、騎士王は静かにこう言うのだ。

——ただひとり、僕には守らねばならない貴婦人がいるのだ、と——

そして、ベディヴィエール卿^{きよう}は二度の逡巡^{しゆんじゆん}の後、三度目にして漸^{ようや}く王命を果たす。

王の永遠を願うあまり二度も引き返した彼であったが、とうとう湖へと聖剣と鞘とを投げ入れたのだった。人の手に余る魔力を有した稀代^{きたい}の名剣は、こうして湖の貴婦人へと戻される。次に剣を手にする者は、時代によって選ばれた聖剣使いであるに違いない。

果たして、大樹^{ふもと}の麓へ彼が戻った時、其処に王の姿はなかった。

「……王よ、何処に？」

残されたのは。

痛々しげなまでの血溜まりのみ。

王は、まさか、聖杯を得た騎士ギアラハッドのように——

尊き伝説に語られる救世主の如くして肉体を伴ったまま天へと召されたのか。

或いは、すべて遠き理想郷^{アヴァロン}へと旅立ったのか。

それとも。

もしくは。

The background of the page is a dark, monochromatic illustration of tropical foliage. It features large, pointed leaves and palm fronds, rendered in various shades of dark gray and black, creating a layered, jungle-like effect. The text is positioned in the upper left quadrant of this background.

Special ACT Fate

早朝、地震があった。

あまり大きなものではない。ほんのささやかなもの。自分たちの足下に在る大地が僅かに身じろぐ、個人の力では抗うことなどできようもない自然現象は、その独特の感覚によく慣れた関東地域の若者であれば気にも留めない程度だったろう。気配を察して瞼を開けたとしても、そうでなくとも、朝の授業に間に合うようセットされた目覚まし時計が許す限りは眠り続ける者が大半だった筈だ。

一方で、彼女の反応は異なっていた。

縦揺れの地震というものを殆ど経験した覚えがなかったせいか、來野環は慌てて飛び起きてしまったのだった。きっと月に数度程度しか干していないに違いない、兄の匂いが深く染みついた布団にくるまれて眠っていたところに異常事態を――地震を感じ取って、思わず、掛け布団と毛布を一緒に蹴ってはね除けていた。

「……あうあ」

薄い早朝の明かりがカーテンの隙間から差し込む、六畳間。

小さなアパートの一室。

ああ、そうだ。ここは違う。いつもの部屋じゃない。兄の部屋。

広島市内の家ではなく、東京で暮らす兄の部屋に自分はいたのだった。

兄の部屋なのに肝心の兄はおらず、妹である自分だけが布団を敷いて眠る。いつ兄が帰って来るか分からないから、ぎりぎり限界まで眠らないようにしながらも、だいたい零時を過ぎる頃になると耐えきれなくなって瞼を閉じてしまって、気付けば寒い夜から寒い寒い朝に変わっている。そんな風に夜を過ごすようになってから、もう一週間近い。

ぼうつとした意識のまま目元を擦りながら、立ち上がってみる。

何があったのか。

地震。そうだ。だから、自分は目を覚ましてしまったのだった。

それだけ？

本当に、それだけ？

分からない。ただ、大切なことが起きたのだという強い直感だけがあって。

「お兄ちゃん？」

誰かの気配がある訳でもないのに、喉が声を発して。

いつの間にか、部屋の外に出ていた。

きっと気温は数度であるだろうに、寒さはまったく気にならなかった。一秒でも早く外に出たかった。屋間とは違って変わって静かな、行き交う自動車のモーター音や人の気配がぐっと減って、まるで世界中の人口が減少してしまったかにも思えてくる、午前六時半を過ぎた世田谷の片隅。ひどく冷た

い空気を胸一杯に吸い込んで、白い息を吐き出しながら、朝焼けの始まった東京の空を見上げて。

光が見える。陽の光。

いつか、丸子川^{まるこがわ}沿いに家路を歩いていた時に見たものに何処^{どこ}か似て。

どうしてだろう、あれは歴^{れっき}とした夕日だった。光の加減も色の具合も違っている。

それでも。

似ている。

「あ……」

瞬間――

環は、自分が感じているものが何かを理解していた。

起きたのではない。

多分。今、終わったのだ。

世田谷警察署に捜索願いを出すために上京してきた両親と一緒に帰るのを拒んで、自分でも驚くくらいの剣幕で「お兄ちゃんを待つ」と言い張って、小さな子供^{わめ}みたいに喚いて、叫んで、それからひとりでアパートに^{とど}留まりながら兄の帰りを待ち続けて、数日。両親が来る前の日数を合計すれば、そう、ほぼ一週間。

春から始まる高校生活を目前に控えた猶予期間^{モラトリアム}のような日々に生まれた、この、まるで現実感の湧いてくれない悪い夢のような東京での日々は、きっと、今。終わった。

終わってしまったのだ。

理屈は何もない。

ただ、そうなのだという諦め^{あきら}のようなものが確かに在って。

「もう、私、帰らなきゃだめかな。お兄ちゃん」

声、掠^{かす}れていて。

気付くと頬^めが濡れていた。

涙を流したという自覚なんて、少しもなかったのに――



Fate/Prototype

蒼銀のフラグメンツ

『Fate』



西暦一九九一年二月某日、同時刻。

東京都千代田区神田駿河台、御茶ノ水。山の上ホテル屋上にて。

ひとり、エルザ・西条^{さいじょう}は朝焼けの空を見ていた。

痕跡^{こんせき}は何もない。視界に広がるのは紛^{まご}うことなく冬の空、太陽が徐々に昇りつつある朝の風景であって、地下奥深くから空へ^{ほとばし}と迸った一条の鮮烈な魔力の名残などは一切視認できなかった。それでも、確かにエルザは感じ取っていた。一度は令呪を有した聖杯戦争のマスターであったが故なのか、もしくは魔術師であれば誰もが同じ実感を得ていたのかどうかは分からない。ただ、確信として、すべての終わりを彼女は知ったのだった。

聖杯戦争の終結。

大聖杯^{おほ}と思しき巨大きわまる魔力の胎動と、その突如たる消失を。

直感的に把握する。聖杯は発動しなかったのだ、と。

精神と理性と記憶、きっと魂の深くにまで突き刺さっていた呪詛^{じゅそ}が晴れてゆく。東洋式のものとも異なる特殊かつ複雑極まる術式は、あの透き通った瞳^{ひとみ}の少女——セイバーのマスターであろう、恐るべき少女の手によるものだったろうけれど。僅かな地震を感じる直前に、不思議と消え失せていた。

完全に。エルザの精神は解放されていた。

燻製肉^{くんせいにく}を縛り付けるかのようにぎゅうぎゅうに締められていた頑丈な糸が、滑らかな絹糸へと変質して、そのまま^{ほど}ずると解けるようにして。

「アーチャー……アーラシュ……」

朝陽の暖かさを感じながら、目を細める。

視界がぼやける。

涙^かは、涸れ果てるとばかり思っていたそれは、少しも止まってくれない。

愛^{いと}し子を、ルカを失った時に思った。もう涙は流さないと。

令呪三画の使用でアーチャーに宝具の真名解放を命じた時にも、そう思った。

なのに、止まらない。涙^{あふ}。溢れて、溢れて、自分のすべてが溶けて流れてしまいそうなくらいの錯覚を覚えても、止まらなかった。嗚咽^{おえつ}する。彼の名を呼ぶ。現界にあたって割り当てられたクラスではなく、本当の名前を呼び続ける。何度も何度も。きっとこれが、彼の名を口にする最後の瞬間なのだろうと思いながら。

「————」

名前の後、絞り出すように述べた筈の言葉は明確な声にならなかった。

返答はない。

彼は此処にはいないのだから。



アーチャーの魂が何処へ行ったのかをエルザは知らない。聖杯戦争の真実さえ知らされてはいないのだ。英霊七騎の魂を溜め^たた聖杯が災厄の獣として変成する事実は誰にも伝えられず、暗黒の底にて散っていった者たちだけがそれを知る。けれど、エルザは不思議と思い違いをしてはいなかった。

つまり、彼は座へと戻ったのだ、とは考えはしなかった。

ただ、地上からアーチャー・アーラシュは失われたという事実だけを想った。

生きた人間が死してしまったのと同じようにして、悼み、彼の横顔を思い浮かべて。

——さようなら。

——私の、最初で最後の、最高のサーヴァント。アーラシュ・カマンガー。

さあ、涙を拭^{ぬぐ}って。顔を上げて。エルザ。

お気に入りの旅行鞆^{かばん}を、彼が「いいじゃないか」と褒めてくれた鞆を取ってこよう。

ホテルから程近い聖堂教会支部へ赴いて、手続きを済ませて。爬虫類^{は ちゅうるい}じみた雰囲気^{お け う}を漂わせた監視役の補佐にせいぜいとびきりの笑顔を向けて、この極東に於ける稀有なる魔術儀式で大英雄を引き当てながらも敢えなく敗北を喫し、その上に命まで永らえた無様な女が少しも堪^{こた}えていない風に装って、あのサディスト神父がほくそ笑むのをせいぜい邪魔してやろう。あの神父相手なら、アーチャーもきつと嫌な顔はしないだろうから。

それから。

帰ろう。

久しぶりに故郷へ戻って、もう一年以上行けていないルカのお墓へ行こう。

話したいことが沢山ある。

極東^{で あ}で出逢った、とびきりの英雄のことを。あの子にも伝えよう。

もう少しだけ、泣いてから。



あれは二月の……

旦那さまがお亡くなりになってから一週間ほど後のことです。

震度はそう大きくなかったでしょうか、早朝に縦揺れの地震があった日ですね。普段であれば気にも留めないのですが、あの日ばかりは何故かあまりに驚いたもので、隣室の同僚まで起こしに行ってしまったものですからよく覚えています。ええ、ええ、杉並の玲瓏館邸です。私を含めて使用人の大半は伊豆の別邸からもうお屋敷に戻っていましたから、その時には使用人室はすべて埋まっていたね。

はい。一九九一年二月×日の朝で間違いありません。

地震の少し後、玲瓏館邸へ来客があったのです。

確か午前八時を過ぎてはいなかったように思います。お屋敷の正門前には背の高い、見目の良い金髪の青年がいて……七、八歳くらいの女の子を私どもに預けました。何故そうなさるのかと家令が問い掛けましたけれども青年は何も語らず、女の子との関わりについても口にはなさいませんでした。

ただ、その子が沙条家の一子であるとは手短に告げておられましたね。

『すべては終わった。だから、その子は玲瓏館に仇なすものではない』

そうも仰っておいででした。

私は意味が分かりませんでしたけれども、家令は何かを察したようではありました。戸惑う私たちに指示をくださったので、私たちはそのように務めました。幼い女の子は沙条家からの正式な来客であり、礼を以て我々が迎えるべきお相手であるとのことでしたから、ええ、直ちに客室を整えて。自慢ではないですが、どのような事態であろうと私たちは対応するように訓練されているんです。それが玲瓏館のお屋敷で働く者の……。

女の子ですか？

ええ、はい。ぐっすりとよく眠っていて、それは愛らしい子でした。

金髪の青年の方はすぐに姿を消してしまいました。行方については存じ上げません。

私たちがお預かりした女の子、お名前は確か、沙条綾香さまと仰ったはずです。奥さまからお聞きしたんだと思います。その頃にはもう、私たちと一緒に玲瓏館の奥方さまがお屋敷に戻っておいでしたから。

綾香さまは、ずっと眠っておいででした。

口さがない若い使用人あたりは“眠り姫、などとふざけて言うものですから、私や家令はその度に叱り付けたものです。ですけども、確かにずっとお眠りではありましたか。よほど深い眠りに就いていらっやったようで、皆で気を揉みました。

綾香さまは、玲瓏館邸の客間のベッドで数日を過ごされました。

目覚めたことがあったかどうかは覚えていません。お屋敷お抱えの医師が何度か往診に来てはいて、お体については特に問題はないという話であったように記憶しています。何と申しますか、所謂^{いわゆる}、心のご病気であったかどうかは定かではありません。少なくとも私は耳にしませんでしたね。

ああ、でも。後から奥さまが口数少なく語ったところでは……

玲瓏館を襲い当主を奪い去ってしまった数日前の悲劇とよく似た災いが、恐ろしい呪いのようなものが、同じく、沙条家にも降りかかってしまったのだとか。沙条綾香さまは家族のすべてを失ってしまったのだと聞きました。

『あの子が眠り続けているのは、きっと、心が壊れてしまわないように……。

残酷すぎる現実を見据えて、その中で生きるのは……あまりにつらいことだから』

そのように、ああ、奥さまは仰って。

もしかしたら……お嬢さまがあのようななっていたのも、奥さまのお言葉があったからなのかもしれませんね。これは、私の感傷に過ぎるかも知れませんが。

そう、ある日のことでした。

客間のベッドでこんこんと眠り続ける綾香さまの^{もと}許へ、お嬢さまが訪れたのです。

玲瓏館^{みさや}美沙夜さま。先代である旦那さまが急逝なされたというのに、気丈にも玲瓏館のすべてを取り回しておられた、ご立派なお嬢さまです。ご自分もおつらいでしょうに、日々悲嘆に暮れる奥さまを励ましてでもおいででした。本当に、小さな頃から何もかもが^{かん べき}完璧であるかのように、いいえ、本当に完璧なお嬢さま。

そうですね。あの日、私はとても珍しいものを目にしました。

一目見た限りでは信じ難いとさえ思える光景でした。肝心の瞬間には目を離してしまっていたものですから、お嬢さまご自身がそうなされたのか、それとも綾香さまが無意識に手を伸ばして^{そう}なったのかは分かりませんが、何であれ、とても稀有なものではありました。ご友人をお屋敷へ招待なさったりはしないお嬢さまが同年代の子と一緒にいるのが、まず奇跡的と口にしても過言ではないというのに。

あまつさえ、互いに手を握り合っている姿なんて。

ええ、それはもう。まるで仲の良い姉妹同士のように――

(玲瓏館家の使用人の証言より抜粋)





はい。確かに。

あの時、手を伸ばされたのは沙条綾香さまでした。

悪い夢を見ておいでだったのでしょうか。彼女が目の当たりにしたであろう過酷な事柄を僅かでも知る者からすれば、無理からぬこと。荒い呼吸を繰り返しながら、うなされ、幾つかのうわごとの謔言を口にして、何かを求めるかのように手を伸ばされた。震えるその手は、世の有り様を知らぬ幼子が無意識に親を求めるそれとはあまりに異なる。

聖杯戦争にご参加されて命を落とした父君へと伸ばされたのか。

^{ある}或いは、同じように聖杯戦争に消えた姉君へと伸ばされたのか。

左様、余人のあずかり知らぬことでしょう。私自身、心穏やかにしていただきたいと胸中で思いはすれど、立ち入るにははばかくもんの程の苦悶のさまでありました。

けれど、その綾香さまの手を……美沙夜お嬢さまがつかんだのです。

何を、その時のお嬢さまがお考えでいたのかは私には量り兼ねる。

ただ確かなことは、それから綾香さまは徐々に落ち着きを取り戻されたご様子となって、やがて安らかな寝息を立て始めたということ。その間、お嬢さまはじっと動かず、手に触れたままの姿勢で小一時間ほど綾香さまのお顔を見つめておいでであったこと。客観的な事実としては以上であり、他には何もございません。

はい。当時の私の所感、でありますか。

流石に憚られます。私は玲瓏館の家令を務める身。お屋敷の内での出来事を口にするなどほかのあなた外、そも、貴方に対して何故私はこのように軽々しく……。

【一時中断 質問者による魔術行使】

……いえ、申し上げます。貴方にはすべて申し上げねばならない。そうでしたな。

眠り続ける綾香さまを見つめるお嬢さまを前にして、私は、そう、このように感じてしまったのです。

まるで、お嬢さまは、切り離れた自分を見ているかのような――

思えばあの頃、既にお嬢さまはお変わりになっていた。お父上を亡くした直後から、この東京のセカンドオーナーとも言べき王者の家を継ぐという自覚に溢れているようではあって、その溢れるばかりの才気によって玲瓏館家とその支配下にあるもののすべてを我が物として差配し、餓えた犬が如くして擦り寄る俗物どもを前にして力強く、優美に、まばゆく、ちょうらく玲瓏館に決して凋落なしとばかりにすべてを掌中に収めておられた。

美沙夜お嬢さまは、玲瓏館家当主としての務めを見事に果たされていたのです。

つまるところそれは、年齢相応の幼さを捨て去ってしまうに等しく。

だからこそ。

お嬢さまは、あの客室のベッドで、数日前に捨てたはずのご自分を見るような面持ちであったのか
もしれませんな。

……いいえ。ただの放言です。どうかお忘れいただきたい。

後に残すべき言葉ではなく、この老僕が墓へと持っていくべき言葉でありましょう。

（魔術協会による記録から
玲瓏館家・家令の証言より抜粋）



^{あまた}数多の人が行き交うJR東京駅構内にて。

その日、その時、二人の女の姿が在った。

来野環は、広島行きの東海道新幹線ひかり3号に乗るために。

エルザは、成田行きの特急列車が発発する上野駅へと乗り換えるために。

中央線ホームへと続くエレベーター前で彼女たちがすれ違ったのは、果たして、在るべき運命の交差だったのか、それとも意味のないまったくの偶然であったのか。確かめる手立てはない。ほんの数センチの距離を行き違った二人は、それぞれに自分が進むべき先を見据えていた筈だから、視線が交差するようなこともなかった。

ああ、そうではない。

視線は、ほんの一瞬だけではあるけれど合わさった。

——瞳と瞳。

環の黒く澄んだ瞳と、エルザの^{みどり}翠色の瞳が互いに線を結んでいた。

雑踏の賑わいがほんの少しだけ^か掻き消えるような錯覚を二人は感じたかもしれない、けれど、交わされる言葉はなく。目が合ったと自覚した環が反射的に会釈をして、それに気が付いたエルザが柔らかな微笑みを向けて。それで、終わり。

二月某日、一九九一年の聖杯戦争を生き延びた二人の女はこうしてすれ違った。

運命の^{わだち}轍は互いに別の方向を向いている。

そして。

「あつ、す、すみません」

^{きれい}綺麗な外国人の女性に微笑み掛けられたけれど、何だろう、と首を傾げながら新幹線乗り場へ向かっていた環は、不意に、通行人にぶつかってしまった。何度か背後が気になって振り返っていたせいだ。慌てて謝罪の言葉を告げつつ頭を下げてから、おそろおそろ顔を上げて相手を見る。足が長い。背の高いひとだった。

涼やかな外見をした男性。

あまり見かけない、お洒落な^{しゃれ}形の眼鏡は外国製だろうか。

テレビで見たことがあるような——と環はぼんやりと思ったものの、それ以上は思考を巡らせなかった。新幹線の発車時刻が迫っている。急がないといけない。まさか乗り遅れたりしたら、きっと駅まで迎えに来ると言っていたお母さんは泣いてしまう。そうでなくても、泣くのだろうけれど。

自分もきっと、同じように泣いてしまうのだろう。

涙は今朝、一時間以上にも渡ってすべて流し尽くしたと思ったのに。

これから何度、自分は泣くのだろう。

いてくれる筈のひとがいない。お兄ちゃんが、いない。

どこかで無事でいてくれると思いたいのに、どうして、こんなに胸が苦しいのか――

「失礼」

眼鏡の男性は、一言述べて颯爽^{さっそう}と去って行く。

こちらこそごめんなさい、と言ってぺこりと頭を下げた環へは見向きもせず

そうして。

運命の轍がもう一つ、すれ違ってゆく。



眼鏡の男性――

JR東京駅八重洲中央口を出たばかりの彼を出迎えたのはドイツ産の高級車だった。

個人的に七台所有しているうちの一台である。社用車として登録しているものを含めれば桁が変わるが、いずれも趣味の持ち物ではあった。最新のスポーツカーも在れば年代物のクラシックカーも在って、財産と呼ぶに相応しい金銭的価値を有するものだが、彼にしてみれば端金だ。たとえば今日、成田を経由して帰国したばかりの自分がロンドンから持ち帰った正真正銘の宝物に比べればどうということはない。

「西新宿へ」手短に、運転手へと告げる。

「ご自宅で宜しいですか？」

「会社も自宅も同じビルだよ」

冗談を言うように軽く言ってから、車載電話へ手を伸ばす。

あらかじめ登録された番号へコール。二秒と経たずに相手と回線が繋がった。

「どうも。ああ、もう東京だよ。教会の連中から既に話は聞いている。聖杯戦争は失敗したんだろう？ ああそうだ。二度目のチャンスに備えよう、金に糸目は付けない。あるだけ聖遺物とやらを集めて来てくれよ。できれば最強の英霊のそれをね」

すぐに車は首都高速に乗っていた。

高みの位置から都心のビル群を見据えながら、彼は言葉を続ける。

「ナイジェル・セイワードと言ったか。彼から買い取った情報はすべてデータ化して保存するように。死期を悟っていたのかどうか知らないが、随分と多くの事柄を教えてくれたものだ。……ああ、死体は彼の望み通りに処分しておいてくれ」

受話器の向こうから、通話相手が了承の言葉を告げてくる。

それに軽く頷いて、

「魔術師の家系、血筋なんて邪魔な荷物とばかり思っていたけれど、どうやら、そうでもなかったようだ。万能の願望機。そんなものが目の前にぶら下げられたなら、搦んでみせるまでだ。一度目はスタートラインにも立てなかったが――」

目的地にはすぐに到着するだろう。

完成したばかりの新宿新都庁のシルエットを遠目に眺めつつ、彼は口元を歪める。

野望を。

願いを。

言葉に込めながら。

「次は、逃さないさ」



——そして、それから八年の歳月が過ぎて、二〇回目の世紀末を迎える頃に——



一九九九年、極東都市。東京。

あらゆる願望を叶えるという虚偽を掲げられた聖杯、模造聖杯●●●号を巡る空前絶後の殺し合いは再び幕を開ける。聖堂教会、枢機卿の忘れざる妄念の通りにか。或いは時計塔、魔術協会による何らかの意向を受けてか。何にせよ運命の歯車は回転し、加速し、東京に生きる幾百万の人々の命は再び獣の牙に晒され、麗しき少女へと成長した幼子もまたその回転に巻き込まれてゆく。地下大聖杯での出来事を記憶の奥底に封じながら。

回転する。悲劇の方へ。悪夢の方へ。

止める者はいない。

多くを識る者が何を口にしなすが故に。

新たな魔術師七名がそれぞれ東京に集い、新たな戦いが始まる。

記憶を失った少女。黒魔術。沙条綾香。

「……私の死刑宣告のリミットは、ついに、ゼロになった」

王者の少女。獣を統べる手。玲瓏館美沙夜。

「女に殺された英霊が欲しかったの。だって、女の怖さを知っているでしょう？」

聖者の少年。繋がれた肉体。伊勢三杏路。

「僕には、友達がいませんでしたから」

番外の神父。狂気の微笑み。サンクレイド・ファーン。

「お父さんは、気の毒、でした。真理まであと一歩だったのに。アナタたちは——」

更にあと三名。

ひとり男。支配者の如くして新宿超高層建築に座す彼は、数千年の過去に生きた最強の英雄を召喚してみせた彼は、眼下に広がる東京の夜に何を見出すのか。

残る二名、それは男か。女か。

新たな英霊七騎もまた聖杯に導かれ、東京に再び神秘が降臨する。

史上二度目の聖杯戦争が始まるだろう。

殺し合い。奪い合う。そして。



主は語った。地に富を積んではならないと。

虚飾の繁栄を無に帰した時、次代の千年期は訪れる。

富の象徴、人の七罪。

汚れに汚れた金の杯。

全ては天の門を開く為。

最後の奇跡は、最も優れたモノの手に。



暗い。暗い。暗い。

闇を凝集させたかのような暗がり満ちて、天然自然の光の差さぬ場所だった。

静寂と、死。正しき命はひとつも存在していない。かつて数百にも及ぶ少女たちが涙ながらに命を落とした場所であるとは、地上に生きる数百万の東京市民は知りもすまい。たとえば生きた人間が一度でも呼吸してしまえば、広大な空間に漂う絶望と悲嘆、恐怖の残滓が肺腑をいっぱいにして、脳を灼かれ、瞬時に精神を発狂させるだろう。狂死による最期さえ十二分に起こり得る。

東京都内某所、地下大空洞。

聖杯戦争の中心とも呼ぶべき大聖杯の座すところ。

其処には蠢くものがある。

死にも似た眠りから目覚めようと藻掻くそれは、八年前、聖剣の一撃によって跡形もなく消え去ったはずの巨大な肉塊、粘塊に違いなかった。滅びていない。健在。膨大なまでの光は確かに一時、おぞましき獣へと完成しつつあったそれを地下空間から吹き飛ばしてみせたが、嗚呼、しかし人類悪の種は尽きまじ！

色濃く残された死の名残は空間を歪ませて、獣は暗黒の底に姿を見せていた。

新たに生まれ出るための卵、再生した大聖杯を殻として、受肉を待ち、餓えながら。

沸騰を始めんとする水のようにして泡立つ、黒き粘塊。黒き泥。黒き獣の揺籃。

小山のように盛り上がったその前に――

ひとり。少女が、舞っている。

「セイバー！ セイバー！ セイバー！ 信じてたわ、必ずアナタが戻ってくるって！」

無邪気に朗らかに。踊る。

「ああ、大好きよセイバー」くると。そう定められた自動人形が如く。「アナタを思うと、お腹から臓腑がこぼれだしてしまいそうなくらい、心臓を焼かれる痛みで夢から覚めてしまいそうなくらい、大好き！」

妖精。可憐の花。華麗の淑女。

いいや、違う。これがそんなものであるのか。

世界を我が物とする姫がいた。世界すべてを掌の上に載せて、いつでも、気が向けば容易に握り潰してしまえる程の力を有したものだ。嗚呼、最早気は向いてしまった。後は絶好の機会を待って、あるべき手順に従って世界を砕くばかり。獣を擁した大聖杯は在って、彼女の目的は八年前から何ひとつ変わっていない。

――沙条愛歌。

そう、何も、変わっていなかった。

年月は彼女に成長を与えず。獣と共に、彼女は帰還していた。

あの時とそっくり同じに、翠色のドレスを纏^{まと}って少女は笑っている。

背格好も何も変わらない。白磁の肌も透き通った瞳も、光を受けたとすればきらきらと煌^{きら}めくであろう柔らかな髪も、何ひとつ変わっていない。笑顔も。その麗^みしさには微塵^{じん}も翳^{かげ}りがなく、ともすれば潤んだ瞳に込められた想いは八年前を遙^{はる}かに超えている。

明確に異なる点があるとすれば、ドレスの胸元か。

大胆なまでにはだけられたそこには、真っ白な肢体の一部と――

「早く会いたい」

マスター階梯第一位^{あかし}の証。

七枚羽の令呪。

彼女の心臓を貫き通す形でその中心に穿^{うが}たれた――赤い、刀傷――

「早く会いたい、早く会いたい！」

少女は謳^{うた}い、叫^{おの}び、願^のう。己が愛を。



愛。万象を飲み干す凶猛のそれを、心臓の代わりとして胸の裡側^{うち がわ}に秘めながら。

暗がりの中、立ち込める死を象徴するように淡く魔力の光が灯^{とも}っていく。

観客のいない黒の舞台上で愛歌は踊るのか。否。観客は僅かながら存在しているのだ。

踊り続ける少女の背後には、六つの人影が在る！

座へと戻されることなく聖杯に留め置かれ、今、此処に現界を果たす歪みの六騎！

「嗚呼。私、またシグルドを殺すんですね……それはとても、困ります……」

槍^{ランサー}の英霊。かつて勇者を導きしもの。

首筋近くに形成された合計六つの小瓶には黒色がたつぷりと詰め込まれている。小瓶の裏から突出される針は彼女の首を穿ち、黒色の穢^{けが}れを、八年前に自らを狂わせたものと良く似た性質の毒を流し込んで脳髓と精神^{しん}を蕩^{すべ}かしてしまう。抗う術はない。

たちまち彼女は狂う。恋に。愛に。

たちまち彼女は槍^{やり}を振るう。愛して止まない蒼銀^{そう ぎん}の騎士を殺すために。

「……………ツ」

弓^{アーチャー}の英霊。かつて世界を割りしもの。

その双眸^{そう ぼう}に映るのは聖杯戦争の血塗られた行方のみならず、やがて地上へと躍り出て蹂躪^{じゅうりん}を果たす獣と自分たちの在り方か。見据えた未来へ彼は歩むしかないだろう。拒絶は許されない。少女に従うしもべとして彼は造り直された。

故に彼は、触れるものすべてを砕く黒色の雨を降らせるだろう。

誰より古く尊きもの、ウルクの都を統べた黄金の英雄王^{たお}を斃^おすために。

「小癪^{こ しゃく}——」

騎^{ライダー}の英霊。かつて地上を治めしもの。

荒ぶる古代の王としてではなく、破壊をもたらす尖兵^{せん べい}として彼は特に念入りに造り直されている。黒き弓兵と共に彼は地上を砕き尽くす。その身と同じく漆黒へと変じた神船と神獣を自在に操り、黒き太陽の光を以て万象を砕き尽くすのだ。

太陽の輝きを暗黒の輝きに変えて、すべてを照らす代わり、すべてを闇に包む。

まるで地上の王の如くして振る舞う黄金の英雄王を砕き尽くすために。

「ヒヒ、ヒャハハ！ 長かったぜえ、やあっとジキルの野郎は引っ込んでくれたかよ！」

狂^{バーサーカー}の英霊。かつて大悪を抱きしもの。

今や主体は逆転した。悪を表、善を裏として彼は黒き泥より生まれ落ちた。人間としての姿など最早一時間と保つまい。薄く開いた唇から悪の瘴気^{しやう き}を排出しながら、血に滾り、小さな主人の号令^わが下るのを待ち侘びる。

彼は狂獣となって鉤爪^{かぎづめ}を振るい、剣の如き大牙の生え揃った顎^{あご}で喰らい付く。

伝説に名高き赤き槍を携えたクランの猛犬を砕き、鮮血^{すす}を啜るために。

「御命令を。マスター」

術^{キャスター}の英霊。かつて希望を広めしもの。

白き衣を脱ぎ捨てて、絶望の衣をこそ纏って彼は魔術を行使する。四大よ今こそ狂い果てて泣き叫べ、五大^{ことごと}よ悉く世界を呪って朽ち果てよ。あらゆる愛を認めながら、あらゆる愛を侵し、聖杯戦争が向かうべき暗黒の成就のために尽力する。

世界を救わんとする者の前に彼は立ちはだかつてみせる。

勇者の希望を打ち砕くために。否。クランの猛犬と、相対するために。

「すべて。すべて。マスターの想うがままに」

影^{アサシン}の英霊。かつて愛を求めしもの。

東京地下にたゆたう黒色にとぷりと全身を浸して、すべてを死に変える。今や黒き泥を毒の波として自在に操り、彼女は追い縋^{すが}る。人間と英霊の区別なく、逃れられる者などただのひとりもいるものか。音もなく迫る毒の海の前に、あらゆる力は無力に過ぎない。

黒き徒波^{あだなみ}はいずれ毒の大津波となって極東の都市を覆い尽くす。

八年前に相対したかも記憶定かならぬ、蒼銀の騎士^のを呑み込むために。

「——私のセイバー！ 私だけの王子さま！」

黒の英霊^{はべ}たちを侍らせながら、沙条愛歌は暗黒に舞い続ける。

優美^{けんらん}に。絢爛に。

秘めた愛そのままに、笑顔を輝かせながら。

愛歌。黒き六騎。そして、蠢動^{しゅんどう}する巨大なる黒き粘塊。

此処に、世界を蹂躪せしめる軍勢が完成する。人々が生きる一九九九年の“現実、という薄皮を容易に圧壊させ得る、甚大、膨大なる魔力をその身に秘めたものども。醜く震える不定形の存在から八年前と同様に“頭、を形成しようとして蠢く^{おお}巨いなる獣、遠からず完成するその

“頭、には、世界すべてを我が物として操るに足る力を秘めて、哄笑^{こうしょう}する根源の姫が今度こそ鎮座するに違いない。

是^{これ}を、誰が倒す。誰が救う。

否。否。否。

人間^{ヒト}は誰も、この危機に立ち向かえはしないだろう。

引き裂かれ両断されるだけだ。抉^{えぐ}られ貫かれるだけだ。蒸発し雲散霧消するだけだ。押し潰^{お つぶ}されるだけだ。物言わぬ骸^{むくろ}となって操られるだけだ。侵され溶かされるだけだ。ただ、世界とは絶望という大海であると思い知らされて、誰も手の届かない最果てで、呻^{うめ}き、叫び、どれだけ噎^{むせ}び泣いても助けられはせず、無惨そのものと化して死に果てる。

例外はなく、希望もない。

人よ、お前たちは此処から終わりを迎えるだけだ。

——だが。或いは。

——再び、聖剣を携えた騎士が地上に顕^{あらわ}れていたとしたら？





「僕は、セイバー。きみを守る——サーヴァントだ」



そう――

そうだ。希望は潰えず。光も。恐るべき暗黒の大悪に吞まれぬものが、世界には在る。

時を超えて、蒼銀の英霊は世紀末の極東都市へと姿を見せる。

輝ける聖剣を携えて。

きっと、聖杯を巡り新たな六騎と死闘を繰り広げるのだらう。

だが、やがて真なる決着の時は来たる。

命を懸けて戦った二騎、古き英雄王と無双の猛犬に並び立ちながら、

かつて相争った黒き六騎の悉くを斃し尽くし、大いなる獣と相対し、世界を救う――

己が運命と定めたひとりの少女を、その手で、再び守るために。

救国の王者ではなく。

救世の聖者ではなく。

ただひとりの、

誓いを秘めた騎士として。

(完)

後書き（※注意 ネットバレを含みます）

桜井 光

聖杯戦争終結。

模造聖杯は遂に起動の瞬間を迎え、終末が咆哮する。

最後の夜明けと共に十四の命が果てへと至る。

神秘と幻想、想いと願い、数多の交差によって紡ぎ出された断片の果て――

本作は、ゲーム、コミック、アニメーション等の複数媒体で展開中のTYPE-MOON作品『Fate/stay night』の原典小説を原案として形作られた、『Fate/Prototype』のスピノフ小説です。一九九九年の東京を舞台として描かれる『Fate/Prototype』に対して、本作はその八年前――一九九一年の東京で繰り上げられた最初の聖杯戦争を、複数の“断片”^{フラグメント}として紡ぐものです。

最終巻の運びとなりました。

読者の皆さまから多くの応援を戴けたからこそ、此処まで辿り着けました。

綴られてきた物語の幕、聖杯戦争の結末、どうかお楽しみ戴けましたら幸いです。

企画当初から決まっていたことが二つあります。

第一に、ラストシーン。TYPE-MOON十周年記念アニメーション『Carnival Phantasm』三巻の映像特典である『Fate/Prototype』、そして『Fate/Prototype Animation material』をご覧になった方であれば無論ご存知であろう、あのシーンです。

第二に、沙条愛歌^{さ じょう まな か}の正体について。並ぶ者なき全能の存在であり、恐らくは“根源”の渦に繋がってさえいるであろう少女は、どのようにして恋に落ちたのか。或いはどのようにして、是なる全能の神は恋する少女となったのか。

後者については連載開始前、本作が企画として立ち上がったばかりの頃に奈須きのこさんから手渡された“真実”にすべてが記されていました。深い納得と同時に、大いに衝撃を受けたと記憶しています。七人七騎が相争う血塗られた儀式であり、世界の危機を招かんとする災厄を秘めた陰謀であり、運命の騎士がやがて正義へと至る戦いである聖杯戦争が、まさか、そんなにも――あれから暫くの時を経て、真実はこうして明らかになりました。

そして。定められたラストシーンを以て蒼銀の物語は終わりを迎えます。

ここからは謝辞を。

奈須きのこさま。『Prototype』に連なる九一年の物語を預けて下さったこと、三年半近くも連載と発刊を見守って戴けたこと、心より感謝いたします。連載終了時に掛けて戴いたお言葉が今も胸に温かく残っています。本巻解説と共に、きっと一生の宝物です。

武内崇さま。振り返るに、武内さんからはいつも有形無形のお力添えを受けていたのだと強く実感しています。ありがとうございます。連載最終回掲載号の月刊コンプティーク誌へのご寄稿コメント、そのご期待にお応えできるよう努めたく思います。

中原さま。全五巻、本当にお疲れさまでした。物語世界をかたちとして現す挿絵や表紙、それらをいずれも見事なフルカラー・イラストとして数多く描き出して戴けたことで、本作は真に完成へと至りました。ありがとうございました。

森瀬繚さま、三田誠さま、東出祐一郎さま、成田良悟さま。長きに渡る沢山のご助力、ありがとうございます。この御礼はいずれ必ずお返しいたします。

デザイナーのWINFANWORKSさま、平野清之さま、そして月刊コンプティークの小山さまと編集部・営業部の皆さま。ありがとうございます。最後までご一緒にできて嬉しいです。

そして、この物語を楽しんで下さったすべての方々に、幾万の感謝を。

それではまた。

どこかで。

解説

「欠片の欠片」 かけら

なす
奈須きのこ

多くの断片があった。

ささやかな善意から道を踏み外したもの。その善意に希望を見た青年。
分不相応な安い夢に沈んだもの。彷徨い続けながら泡沫と消えた少女。
ただひとりの聖者に救われたものたち。その価値を以て世界を救わんとした王。
魔術師から父に返ったもの。純粋な志ゆえ、純粋な恋心を見誤った賢者。
戦士から母に戻ったもの。それすら佳しと笑った勇者。
冷徹な氷から刹那の炎に変わったもの。恋慕に狂いながら愛を汚さなかった女。
そして、天使から少女に変わったもの。そして、ただひとりの為を誓った騎士。

彼らの物語はここで一旦の終わりを示した。
いつたん

後に続く、最初に用意された結末に向けて。

原初の『聖杯戦争』、その前夜。英霊召喚の元となった人類悪・ビーストの存在と、それを従える少女の恋の始まりと終わり。

私はそれを読み解く者であり、受け取る者であり、その足跡を胸に刻む者である。

——さらば、美しい断片よ。

つづ
綴られた多くの断片は、うつろな空洞をここに保管した。



この作品がどのような成り立ちで生まれ、何に続くのかは桜井光氏が細やかに解説してくれてい

るので割愛する。

自分がここで語るべき事は、『蒼銀のフラグメンツ』という物語と、この本を手にとってくれた読者の皆さんと、作者である桜井光氏への感謝の言葉だけである。

『Fate/stay night』は2004年発売の作品だが、その元となった『Fate』はさらに大昔の未完作品だった。

今よりずっとずっと若かったある未熟な作家が、無邪気に『世界を背負わされた少女と、その少女を救う少年』の物語を夢想した。どこにでもある作家志望者のエピソードで、物語は結末を迎える事なく記憶の底に沈み、数奇な変遷を経て『Fate/Prototype』という短編アニメーションになった。

その、本当に「ただ、そういう夢があった、という断片を見たひとりの作家が「その夢を受け取らせてくれないだろうか」と尋ねに来てくれた日の事を、私は今も覚えている。

そして、その人物が自分にとって大きな衝撃を与えた作品（^{せき えん}赫炎のインガノック）の作家であった事は二重の驚きと喜びだった。

浜辺に流れ着いた、ガラスの瓶に入った手紙のようなものだ。

記憶の底に沈んでいた箱が、一人の才能ある作家の手に渡り、新たに開かれる。

それから三年半が経過した今。蒼銀の断片は、かつての自分が夢に見ていた以上の広がり、世界の深さを見せてくれた。

こんな^{ろまん}浪漫に満ちた作品との関わりは、この先そうあるものではないと思う。

その^{つな}繋がり、その出会いに感謝を。

本当に断片的な設定を頼りに魅力的な物語を書き上げてくれた桜井光氏。

相棒となって世界を彩ってくれた^{なか はら}中原さん。

そして、異端ながら新しい『Fate』を手にとってくれた読者の^{あなた}貴方。

このお礼は、いずれ、また。

この作品から生まれた人物たちに、新たな舞台を用意する事で。

イラスト／中原

装丁／WINFANWORKS

本文デザイン／平野清之

フェイト プロトタイプ そう ぎん
Fate/Prototype 蒼銀のフラグメンツ 5

さくら い ひかる
文／桜井 光

なか はら
イラスト／中原

タイプ ムーン
原作／TYPE-MOON

角川
 文庫

2017年4月26日 発行

(C)Hikaru SAKURAI 2017

(C)NAKAHARA 2017

(C)TYPE-MOON

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

単行本コミックス『Fate/Prototype 蒼銀のフラグメンツ (5)』

2017年4月26日初版発行

発行者 青柳昌行

発 行 株式会社KADOKAWA

〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3

電話 0570-002-301(カスタマーサポート・ナビダイヤル)

受付時間 9:00～17:00(土日 祝日 年末年始を除く)

<http://www.kadokawa.co.jp/>



BOOK★WALKER

Table of Contents

目次	13
ACT-1	14
ACT-2	50
ACT-3	78
ACT-4	108
ACT-5	143
ACT-Final	175
Fate	221
後書き	265
解説	267
奥付	270